

みれん

シュニッツレル Arthur Schnitzler

森鷗外訳

青空文庫

たそがれどき
黄昏時たそがれどきがもう近くなつた。マリイはろは台に腰を掛けてから彼か
此これ半時はんときばかりになる。最初の内は本を読んでいたが、しまい
にはフェリックスの来るはずの方角に向いて、並木の外れを見て
いたのである。それが今立ち上がった。こんなに長く待たせられ
た事はない、陽気が少し冷たくなつた。そのくせ空気にはまだな
んとなく五月の末の和かみがある。

アウガルテンの公園には、もうたんと人がいない。散歩をして
いる群むれは、今少して締められるはずの門の方へ足を向けている。

マリイが出口の近所まで来た時、やつとフェリックスが見えた。約束の時間より後れたくせに男はゆつくり歩いている。女と目を見合せてから、少しばかり足を早めたばかりである。女は立ち留まって、男の来るのを待っていた。女の不性気に差し伸べた手を男は微笑ほほえみながら握った。

「まあ、あなたこんな遅くなるまでお為事しごとをなさらなくてはならないの。」こう云いった女の声は穏かな不平の調子であった。男は女の手先を右の肘ひじに掛けさせて歩き出したが別に返事はしなかった。

女が「どうなすつたの」と問い返した時、男はやつと返事をした。「そうだよ。それに己おれは忘れて時計を見ないでいた。」

女は横から男の顔を覗き込んだ。どうもいつもより顔の色が蒼あおいようである。そう思ったので、女は優しい声をして云った。

「どうぞでしょう。あなたも少しわたくしに構って下さるようになすった方が好よくはないでしょうか。お為事なんぞは、少しの間廃よしておしまいになってね。御一しよに散歩でもしようじゃございませんか。ねえ。内から御一しよに出る事にして。」

「そうさなあ。」

「わたくしこれからあなたを手放さないようにしようかと思いますの。」

男はびっくりした様子で、急に女の顔を見た。

「どうなすったの」と女は問うた。

「なんでもないよ。」

二人は公園の出口に来た。日の暮^ひ方^{くれがた}の町の賑^{にぎわ}いが、晴れやかに二人の周囲^{まわり}を取り巻いた。市中一般に、春の齎^{もたら}した喜びが^{ひろが}拡^{ひろ}つていて、それが無意識に人々に感^かぜられると見える。

「今から一しよに行くのと丁度^よ好^とい処^{ところ}があるが、知っているか。」

「どこでしょう。」

「プラアテルへ行くのだよ。」

「わたくし厭^{いや}。こないだもあんなに寒かったじやありませんか。」

「でもこうして町を歩いていると、蒸暑^いいといつても好^いい位だ。」

行^すって直^すぐ帰^すったって好^いい。一しよに行こうじやないか。「男は何か外の事を考えている様子で、切れ切れにこう云った。」

「変な物の言いようをなさるのね。」

「変なつて、どう変なのだい。」

「何を考えているの。あなたと並んで歩いているのはわたくしよ。」

男は氣抜けのしたような目め附つきで女をじつと見た。

「どうしたの」と、女は心配そうに云つて男の肘をしつかり握つた。

「うんうん。蒸暑いなあ。本当だ。己は外の事なんぞを考えてはいないよ。もし少し位外の事を考えたつて、おこるのじゃないよ。」男は氣の散るのを強いて直そうとする様子でこう云つた。

二人は横町を抜けてプラアテルの方へ歩いている。どうもフェ

リックスはいつもより詞少^{ことば}なである。もう方々に明りが点き始めた。

二

女は突然問うた。「あなたきようアルフレットさんのところへいらっしゃったの。」

「なぜ。」

「だって行くといっていたじゃないやありませんか。」

「そうだっけな。」

「ゆうべなんだか力抜けがしたようだから行って見て貰^{もら}おうか知

らと云いつたでしよう。」

「それはそう云いつたよ。」

「それなのにおいでなさらなかったの。」

「いいや。行いかなかつた。」

「あの、きのうは工合が悪いと云いつていたのでしよう。それなのにきようプラアテルのような湿しつぽい処ところへ行くのはあんまり不養生ふじやうじゃなくて。」

「なに構かまうもんか。」

「そんな事を言いつちやあ厭いや。それではまるで体を悪わるくしておしまいなさるわ。」

男は泣なき出しそうな声で返事をした。「そんな事を言いわないで、

一しよに行くのだよ。どうも己おれはプラアテルが見たいのだから。こないだ一しよに行つて愉快に思つた処へ、もう一遍行つて見たいのだ。それあの四阿屋あずまやだな。あそこなら冷たくはないよ。」

「ええええ。」

「なに冷たいものか。きようは一体に暖かいのだ。内へ帰るにはまだ早過ぎる。それだといつて、町で晩飯を食うのは厭だ。己はきようは町の料理屋の窮屈な部屋すわに坐りたくないのだ。煙の中すわにいるのは己には毒だ。それに人の大勢いる処も厭だ。やかましい人の声を聞くのがつらい。」最初は口早に、いつもより声こわだか高に言つていたのが、段々末の方になると声かすかが幽かすかになつてしまった。マリイは前より堅く男の肘を握つた。なんだか心細くなつたの

である。それに今物を言ったら、涙声になりそうなので黙っている。

プリアテルの静かな四阿屋で、緑の木立の中の春の夜を味いた
いという男の憧憬あこがれが女にも伝わった。そして暫しばらく一しよに黙つ
て歩いている内に、男の唇の上に、寛ゆるやかな、鈍い微笑ほほえみの浮かん
だのを、女が見附みつけた。男は女の方へ顔を向けて、そのとたんに
偶然出た微笑を、楽しさの微笑みにして見せようとした。しかし
男の性質を底まで知り抜いている女には、その微笑みのわざとら
しいのが、容易たやすく悟られた。

二人はプリアテルに着いた。本通りから曲つて初めての並木道
は、向うを見ればほとんど真っ暗である。それを通り抜けた処に

ちよいとした料理屋がある。その周囲まわりの広い庭には、ほとんどあかりも点つけて無い。巾きれを覆おわない卓つくえが並べてある。椅子いすがそれに寄せ掛かけてある。その傍そばに、緑色に塗ぬつた、ひよろ長い柱はしらの上に、円がらすい硝子がらすの明ともりが点ともしてある。濁くつた紅くれないほのおの焰ほのおがちらちらとして動まいている。客まじが二三人坐まっている。その中にこの料理屋の亭主まじも交まっている。

マリイとフェリックスがその前を通る時、亭主は立たつて、烏打帽カウチを脱ぬいで礼れいをした。二人は四阿屋カウチの戸かどを開ひらけた。中には活栓コックで細こめた瓦斯がすの火かが明あるくなったり暗くくなったりしている。片隅かどの方かたに給仕かどの少年せうねんが坐まつて居眠いねみりをしていたが、慌あわただしく立たつて、火かを明あるくして、客きやくの外がい套とうを脱ぬぐ手伝てんいをした。

二人は部屋の隅の薄暗い、静かな処に場所を取って、二つの椅子を近く寄せて腰を掛けた。それから余り選り嫌いをせず、飲物と食物とを註文した。

給仕の行つてしまつた跡は、二人きりになつた。ただ入口の方から濁つた赤色の火が見えているばかりである。部屋の隅は薄暗くなつている。

三

二人はまだ強情に黙つていた。とうとうマリイが堪え兼ねて、顫るいごえ声をして言い出した。「あなたどうしたのだから、そう云つて

下さいよ。」

男の唇の上にはまたさっきの微笑ほほえみが現われた。「なんでもないよ。そんな事を聞くものじゃない。己おれの機嫌きげん買かいな事は、お前知っているはずじゃないか。それともまだ知らないのかい。」

「それは知っていますわ。でも、今のあなたの様子は、いつも機嫌を悪くした時とは違うわ。何か別に厭いやな事があるのだわ。何かわけが無くてはならないと思うの。それをなんだか云って下さいよ。お願いだから。」

男はじれったそうな顔をした。丁度そこへ給仕が註ちゅうもん文ぶんしたものを持って来た。男はそれを好いい事にして、女が「仰おつしやいよ、仰おつしやいよ」と云つても、給仕の方を目で見て、じれったそうな

身振をするばかりである。給仕は出て行つた。

「さあ二人きりになりました」と、マリイは云つて、椅子いすをぴつたり傍そばへ寄せて男の両手を取つた。「何かあるのでしょうか。わたくしどうしても聞かずに置くわけには行きませんか。まさかもうわたくしが厭になつたのじゃないでしょうね。」

男は黙っている。女は男の手に接吻せつぶんした。男はその手を徐かしずかに引いた。「どうなすつたの。」

男は助けを求めるようにあたりを見廻みまわした。「廃よしてくれ。そんな事を聞かないでくれ。そんなに人をいじめるものじゃない。」

女は男の手を放して、顔をじつと見た。「わたくしどうしても聞かないで置くわけには行きませんか。」

男は立ち上がって、深い息をした。それから両手で頭あたまを押えて云った。「ほんとお前は己を氣違いにしてしまう。もう問わずに置いてくれ。」こう云って、そのまま立っていて、何かじつと見詰めている。女は心配そうに男の見ている方角を見たが、男は空くうを見ているのである。

男は腰を掛けた。息使いが前より静かになって、顔には疲れたような優しみが拡ひろがった。それから数秒時間立つと、今まで自分を襲っていた恐怖が全く消えてしまった様子で、小声に優しく、「飲まないか、食べる物も来ているぜ」と、女に言った。

女は男の云うなりに、ナイフとフォークとを手を持ったが、心配氣に「あなたは」と云った。

「己も遣るよ」とは云つたが、男はやはり動かずにいて、飲物にも、食物にも手を触れない。

「それではわたくしも食べられないわ」と、女が云つた。

四

男はようようの事で飲み食いをし始めた。しかし一口食つたかと思うと、黙つてナイフもフォークも置いてしまつて、手で額を支えて、女の方を見ないでいる。女は上唇と下唇とを堅く結んで、暫く男の様子を見ていたが、その額を押さえている手を引き退けて、隠していた顔を覗き込んだ。

男の目には涙が一ぱいになっている。女がそれを見て、「あら、フエリツクスさん」と声を立てるや否や、男は泣き出した。さも思い迫ったような^{すすりなき}歎^{なげ}をするのである。女は男の頭を自分の胸のところへ引き寄せて、髪の上を撫^なでて、額に接^{せつ}吻^{ぶん}して遣^やつた。それから涙を口で吸い取って遣ろうとした。続いて「フエリツクスさん」と呼んで見た。男は次第に泣き止^やんだ。「どうしたのか仰^{おっし}やいよ。」

男は女の胸に顔を埋^{うず}めている。そして鈍い、重くろしい声で、切れ切れに云^いった。「己^{おれ}はどうしても言わずに置こうと思つたのだ。マリイ。聞いてくれ。もう跡たつた一年だそうだ。それでおしまいだというのだ。」言^{おわ}い畢^{おわ}つて男はまた声を立てて劇^{はげ}しく泣

き出した。

女は死人しにんのような顔かおいろ色いろになつて、口を開あいたまままで聞いてい
る。男の言う事が分らない。分らせたくない。冷やかな、恐しい
ある物が吭のどを締め付つけているようである。

それから突然女が「フェリックスさん」と叫んで、男の前に身
を倒して、その時力無く俯うつむ向むいた男の泣顔なみかほを見た。男は女が自分
の前に跪ひざまずいたのを見て、「お立ちよ」と囁ささやいた。女は器械きがい的に、
言うなりに立ち上がつて、向いに腰を掛けた。もうなんにも問う
事も言う事も出来ない。

およそ二三秒時間二人とも黙っていたが男が突然空くうを睨にらんで、
何か不思議な重い物が自分を押付けるように感じたと見えて、声こえ

高く「ああ、溜らん、溜らん」と云った。

女はやつと声が出て、「行きましようね」と云ったが、それより上の事は言われなかった。

「うん行こう」と、男は何か体から振落すような身振をして云った。それから給仕を呼んで勘定をして、二人は足早に四阿屋あずまやを出た。

外では春の夜の沈黙よが二人を包んだ。暗い並木を通る時マリイは立ち留まって、男の手を握って云った。「わけを話して下さいな。」

男はすっかり落ち着いた。そして今女に言うことは簡単で、さっぱりしていて、ほとんど何も変った事ではないらしく聞えた。

男は女に取られていた手を引き放して、女の頬ほおをさすつた。そこは真つ暗で互に顔が好よく見えない位である。

「ミツチエルや。びつくりしてはいけないよ。なにしろ一年というものは随分長いものだからね。実は己はもう一年しか生きていないのだ。」

「あなたそれは気が変になつてそんな事を仰しやるのでしよう。」
女の声は叫ぶようであつた。

「一体己がこんな事をお前にいうのは吝けちなのだ。馬鹿ばかだと云つても好いいかも知れない。しかし考えて見てくれ。そういう事を自分一人だけが知つていて、絶えずその事を思いながら、心寂しく歩まわき廻まわつているという事は、事に依よつたら己にはどうせ久しくは出

来なかつたのかも知れない。事に依つたらまたお前の方でも己というものが一年先にはいないのだという考えに段々慣れてくれる事が出来るかも知れない。兎とに角かくこうしてぼんやり立っていたつて為しかた方がない。一しよに行こうじゃないか。己の方ではもうその考えに馴染なじんでしまっている。アルフレットのいう事なんぞはもう疾とうから己は当あてにしていけないのだ。」

「それではあなた、アルフレットさんの処ところへはおいでなさらなかつたのですね。あの方でなくてはほんとの事は分かりやしませんわ。」

「実はこの二三週間というものは、どうも己の病氣の事が不確ふたしかなので、己は氣になつて溜まらなかつたのだ。それが今は大ぶ好

くなつた。兎に角實際の事が分かつたのだからなあ。己は大学のベルナルドさんの処へ行つたのだ。為合せしあわにあの人は本当の事を言つてくれた。」

「なんだか知れるものですか。その方の言つたのが謙うそかも知れないわ。あなたが御用心をなさるようにおどかしたのかも知れないわ。」

五

「いや、いや。お前は知らないが、己おれは極ごく真面目まじめな話をしたのだ。己はどうしても本当の事を言つて貰もらわなくてはならないとい

つて、ベルナルドさんに迫つたのだ。お前の身の上も、この病氣次第でどうにかして置かなくてはならないのだからな。」

「フェリックスさん」と叫んで、女は両手で男に抱き付いた。

「そんな事は余計な事だわ。あなたが死んでしまえば、わたくし一日も生きてはいませんわ。一時間も生きてはいませんわ。」

「さあ行こう。余計な心配をしないでな」と、男が小声で云つた。

二人はプラアテルの出口の所に来た。歩いている周囲まわりが賑にぎやかになつた。明りも点ついていて物音もする。町を走る車輪の音、電車の鈴ベルや笛の音、頭の上を走る重い汽車のはためく音などがする。

女はぎつくりした。この身の周囲まわりの生活が、突然自分を嘲笑あざわらつて、敵意ひようを表しているように感ぜられて、切なかつたのである。

女は男の手を引つ張つて、おおどおり大通よを除けて静かな横町から内へ
 帰り掛けた。

女は馬車を雇う事を男に勧めようかと一寸ちよつと考えたが、それを
 口に出す事を躊躇ちゆうちよした。ゆつくり歩けば好いと思つたからで
 ある。

女は男の肩に頭をぴったり寄せ掛けて、中ちゆうおん音で云つた。

「うそ嘘だわ。あなたが死んでしまふもんですか。もしあなたが生き
 ていなければ、わたくしも生きてはいないわ。」

「まあ、そう云わないものだ。もう少しすると、お前の考えだつて
 變つて来る。己はもう何もかも好くよ考えて置いたのだ。実に妙な
 ものだよ。もうこれまでで、これから先は駄目だとはつきりと限

界を立てて見せられたのだからなあ。」

「そんな界さかいなんぞがあるものですか。」

「それがあるから妙なのだよ。ほとんど想像の出来ないような事ではないか。己だつて今こう云っている一刹那せつなにはどうも謙のうに思われてならない。実に不思議なわけじゃないか。こうしてお前の傍そばを歩いていて、大きな声をしてお前に何か饒舌しゃべつていくせに、一年先になると冷たくなつて、事に依よつたら腐つてしまつていくというのだからな。」

「お廃よしなさいよ。お廃しなさいよ。」

「その時お前はやはりこのままでのだ。このままそつくりしているか、それとも己が死んだ跡で少しは泣くだろうから顔が今

よりは少し蒼あおくなっている位なものだろう。それからまた夜よるが来る昼が来る夏になる秋になる冬になる。それから春が来る。そうすれば己の一週忌だ。おや。どうしたのだい。」

女はしくしく泣いている。涙が頬ほおから領筋えりすじへ伝わっている。

男の顔には絶望ほほえの微笑ほほえみが現れた。そして息を齒の間から出すような囁ささやき声で、「堪忍しろ」と云った。声は咳しわが枯れて慘酷に聞えた。

女は歩きながら、すすりなき 歎なげ をしている。男は黙っている。丁度市の公園の前を通っている。暗い、静かな、広い町の上へ、公園の木立の中から、接骨木にわとこの花の香かが、軽く悲しげに吹いて来る。

二人は徐しずかに歩いている。公園の反対の側には単調な灰色や黄色

に見える高い家が並んでいる。夜の青空に聳そびえている、カルルス
 キルエの大屋根おおやねが、次第に近くなつて来る。二人はまた横町へ曲
 つて、間もなく自分達たちの住んでいる家に着いた。

薄暗い明りの点たれいている梯子段はしごだんを、二人は徐かに登つて行く。
 誰かの家の窓や戸の奥で、女中達の話して笑つている声がする。

二三分立つと、二人は我が家わがやに這入はいつて戸口の戸を締めた。窓
 の戸は開けてある。寝台ねだいの傍そばに据えてある小卓こづくえの上には、常の
 花瓶かびんに赤い薔薇ばらの花が活いけてある。その匂においが部屋に満ちている。
 窓の外には幽かすかに物音がしている。二人は窓から外を覗のぞいて見た。
 向いがの家は明りも点いいていない。総すべてひっそりしている。男は長な
 椅子がに腰を掛けた。女は窓の錠戸よろいどを締めて窓掛を引いた。それ

から蠟燭ろうそくに明りを点けて卓つくえの上に置いた。男は女のしている事を見ずに考え込んで坐すわっている。女は傍そばに寄つて、「フェリツクスさん」と呼んだ。男は仰向いて微笑みながら、「なんだい」と云つた。

六

その男の声が優しく静かに響いた時、女は言うに言われぬ、切ない感じに襲われた。どうしてもこの男を死なせるわけには行かない。そんな事があつてなるものか。それは嘘うそに違いない。そんな事のありようがない。そう思う心を男に話して聞かせようと

思つて、男の前に蹲しゃがんで、下から見上げたが、声が出なかつた。そこで頭を男の膝ひざに載せて泣いた。男は両手で女の髪を摩さすつて、「泣くのじやないよ」と優しく囁ささやいた。それでも泣くので、「もう廃よせよ」と言い足した。

女は頭を上げた。そしてなぜと云いうわけもなく不思議な希望が萌きざして来た。「嘘うそでしょう。ねえあなた。」男は女に長い熱した接吻せつぶんをした。そしてほとんどすげないように、「本当だよ」と言い放つて立ち上がった。

男は窓の処ところに行つて、その蔭かげになつてゐる処に立つてゐる。蠟燭ろうそくの光は男の足の所にちら付いてゐるだけである。暫しばらくして男が言い出した。「どうも為方しかたがないからお前がそういう考えに

慣れてくれるより外はないよ。死ぬるといえば変なようだが、一年立てば別れるのだと思えば、それまでの事ではないか。己おれが傍そばにいなくなつたと思うだけで、この世にいなくなつたのだという事を知らずにいても好いいいのだ。」女はその詞ことばを聞かない様子で、顔をびつたり長椅子ながいすに押し付けている。男は詞を続けた。「なに哲学上に考えて見れば、そんなに恐ろしい事ではない。まだこれから楽しむ時が大ぶあるのだ。そうじゃないか。」

女は涙のない、大きい目をして突然男を見た。そして駈かけて来て両手で抱き付いて、胸と胸とを押し付けた。そして囁ささいた。

「わたくし一所しよに死にますわ。」

男は微笑ほほえんだ。「なんだ。そんな子供らしい事を言わないもの

だ。己はお前が思うほど吝けちな性根の男ではない。それにお前に己の運命を分たせる権利は、己は持つてはいないのだ。」

「でもあなたが居なくなつては、わたくし生きていられないのですもの。」

「考えて見ろ。己というものの世の中にいる事を知らずに、お前は長く生きていたのだ。それからお前とこんな中になつてからも一年になるが、そのお前と知り合になつた時、己はもう今の病氣を持つていたのだそうだ。ただ己がそれを知らずにいただけの事だ。知らずにはいたがなんだかそんな事があるのではないかと己にはぼんやり知れていた。」

「いいえ。あなた今だつてそんな事が本当に分かっているのでは

ないわ。」

「いや。ところが己にはそれが分かった。分かったからきようお前に打明けるのだ。お前の考え次第できようから己と別れてくれても好いのだ。」

女はいよいよ緊きびしく抱き付いた。男が、「どうだ、己のいう通りにしないか」と云つても、女は返事をせずに、顔を見上げている。相手のいう事が分からない様子である。

「お前は綺麗きれいだなあ。そして底の底まで健康なようだ。お前のような人間は人生に対して十分の権利を持っているのだ。どうぞ己に構わないで、別れてしまつてくれい。」

「いいえ。わたくしはあなたと一しよに生きたのですから、あな

たと一しよに死ななくては」と、叫ぶように女は云った。

男は女の額に接吻した。「そんな事をさせるものか。己が決して承知しない。どうぞそんな考えを綺麗あたまに頭のから除けてくれい。」

「どうぞそう仰おっしやらないで。わたくしは誓います。」

「待った。そんな事をするものじゃない。そんな事をするのちになつてから、あの時の誓いを取消してくれと、己に頼むようになるからな。」

「わたくしをそんな女だと思っていらっしゃるの。」

「なに。お前を疑っているのではない。お前の己を愛していくれる事は、己も好よく知っている、お前はあたりまえで己を見棄みすてるような事はない。しかし。」

「いいえ。どんな事があつてもわたたくし別れるのは厭いや。」

男は首を振っている。女は身を寄せ掛て、男の両手を取つて、それに接吻した。

「ほんとにお前は可哀かわゆい奴やつだなあ。それを思うと、己は悲しくてならない。」

七

「いいえ。悲しくなんぞお思いなすつては厭いや。たとえ二人の身の上にはどんな事があつても、二人は別れずに、お互の運命を分つのだと云いつて下さい。」

男は真面目まじめにきつぱりと云った。「いや。そんな事は廃よせ。己おれはこれでも並の人間とは違う積りだ。並の人間にするような事はしたくない。己には何もかも分かっている。今お前が始めて受けた苦痛に促されてそう云つてくれるのを、己が好いい事にして同意して、その詞ことばに酔わされてしまつては、己は吝けちな野郎になつてしまふ。どうしても己は行つてしまわなくてはならない人間だ。そしてお前は跡に残るのだ。」

女はまた泣き出した。男は女の髪を撫なでて女に接吻せつぶんして宥なだめようとしている。二人とも窓の処ところに立つたまま、暫しばらくはなんにも言わない。こうして何分か立つた。蠟燭ろうそくは段々燃え下がつて行く。

暫くして男は女の体を放して、長椅子ながいすの処へ行つて腰を掛けた。なんとも言いようのない疲労に襲われたのである。女は跡から付いて行つて傍そばへ腰を掛けた。そして男の頭あたまを引き寄せて、自分の肩へ寄り掛からせた。男は優しく女と顔を見合つて、目を閉じたが、直すぐに寐ね入いつた。

淡ひやく冷やあに暁あが這かつつききは、
と、自分の頭は女の胸に寄せ掛けてあつた。そして女はぐつすり寐ねていた。男はそつと起きて窓の処へ出て町を見下ろした。明方の灰色な空気が漲みなぎつてまだ人影はない。体がぞくぞくした。数分間すると、男はそのまま寝台ねだいの処へ行つて、その上に倒れて天井を見詰めていた。

男が二度目に目の覚めた時には、もう室内がすっかり明るくなつていた。マリイは寝台の縁ふちに腰を掛けている。接吻して自分を覚してくれたのである。二人は微笑ほほえみ交した。ゆうべの事は皆悪みない夢ではなかつただろうか。男も自分の体がすっかり健康で何事も無いように思われる。外には日が照っている。町からは賑にぎやかな物音がする、何もかも活動している。向いの家には窓の戸が処しよし々よ開けてある。部屋の卓つくえの上には、いつもの朝と同じように朝食しよくの支度がしてある。部屋は明るい。隅々まで日がさしている。細かい塵ちりが日光の中で踊っている。総すべて希望の影が満ちている。

医学士が昼食後の葉巻を喫ひるしょくごんでいるところへ、女の客が来た。まだ患者を見るはずの時間にはなっていないので、学士は少し不愉快に思った。そこへ客は這入はいって来た。

「マリイさんじゃないか」と、学士は驚いて呼び掛けた。

「こんなに早く参ったのですけれど、おおこりなすつては厭よ。

御烟草おたばこはどうぞそのまま上がっていて下さいまし。」

「それじゃあ御免蒙ごうむって喫むよ。しかしなんの用ですか。どうかしたのですか。」

女は片手に日傘を持ったままで、片手を卓つくえの上に突いて、学士の前に立っている。「本当でしょうか。フェリックスさんがひどく悪いというのは。おや。あなたお顔の色が変りましたわ。そん

なら今までわたくしに隠していらつしやつたのね。なぜ言つて下さらなかつたの。」語氣頗^{すこぶ}る急である。

「あなたは何をいうのです。」こう言い掛けて学士は立ち上がつて、部屋の中をあちこち歩き出した。「あなたはどうかしているのだ。まあ、そこへお掛けなさい。」

「あなたわたくしの申した事に御返事をして下さいまし。」

「それはあの男は病身ですとも。それはあなたにだつて疾^とうから分つているでしょう。」

「いいえ。その事ではありません。助からないそうじやありませんか。」女の声は叫ぶようである。

「なんですと。そんな事を。」

「いいえ。わたくしは知っています。フェリックスさんも知っています。きのう大学のベルナルドさんの所へ参つてすつかり聞いて来ましたのだそうです。」

「大学の教授だつて随分見損う事があるものですよ。」

「だつてあなたフェリックスさんを何遍も診察なさつたのでしよう。どうぞわたくしに本当のところを言つて下さいまし。」

「一体そういう問題にはたしかに本当だという判断は下せないものなのですよ。」

「それはあなたが御自分のお友達ともだちの事だからと仰おつしやるのでしよう。ね、だから言われないと仰おつしやるのでしよう。仰おつしやらなくつたつて、あなたのお顔に出ているわ。あ、本当だ、本当だ。まあ、

わたくしどうしよう。」

「困りますな。まあ、気を落ち着けて下さい。」

八

女は鋭く学士の顔を見た。「本当ですね。」

「さあ。あの男は病気ですよ。それはあなただつて知っていますよ。」

「それが直らない病気なのでしょう。」

「一体なんだつてそんな事をあの男に言ったのか知らん。それに。」

「ねえ、あなたどうぞ望みが無いのなら、わたくしをいたわって無駄な望みを起させないようにして下さいまし。」

「しかしそんな事は確^{しか}と予言の出来るはずのものではないのです。随分長く生命が保てる事もあるのですから。」

「ええ、ええ、それが一年なのでしよう。」

学士は唇を嚙^かんだ。「なんだって外の医者^かの所なんぞへ行つたのでしよう。」

「それは知れていますわ。あなたが本当の事を言ってお聞かせなさらないからです。」

「下らない。実に下らない。馬鹿^{ばか}な事を言つたものだ。言つて聞かせてなんになるというのだろう。」医学士アルフレットは不平

に堪えない様子である。

この時戸が開いてフェリックスが這入って来た。そしてマリイを見て云った。

「大方こんな事だろうと思つた。」

「おい。君は馬鹿な事を遣つたね。実に馬鹿げている。」学士はこう呼び掛けた。

「君、いろんな言草は廃してくれ給え。君が友人として僕をいたわってくれた段は実に感謝する。それが好意というものだろう。」

女が詞を挟んだ。「あの大学の先生の仰やったのは。」

「廃せよ。これまではアルフレット君だつて、お前だつて、己を

騙だまして安心させて置いても好よかつたのかも知れない。しかし今から先そんな事をすれば、それは下手な喜劇というものだ。」

学士は云った。「君は無経験なのだ。僕が言つて聞せるがね、このウイインの町を歩き廻まわつてゐる人間の中には、もう二十年も前に死の宣告を受けた事のあるものが何人あるか知れないのだ。」

「しかしその宣告を受けて、宣告通りに死んだものの方が無論多いのだろう。」

学士は室内をあちこち歩いている。「第一こういう事を考えてくれ給え。きのうときようと、君の体になんの変つた事もないのだぜ。そこできようから君が前より養生をして、今までより僕と言う事を好く聞いてくれれば、それだけはたしかに得だ。丁度八よ

日前うかの事だが、僕のところへ五十になる男が遣つて来た。」

「待ち給え。分かっているよ。その五十になつた男が二十の時に不治の病だといわれて、今でも元気が好くて、子供が八人とも達者でいるというような事を君は話すのだろう。」

「まあ、そんな事だがそれが事実なのだ。実際そういう人がある。」

「しかしね、世間に奇蹟きせきというものがあるとしても、それが僕の体にあるうとは僕は思わないのだ。」

「奇蹟だと。大違いだ。僕の話すのは自然の事実だ。」

女がまた詞を挟んだ。「あの、ちよいとフェリックスさんの顔を御覧なすつて下さい。どうもわたくしには昨年の冬よりは御様

子が良いように見えるのですが。」

学士はフェリックスの前に立ち留まった。「まあ。養生をしながらはいけないのだ。これから二人でどこか山奥の方へ行つてすつかりなま懶けるのだね。」

女は学士の詞を歓迎するように答えた。「いつから行つたら好いのでしよう。」

フェリックスは遮った。「下らない。」

「それから秋になると南の方へ旅行するが良い」と学士が云つた。「それから春になるとどうしろというのだ」と、フェリックスはあざ嘲けるように云つた。

「春になるとあなた直つていらつしやるかも知れないわ」と、女

が声に力を入れて云った。

フェリックスは笑った。「直る。そうさな。兎とに角かく苦痛が無く
なっているのだろう。」

学士は憤慨した調子で云った。「僕はいつでも考えているのだが、内科の大先生なんというものは、どれもこれも心理学というものを知らないのだ。」

「そうさ。人間という者は真理には耐えないと云う事を先生方は知らないのさ。」

九

「ところがそんな真理だのなんのというものはないのだ。僕の考
えでは、先生君をおどかして、君に摂生をさせようと思つたのだ
ろう。どうもその位な事に違いない。そこで君がしつかり摂生を
して、直つてしまったところで、何も向うの耻はじにはならない。た
だ君に警戒を加えたと云いえば済むのだ。」

「もうそんな幼稚な言い草ぐさは廃やめ給たまえ。僕は教授と極ごく真ま面目めに
話した。どうしても正確なところを聞かなくてはならない理由が
あるのだという事を、向うに呑のみ込こませたのだ。詰つまり親しん戚せきの
処と分わだねえ。そういう理由は大抵向うが有力だと感じてくれるか
らね。一体もう疾とうから僕は不ふ確たしかな診断に悩なまされて、我慢が
し切れなくなつていたからね。」

学士は憤然とした。「それが違うのだ。今だって君がなんのたしかな事を知っているものかい。」

「いや。今はたしかなところを知っているよ。幾ら君がごまかそうとしたって駄目だ。僕は考えているが、こうなっては僕の最後の一年をなるべく有利に過す方法を講ずるより外はない。今に君に見せて遣る。僕はこう見えても、笑いを含んでこの世に暇いとまご乞いをして見せるよ。おい、ミイツ。泣くな。己おれがいなくなつた

跡で、まだこの世界がどの位面白いか、お前はそれを夢にも知らないのだ。アルフレット君、君はどう思う。」

「廃よし給え。そんな事を云つてマリイさんを切ながらせて、それがなんになるのだ。」

「なるほど。それはそうかも知れない。結末を付ける事は、早く結末を付けるに限る。おい、ミイツ。お前は直ぐ己と別れて、己を一人で死なしてくれ。」

女は突然学士に向って叫んだ。「あの、どうぞわたくしに毒を調合して下さいまし。」

学士は声を励まして云った。「いやはや、それでは二人共気が違っているというものだ。」

「いいえ。毒を下さいまし。わたくしはフェリックスさんが死んだ跡で、一秒時間だつて生きていようとは思いません。わたくしのこの心持をフェリックスさんに見せて遣りたいのです。なんだつてこれが分からないのでしよう。ええ、口惜くやしい。」

「おい。ミイツ。そんなら今お前に言つて聞かせる事がある。今云つたようなむちやな事をもう一遍云つて見るが好い。己はお前の目に掛からない処ところへ隠れてしまつて、生涯お前に逢あわなない事にする。お前の運命を己の体に結び付けてしまふという権利は己には無いからな。また己はそんな責任を負いたくもなんともないからな。」

学士がこう言い出した。「フェリツクス君。どうもそういう工ぐ合あいでは僕は君に直ぐに旅行をして貰もらわなくてはならない。あすよりはきよう立つが好い。そんな風になつては、君方は何をし出すか分からないから、どうも傍はたで構わずに見ているわけには行かない。僕が今晚にも君方を停ステ車エシ場ヨンまで送つて行こう。先さずこの土

地を離れて、清い空気を呼吸して、気を落ち着けたら、君方も普通な考えに戻つて来るだろう。」

「それは僕はどうでも好いよ。どこでこうしていたって、全く同じ事だからねえ。詰まり。」フェリックスはこう言い掛けた。

学士はそれを遮るようにして云つた。「待ち給え。差当り何も君が絶望するような状況はちつともありはしない。だから余計な、悲しげな話は暫く度外しばらに置いて貰もらいたいものだね。」

マリイは涙を拭ふいて、難ありがた有ありそうに学士の顔を見た。

フェリックスは微笑ほほえみながら云つた。「君は豪えらいよ。大した心理学者だ。なんでも医者いしやは患者を荒あつぽく扱あうと、その患者が丈夫なような気になるものと見える。」

「兎とに角かく僕は君の医者というよりも、君の友人だという訳だからね。」

「好いよ。そんなら旅行する。あすどこか山の方へ立とう。」

「無論そうしなくてはいけない。」

「兎に角君には感謝するよ。そこでもうこつちとらは行こうじゃないか。あの戸の外で咳せきばら払いをするのは患者だろう。ミイツ。行こう行こう。」こう云つてフェリックスは学士と握手した。

マリイは暇乞いをして、学士に言った。「どうも難有うございました。」

「なに。僕にお礼なんぞを言うに及ぶものですか。あなたも気をしっかり持って、フェリックス君に気を付けて遣らなくてはいい

ないのです。そんならいずれまた。」

十

二人は梯子段はしごだんを降り掛かった。途中でフェリックスが突然云った。「実に親切な男だなあ。どうだい。」

「ええ、ええ。」

「それにあんなに体が好よくて若いのだから、これからまだ四十年位生きられるのだろう。それとも百までも生きるかしら。」

二人は往来へ出た。その周囲まわりには歩いたり、饒舌しゃべったり、笑ったりして生きていて、死ぬる事なんぞは考えない人がうようよし

ていた。

二人は湖水にぴったり食つ付いている小家を借りた。本当の村とは離れて、一列の家が水に沿うて立てられていて、それがしまいには離れ離れになっている、その一番端の軒である。家の背後は傾斜地になっていて、そこから牧場が高い処まで続いている。そのまた上には畑に夏の作物の花が咲いている。そのまた奥の方には、めつたに好くは見えないが、微に遠山のぼんやりした輪廓が現われている。家の前には階段がある。その階段を支えている四五本の褐色をしている、濡った木の柱は、澄んだ水底に立ててある。そこへ出て見ると向いの岸にごつごつした岩が鎖の

ように長く続いているのが見える。その上の方には沈黙した^{おおそ}大空の冷やかな輝きがある。

ここへ来てから数日間二人は意外な落ち着きを感じた。自分でもどうしてこんなに気が鎮まったかと思議に思う位であった。なんだか運命の威力というものも常に住^{すま}つてゐる処でなくては、人の心の上に抑圧^{たくまし}を逞ゆうする事が出来ないのではないかとさえ思われた。いつもの住いで自分達^{たち}を強く^お押し付けていたような運命が、ここへ移り住んでからは、どうした事か、少しも力を逞ゆうしなくなつた。そればかりではない。二人は知り合になつてから^{このかた}此方、今のような心を新たにしような寂しさを味わつた事はなかつた。折々二人は顔を見合せて、妙な心持をしている。な

んだかちよつとした喧嘩けんかか思違えかをした跡で、その事を避けて口に出さずにいるような心持なのである。天氣の好い夏なつ日和びよりに、男は余り気分が好いので、またそろそろ為事しごとを始めようかとさえ云つた。女はそれに同意しなかつた。

「だつてあなた、本当に心しんから健康におなりなすつたのではないのですからね」と、微笑ほほえみながら云つた。男が持つて来た本や書か物きものの積み上げてある小卓こづくえの上に日影が躍っている。窓からは湖水を渡つて、柔かい、人に媚こびるような空氣が吹き入れる。その空氣は世界のあらゆる不幸をまるで知らないような空氣である。

ある晩の事二人はいつものように、年の寄つた土地のものに舟こを漕こがせて湖水へ出た。その舟は好く出来ていて、幅も広く、そ

れに柔かい、弾力のある腰掛が取り附けてある。いつもそれへ女が腰を掛けると、その足あしもと下に男は横になつてゐる。一枚の暖かい、鼠ねずみいろ色の毛布を持って来て、それを敷物にも上掛うわがけにもするのである。そこに横になつて頭を女の膝ひざの上に載せてゐる。広い、静かな水の上に軽い霧が立ち籠こめてゐる。なんだか夕ゆう闇やみがゆるやかに湖水の底から登つて来て、次第に岸の方へ拡ひろがつて行くように感ぜられる。きようは男が奮発して、久し振に葉巻を喫のんで見た。徐しずかに煙を吹きながら湖水の波や、その向うの岩の頭に薄黄いろい夕日の差してゐるのを眺めてゐる。

男は言い出した。「おい。ミイツ。お前あの上の方を平気で見る事が出来るかい。」

「どこの方でございますの。」

男は天を指さした。「真まつ直すぐにあの上の方を見るのだ。あの藍あいいろ色な処を見るのだ。己おれにはそれが、なんだか気味が悪いよう
で出来ないから、お前に聞くのさ。」

女は上を見た。そして数秒間見詰めていた。「わたくし好い心
持ちですわ。」

「そうかなあ。きょうのようにすっかり晴れ切っていると、己に
はとても見ていられない。なんという遠い事だろう。身ぶるいが
する程遠いのだからな。雲でも上の方にあると少しは気持ちがいい
のだ。雲というやつはまだおれ達と心こころ易やすいものなのだから
な。雲を見るのはお馴染なじみのものを見るようなものだ。」

十一

その時舟を漕いでいる男が口を出した。「あしたは雨でござい
ましようね。ひどく山が近く見えますから。」こう云つて船頭は
ろの手を停めると、舟は音もせず、ゆるやかに波の上を滑つて
行く。

フェリックスは咳払いをした。「妙だ。どうも葉巻はまだ己
には好くないようだ。」

「そんなら水の中へ棄てておしまいなさいな。」

フェリックスは火の付いたところが赤く見えている葉巻を、指

で摘つまんで振り廻まわしていたが、とうとうそれを水の中へ投げ入れてしまった。そして顔をマリイの方へ向けずにこう云った。

「どうも己はまだ本当に健康にはなっていないなあ。」

「好いい事よ。そんな事を言うのはお廢よしなさいよ。」こう遮るよ
うに云つて女は徐しずかに男の髪を撫なでた。

フェリックスは云った。「これから雨でも降り出したら、何をしようかなあ。そうなったら、己が為しごとをしたって、文句を言いはしないだろうな。」

「それはいけませんわ。」

女は身を屈かがめて、男と顔を見合せた。その時男の頬ほおが赤くなつて
いるのに気が付いた。

「そんな厭いやな事をお考えなさらないが好いわ。もうそろそろ帰ろうじゃありませんか。寒くなつて来るようですから。」

「なに。寒くなつて来ると。己は寒くはない。」

「それはあなたそんな厚い毛布ケットを着ていらつしやるのですもの。」

「そうだったなあ。お前が夏服一枚でいるのを己はまるで忘れてしまつていた。随分勝手だったなあ。」

フェリックスはこう云つて、船頭の方に向いて、漕ぎ戻せと言ひ付けた。

を二三百遍ばかりも動かしたかと思うと、もう家が近くなつた。その時フェリックスが右の手で左の手の脈を抑えているのに、マリイは気が付いた。「あなたどうかなすつたの。」

「ミイツ。どうも己はまだ健康でないよ。」

「なぜ。」

「どうも熱が出たようだ。下らない。」

マリイは心配げに云った。「きつとあなたの思違えですわ。兎とに角直かくすぐにお医者とこの処ところへそう云つて遣やりましょうね。」

「なんだ。それがさぞ役に立つだろうよ。」

舟が岸に着いて、二人は下り立つた。家へ歸つて見れば、部屋はほとんど真つ暗になっている。それでもまだ日の内の温あたたまりが残っている。女が夕食の支度をする間あいだ、男は腕附つきの椅子いすに腰を掛けてじつとしている。

男は突然云った。「それでももうここへ来てから八日ようか立つたな

あ。」

卓つくえの上へ、食器を並べていた女は、急いで男の傍そばへ来て背後うしろから両手で肩を押さえた。「何かまた詰まらない事を考え出していらつしやるのね。」

「廃せよ。」男はこう云つてその手を振り落として立ち上がつて、卓の傍そばへ腰を掛けた。女はそこへ付いて行つた。男は指先で卓の上をとんとんと叩たたいている。そしてこう云つた。「実にまるで防ぼ禦うぎよのないところへ敵が突然襲撃して来るようなものだからな。」

「あら、そんな事を。」女はこう云つて自分の椅子を男の傍そばへ寄せて腰を掛けた。

男は目を大きく睜みはつて部屋中をあちこち見廻している。それか

ら何事か腑ふに落ちぬという様子で、腹立たしげに頭を振って、それから齒の間から空気を押し出すようなものの言い振ぶりをして、こう云った。「実に防禦がないのだ。誰たれに救いの求めようもない。事柄は何もそんなに恐れるには及ばない事柄なのだ。ただ防ぐという事が、まるで出来ないのが溜たまらない。」

「あなた、後生ですから、そんなにいらいらしないで下さいよ。それ程の事ではないと、わたくし思いますの。ただ御安心のためですから、わたくしがお医者の方へそう云いに参っても好いでしょう。」

「どうぞ廃してくれ。全体また己が病気の事を言い出したのが悪かったから堪忍してくれ。」

「あら。そんな事を。」

「もう己は決して言わないよ。さあ、注いでくれ。注ぐのだ注ぐのだ。よし。何か外の話をしないかい。」

「そうでございますね。なんのお話にしましょうか。」

「なんでも好いよ。なんにも話す事がないようなら、何か読んで聞せてくれても好い。直ぐでなくても好いよ。食事が済んでからで好い。食べないか。己も食べるから。食は進む位だ。なかなか旨い。^{うま}」こう云つて食べ始めた。

「それ御覧なさい。」

女はわざとらしい微笑^{ほほえみ}をして云つたのである。二人は飲んだり

食つたりし始めた。

十二

それから数日間暖かい雨の日が続いた。二人は夕方になるまで、部屋の中にいたり、階段の上に出たりして暮した。二人で本を読んでいる時もある。窓から外を見ている時もある。またある時は女が針はりしごと為事ことをしていると、男は傍そばでそれを見ている。骨牌かるたなんぞをもして見る。男はある日女に将棋こまの駒の行き道を教えたり何かもした。またある時は男が長椅子ながいすの上に横になっていると、女はその傍そばへ来て腰を掛けて、本を読んで聞かせる。兎とに角昼かくも夜も徐しずかに過すぎて行く。男は気分が悪くはなかった。天気は悪くて

も体に異状もなく、その後熱のちも出ないのを、男は喜んでいた。ある午後の事であった。久し振に長雨が降り止やんで、空が少し明るくなり掛かつて来た。二人は出窓に腰を掛けていた。男がこれまでの話の続きでもなんでもなく、出し抜けにこう云いった。「一体この世界には死の宣告を受けたものばかりがうようよしているのだなあ。」

女は針為事の手を停とめて、顔を上げた。

男ばかり語り続けた。「それはこう云うわけだ。譬たとえて見れば、誰たれかお前の処ところへ来て云うのだな。あなたは千九百七十年五月一日じつにお亡くなりなさいますよというのだな。お前だって何も百年生きているわけではないが、そう云われた日には、それからは千

九百七十年五月一日が気になつて、生涯厭な思いをし通しにするのだ。」

女は黙つて聞いている。

男は今日の光が洩れ始めて、湖水の水がきらきらとし出したのを眺めながら語り続けた。「またこんな人間もいるだろう。其奴はきようあたり大丈夫で、息張つて歩いている。ところが詰まらない、偶然の出来事で、此奴は一二週間の内に死んでしまうのだ。そのくせ死という事なんぞをまるで考えてはいない。そうじゃないか。」

女は云つた。「そんな馬鹿な事を考えるのはお廃しなさいよ。今ではもうあなたすっかり健康になつていらつしやるのが、御自

分にもお分かりになつているのでしよう。」

男は微笑ほほえんで黙つていた。

「だつてあなたなんぞこそ健康になる質たちの人ですわ。」

男は声を出して笑つた。「お前。己おれが運命というものが分らないでいると思うのかい。今ちよつと工合ぐあいが好よくなつたからといって、己がそれに騙だまされていると思うのかい。己は偶然自分の前途を知る事が出来て、死ぬる日の近いのが分つて、外の豪えらい奴やつのよ
うに、哲学者になつてしまつたのだ。」

「もう大抵にしてお廃しなさいよ。後生ですから。」

「はいはい。拙者は今に死にますから、さよういたせばあなたに死のお話しなんぞをして、御迷惑を掛ける事も無くなります。」

女は手為事を置いて、男の傍そばへ寄つて来て、確信しているような調子で云つた。「あなたが大丈夫無事でおいでなさるという事が、わたくしには本当に分つていますの。この頃ごろのあなたの体の好くなつた事ではありませんわ。それが御自分ではお分りにならないのでしようね。ですから死ぬる事なんぞをまるで考えずにおいでなされば、それであなたとわたくしとの上に落ちて来た暗い影はまるで消えてしまうのですわ。」

十三

男はじつと女の顔を見ていた。そしてこう云いつた。「どうもお

前には絶対的に物の真相を理解する事が出来ないのだ。どうかして具体的に分からせて遣^やらなくてはならない。ちよいとこれを見い。ここになんと書いてある。」男はそこにあつた新聞を手に取つて、日附^{ひづけ}のところを指さした。

「千八百九十年六月十二日とありますわ。」

「そうだ。そこで考えて見ろ。この一八九零^{れい}とある零の代りに一が書いてある日が来るのだなあ。その時は己^{おれ}はもういないのだ。どうだ分かるかい。」

女は新聞を荒々しく男の手から奪^{うば}つて、床^{ゆか}の上に投げた。

「新聞に罪はないよ。」男は徐^{しず}かにこう言い放^{はな}つて、突然立ち上がつて、あらゆる陰気な考えを一時^じに遠^{とほ}く擲^{なげう}つたらしい様子をし

て、こう云つた。「どうだい。あれを見る。綺麗きれいじゃないか。あの水の上に日の差しているところは。それからあそこを見る。」
こう云いながら男は階段の横の方へ振り向ねいて反対の方角を見た。平地になつてゐる方角である。「あの畑の作物の揺れているのを見ないか。あそこへ出て見たいなあ。」

「あんまり濡しめつぽくはないでしょうか。」

「行こう行こう。己は外へ出たくてしようがない。」

女は強いて留めてもどうかかと遠慮した。

二人は帽子を手を取つて、外套がいとうを引つ掛けて、畑はたの方へ行く

道に掛かった。空はほとんど晴れ切つてゐる。遠い山の端はに色々な形をした白い霧が掛かつてゐる。牧場の緑が遠い金きん色しよくを帯

びた白の中へ消えて行くようである。

暫くして二人は穀物の作つてある畑の中の道に出た。道が狭いので二人は跡先に歩いている。外套の裾が作物の茎に触てさらさらと鳴る。少し歩いて横へ曲つて木の茂っている森の中へ這入つた。そこには綺麗な道の所々に腰掛が置いてある。二人は手を取り合つて並んで歩き出した。

男がこう云つた。「どうだい。綺麗じゃないか。それにこの匂が好いなあ。」

「雨上がりですが好いでしょようか。」女はこう言い掛けた。

男はじれつたそうに首を振つた。「好いよ。そんな事はどうでも好いのだ。余計な事を言い出さないでくれ。」

暫く歩いていけると、木立が段々まばらになつて来る。そして木の枝の間から湖水が見える。もう湖水まで百歩もない位である。狭く岬のように突き出した処ところがあつて、森の木立の続きがまばらになりながらその辺あたりまで延びている。そこに樅もみの木で拵こしらえた卓つくえと腰掛みずうちぎわとが置いてある。水打際みずうちぎわには木の柵が結つてある。夕方になつて少し風が出て来たので、波が岸を打っている。その風の余りが森の木をゆすつて、濡ぬれた木葉このはから雫しずくを垂らし始めた。湖水の上には暮れて行く日ゆの疲れた影が横つている。

フェリックスが云つた。「こんな好い景色があるという事は、己はこれまで夢にも知らなかつた。」

「ほんとに好いのねえ。」

「お前に分かるものか。景色が本当に好いという事は、暇いとま乞こいを
する積りで見なくては分からないのだ。」

男はこう云つて、ゆるやかに二三歩前へ歩き出して、下の方を
水に洗われている柵さくの、細い木の上に両りょう肘ひじを衝ついた。そして
長い間きらめく水の面おもてを見ていた。暫くして振り返ると、女が背う
後しろへ付いて来ていた。女は目に涙の出そうなのを堪こらえているのが
知れた。

男は笑じょうだん談だんらしく云つた。「これをみんな己はお前に残して
遣やつて行つてしまふのだ。そう云うと可笑おかしく思うだろうが、こ
れはみんな己のものだ。この頃ころ己は人生の秘密の感じが分かつて
来て、人間というものは無窮の占有権を持っているという事が分

かった。この感じは実に偉大な感じだ。このあらゆるものが、己の自由自在になるのだ。あのごつごつした岩の上へ、己は花を咲かせて見る事も出来る。あの空に漂^{そら}っている白い雲を己は追いつ除^のけてしまう事も出来る。しかしあれはみんなあのまま綺麗だから、己はどうもせずに置いて遣るのだ。お前だって己がいなくなつて、一人になつて見ろ。そうすると己の心持ちが分かるのだ。その時はお前もあらゆるものが自分のものになつたという感じがするに違いない。」

十四

男はこう云いつて女の手を取つて自分の傍そばへ並ばせた。それから片手を差し伸べて、景色を指さして、「あれがみんなだ」と云つた。それでも女は、さっきの涙の出そうな目をして黙っているの
で、男は「もうそろそろ帰ろう」と、急に思い出したように云つた。

日暮が近くなつて来た。二人は岸に沿うて程なく家の前に出た。この時男が云つた。「兎とに角かく好いい散歩だつたなあ。」
女は黙つて頷いた。

「おい。ミイツ。きょうのような散歩を、これからもまたしよう
じゃないか。」

「ええ。」

「だがきょうのようにお前をいじめる事は、これからは廃めにするよ。」男はさげすんで憫むあわれような調子でこう言い足した。

それからまだ何日も立たない頃ころの事で、ある日の午後フェリックスはまた為事しごとを始めて見ようかと思つた。そこで紙を出して、鉛筆を手に取つて、何か書きそうにして、マリイの方をちよいと見た。少し意地の悪い心持ちで、女がどうするだろう、留とめるだろうかと思つたのである。しかし女はなんとも云わなかつた。暫しばらくして男は紙と鉛筆とを脇わきへ置いて、何か意味のない書物を手に取つて読みそうにした。少し読みかけて見たが、この方がよほど気が晴れて好いように思われた。まだ本当の為事は出来ないのでは

て見ると、自分はよほど豪いえら人間のように思われる。毎日長い午後の時間に、男は一種高慢な心持ちになつて、向うに坐すわつてゐる女を見ている。どうかすると女は読み掛けた本の上に俯伏うつぶしになつて居眠りをしてゐる。額からほつれてこぼれ掛かつた髪が、本の上に渦を巻いてゐる。男の心の中うちでは、女に打明けずに、自分の考くえている事が沢山あるというのが、自慢しても好い事のように思われている。自分が如何いかにも寂しく、如何にも偉大ゐに存在してゐるやうに思ふのである。

きよきよよの午後には女がまたいつものやうに転うた寝たねをしたので、男はそつと抜け出して、森の中を散歩した。夏の午後の、むつとするやうな静しきが周し圍ゆういを取り巻いてゐる。なんだかきよきよよこそと

いう心持ちがした。なんだか身が軽いようで、何物にも縛せられないような気がして、深い息をした。そして木の下の、重くろしい蔭かげを歩いていた。木の枝で遮られて、翳かすめられたような日の光が、好い心持ちに自分を照している。日蔭も、静けさも、柔かい空気も、総すべて我が身の幸福であるように感じた。そしてそれを受用した。これだけの色々な柔かい、優しいもののある人生を棄すて行かなくてはならないのが、今は別段苦痛にならない。「棄てて行くと、棄てて行くと」と中ちゆうおん音ひとりごとに独言を言つて見た。それからまた深い息をすると、柔かい空気が、如何にも軽々と、好い心持ちに胸の中へ這はい入いつて行く。その時、一体おれ己が病気だというのが、分らないなあと思った。しかし兎に角病気なはずだ。

助からないはずだ。そう考える内に、たちま忽ち大いに発明したという
ような気がした。それはその病気だという事、助からないという
事を信ぜなくなつたのである。そうだ。みなうそ皆嘘だ。それだからこん
なに何物にも縛せられないような、好い心持ちがするのだ。さつ
ききようこそという心持ちのしたのは、それが分つたのであつた。
そうして見れば人生の快樂を剋伏したのではない。死の恐怖が消
え失うせたのだ。もう死ななくてはならぬという事を信ぜなくなつ
たのだ。たと縦い今は体が少し悪くても、いづれ直る。自分もその直
つて好よくなる病人の内なのだ。なんだか魂たましいの奥の片隅の方で、あ
るこれまで潜んでいたものが覚めて来たように思われる。目をこ
れまでより大きく開あいて、これまでより大おお股またに歩いて、これま

でより深い息をしたいような気がする。日の光が一層明るくなつて、人生の活動が一層盛んになったように思う。これだ。これだ。しかしなぜだろう。なぜこんなに突然希望に酔わせられたような心持ちになったのだろうか。なに。希望ではない。それ以上の物だ。確信だ。けさまでは自分は恐怖に責められていた。咽喉のどを扼やくせられていた。しかし今は健康だ。けさも健康であつたのだ。こう思つて大声に「健康だ」と叫んで見た。

十五

この時男は森の出口に立っていた。目の前に湖水が濃い藍あいらろ色

に^た漑えられている。そこにあつたベンチに腰を掛けて、好^いい心持ちになつて、鏡のように平かな水^{おもて}の面を見渡した。そして、一体妙だな、人生を快^{なげう}く擲つてしまおうと思つたのは、あれは、実は体の直つた快^さきであつたかと思つているのである。

ふいと背後^{うしろ}に軽い物音がした。それはマリイであつた。見返る隙^{ひま}もない内に、女はそこへ出て来て、輝く目をして、顔を少し赤くしている。

「どうしたのだい」と、男は^い云つた。

「なぜあなたお出掛けなすつたの、わたくしを一人ぼつちにして置いて。わたくしびつくりしましたわ。」

「なんだ。馬鹿^{ばか}な。」男はこう云つて女を引つ張つて、側^{そば}へ腰を

掛けさせた。そして笑わらいが顔がおをして女を見て接吻せつぶんした。この女はいつも暖かい、柔かに肥えた唇をしているのである。「こつちへおいで」と男は小声で云つて自分の膝ひざの上に腰を掛けさせた。女はびったり身を寄せ掛けて、男の頸くびに手を搦からんだ。女の姿は如何かにも美しい。明るい色の髪の毛から、鬱陶うつとうしいような薰かおりが立つ。男はこのしなやかな、好い匀においのする人を、限りなく愛する情の、胸に沸わき上がつて来るのを覚えた。そして目に涙を浮べて、女の手を取つて接吻した。まあ、自分はどんなにかこの女を愛しているのだろうか、心に思った。

湖水の方から微かすかな、しゅうとうというような音がした。二人共頭を上げて見て、それから立ち上がつて、岸の方へ歩いて行つた。

遠い処ところに汽船が見えている。二人はそれを眺めていて、汽船が段々近くなつて、甲板の上の人の姿が見分けられるようになった時、始めて船の方に背を向けて、森の中を歩いて内へ帰り掛けた。二人は手を引き合つて、ゆっくり歩きながら、折々顔を見て笑い交すのである。口に出る詞ことばは昔恋の初めて萌きざした頃ころの詞と同じであつた。まだ不確かなような愛情の甘い疑問と、媚こびるような慰めの、親切な詞とが、二人の間に交された。二人とも気が晴れやかで、子供の心のようにであつた。幸福が再び返つて来たのである。

重くろしい、燃えるような夏の日が来た。昼は焦げ付くように暑くて、夜は人を誘惑するように生なまぬる温ぬるい。きよようの昼もきのう

の昼のようで、きょうの夜もきのうの夜のようにである。丁度時間が静止しているかと思われる。

二人は誰たれにも逢あわずに籠こもっている。そしてお互に気を付け合うだけで、余所よその人には構かまわずにいる。森と、湖水と、小さい家と、これだけが二人の世界である。心持ちの好い鬱陶しさが身を包んで物を考える事を忘れさせている。心配のない、笑い交す夜と、疲れた親密な昼とが二人の上を通り過ぎる。

そういう夜の続いた後のちのある晩の事である。蠟燭ろうそくを点つけたままで二人は寝ていた。目を明いたままで横になつていた女が床上でふいと起き直つた。女は穏かな眠に沈んでいる男の顔を眺めた。そして息遣いを聞いた。今ではどうも一日一日直る方に向い

て行くのがたしかかなようである。如何にも嬉しいので男の顔に自分の顔を摺り寄せて、男の息が自分の頬ほおに触れるようにした。まあ、生きていると云いうこと事は、どんなに美しい事だろう。それに自分の生活の内容は、全くこの男の事で埋めうずられているのである。無くするかと思つたこの人を取り返した。いつまでも別れないように、取り返してしまつた。

そう思っている時、ふいと寐ねている男の息遣いが今までと違つて来たのに気が付いた。軽い、抑え付けられたようなうめきをしたのである。そして男の少し開いた唇に苦痛の表情が見えた。それから男の額には汗が玉のように出ているのに気が付いて、女はひどく驚いた。男は頭を少し横へ向けた。そして唇を締めた。表

情はまた平和に戻つて、二つ三つ不安らしい息をした跡で、平生の息を音を立てずにするようになった。

十六

しかし女は急に心配し出して来た。出来る事なら男を呼び醒さましてぴったり寄り添つて男の体の暖あたたまりを、男の生活を直接に身に感じて見たい。それから、なんだか不思議に自分が罪を犯しているような気がして来た。この頃男の命ごころが助かると信じていたのが、ひどい大胆な望みであつたかのように思われて来た。そしてこんな事を思つた。自分が男の事を、たしかに直ると思つたというの

は嘘うそではなかつただらうか。実はただ直りそうな様子を見て、難ありかた有く感じていただけではあるまいか。そうして見れば何も深く自分を罪するには及ばない。これから先き放縦な心持ちになつて、丈夫な人を相手にするようになつて、十分に幸福を受けようとはしないようにしよう。今までつい夢のように歓樂を極めていたのは、あれは如何いかにも輕はずみな、罪の深い事であつた。その罪は償つぐわなくてはならない。そうだそうだ。一人人間の上で罪である事は、二人の間でも罪であるに違ちがひないではないか。それとも愛情が奇き蹟せきをする事が出来るのではあるまいか。この頃の夜のように打ち解けていたのが、却かえつて男の健康を恢かい復ふくさせ掛けたのではあるまいか。女の考えはこんな風にとつおいつしていた。

突然恐ろしいうめき声が男の口から洩れた。夢現の境に、

目を大きく開いて、体を半分起して、空を睨んでいる。女は覚え
ず大声で叫んだ。男はそれを聞いてやつと本当に目が醒めた。

「なんだ、なんだ」と、男は押し出すように云った。女はなんと
も返事をする事が出来なかつた。「今声を立てたのはお前かい。

誰か大声を出して叫んだように聞えたが。」こう言い掛けて、男
は忙しい息を衝いて、こう言い足した。「己は息が詰まるような
気がした。なんだか忘れてしまつたが、夢も見えていたようだつた
。」

「わたくし本当にびっくりしてよ」と、女は吃りながら云つた。

「知っているかい。己は今寒けがしているのだ。」

「それはこわい夢を御覧なすつたからですわ。」

「そんなわけじゃないよ。」こう云つて、男は腹を立つたような目付きをして、上の方を見た。「なに。己はまた熱が出たのだ。知れていらあ。」男は齒をがちがちいわせて、横になつて、布団を襟えりもと元まで引き寄せた。

「どうしましょう。何か。」女はこう言い掛けて、途方に暮れたようにあたりを見廻みまわした。

「なにをするに及ぶものか。寐ねるがいい。己もひどくがっかりした。これから寐なくちやあならない。明りは消さずに置くのだよ。」こう云つて男は目を瞑ねむつて布団を口の隠れるように被かぶつた。

女は遠慮して何もいう事が出来なかつた。男の容体の悪い時、

気の毒がるような事をいうと、どんなにか腹を立てるだろうと、これまでの経験から推して考えたのである。それから二三分すると、男は寐入ったが、女はそれきり寐付かれずにいた。

程なくかわたれとき彼誰時の薄明りが、忍びやかに部屋の窓から這入って

来た。この暁の近づいて来るかすか微なしるしが、女のためにはひどく

嬉うれしかった。何か親しいもの、ひとりでほほえに微笑まれるようなもの

が近づいて来るように感ぜられた。暁の来るのを出迎えにこつちから行きたいような気がして来た。そこでそつと床から抜け出して、朝の着物に着替えて階段の処へ、しのびあし忍足をして出て見た。

空も、山も、湖水も、すべ総て暗い、不確な灰色の中に漂っている。

その輪廓りんかくをはつきり見ようと、目に力を入れるのが、愉快であ

る。女は榻こしかけに腰を掛けて薄明りの中を見詰めている。この静かな夏の朝の空気の中にひとりすわで坐っているのが、なんとも云われないう程好い心持ちである。体の周囲しゅういは如何にも平和で、柔かで、永遠なように思われる。この偉大なる沈黙の内に、暫くしばら一人でいるのが、如何にも愉快である。あの狭い、息の籠こもつたような部屋から出ているのが、如何にも愉快である。こう思うと同時に、電光の如くごとある認識がこの女の頭あたまの内にひらめいた。それは自分があの男の側そばを離れて、ここへ来て、一人でいるのが愉快なのだという認識であつた。

十七

翌日女は朝から晩まで前晩の事を思っていた。暗い所で考えたように気味悪く思わない代りに、一層はつきりと、何かそれに本^{もと}づいて決断をしなくてはならないように思われた。そこでなるたけ男の色情が強^まく起らないように、気を付けようという決心が先^まず出来た。さてそう思つて見ると、なぜ今まで久しい間、そこへ気が付かなかつたかと、我れながら不思議な位である。しかしこれを実行するには、よほど優しく、よほど巧者にしなくてはならない。拒むように思われてはならない。むしろ今までの愛情より一層高尚な、一種の新しい愛情だと思われるようにしなくてはならないと思うのである。

しかしそれ程の工みたくをしなくても済むようになった。なぜというに、その晩から後のちには、男の烈はげしい色情が、暴風あらしの凪ないだように鎮まったからである。男は女を、疲れを帯びた優しさで待遇した。女は最初それを嬉うれしく思つて安心していたが、後のちになつては変だと感じた。男は昼の内は本ばかり見ている。しかし側そばで気を付けて見ると、どうも本当に読んでいのではないらしい。たびたび目は本から余所よそへ逸それて、遠い所を見詰めている。毎日の話しは平凡な事ばかりになつた。しかし女は別に自分が疎外せられて、男の本当の考えを聞く事が出来なくなつたのだとは感ぜずにいた。男の様子は如何いかにも自然らしく、その中ちゆうおん音で、毒にも薬にもならない事を言っているのが、やはり病気の直り掛かつた

人の、晴れやかな、落ち着いた心から出るらしく思われた。朝は女が明け切らない内に、一人で外へ出るようになったのに、男は長い間床に寝ていた。女は外へ出ると、階段に腰を掛けていたり、時々湖水まで下りて舟に乗って、沖へ出ずに、岸辺で舟を波に揺らせていたりするのである。また森へ散歩に行く事もある。そんな風に暫く外しばらにいてから部屋に帰って男を起す事になっていた。男の長い間好く眠るのを、女は体のために好いように思っていた。女は、男が夜中にたびたび目を覚まして、好く眠っている女の顔を悲しげに見るのを、夢にも知らなかつたのである。

ある朝の事、女はまた舟に乗っていた。朝日の黄金色こがねいろの火花が水の面おもてにちらばっている。その時女はふいときようだけ沖の方

へ出て見たくなつた。暫く漕いでいる内に、手が慣れていないので、次第に骨が折れて来た。しかしそれを却つて面白く思つていた。まだ夜の明けたばかりであるのに、もう外にも舟で出ている人がある。中にはわざと女の舟に近く漕ぎ寄せて見て行くのもあつた。中にも美しい小舟に乗つた二人の男は、女の舟の側を摺れ違い様に、帽を脱いで、微笑みながら丁寧に礼をした。

女は呆れて二人の顔を見て、なんとも思わずに、その舟の方を振り返つて見た。その時男はまた礼をした。女は二度目に礼をせられた時、これは悪い事をしたと気が付いたので、弱い腕の力一ぱい漕いで、舟を家の方へ戻そうとした。岸に着くまでには、半時間も掛かつて、髪は乱れ、顔は赤くなつていた。舟の着く前に、

女はフェリックスが階段に出て腰を掛けて見付けた。それから舟を着けると、女は男の側へ駈^かけ付けて、背後^{うしろ}から男の目隠しをして、「さあ誰^{たれ}だか当てて御覧なさい」と云った。

男は静かにその手を振り放して、女の顔を横から見た。「どうしたのだい。大変浮れているではないか。」

「あなたにお目に掛かったのが嬉しいのですわ。」

「大変赤い顔をしているじゃないか。」

「わたくし好い心持ちなのですもの。」

こう云つて女は男の膝^{ひざ}の上に掛けている毛布^{ケット}を引き退^のけて、自分が男の膝に腰を掛けた。自分のちよつと間^まの悪いような気にしたのが忌^{いま}々^{いま}しい。男の不機嫌なのが忌々しい。女はそんなよう

な心持ちで男に接吻せつぶんした。

「でもそんなにむやみに上機嫌なのは可笑おかしいじゃないか」と、男が云った。

「それはわけがありますわ。わたくし嬉しいのですもの。」こう云つてちよつと言よい淀よどんで、跡を継ぎ足した。「あなたがお忘れになったのが。」

「なにを」と男は疑うような調子でいった。こうなると女は跡を言わずにはいられなくなつた。「こわがる事をお忘れなすつたのですもの。」

「死の恐怖を忘れたというのかい。」

「そんな事をはつきり言うのはおよしなさいよ。」

「ふん。己^{おれ}が死の恐怖を忘れたというのだな。お前だって忘れたじゃないか。」こう云^いつて、男は女の顔をじつと見た。女の心の底を探るような、ほとんど意地の悪い目付きで見たのである。女はなんにも云わずに両手で男の髪をいじりながら、額に接^{せつ}吻^{ぶん}しようとして口を寄せた。その時男は顔を少し後^{うしろ}へ引いて、それを避^よけて、冷やかに、不遠慮に云った。「一体お前は己と運命を一つにすると、少くも一度は云った事があるのだから、己に死の恐怖が無くなれば、お前にも無くなるはずだなあ。」

「それはわたくしにも無くなるだろうと思ひますの。」女は活かつぱ澆じょうつに、晴れやかな調子で云つた。

男は真面目まじめにその詞ことばを遮つた。「ところがそうは行かないのだ。何も知れている事を隠しているには及ばない。死の恐怖は無くなりはない。死が次第に近づいて来るのが、己には分かつている。」

「まあ。」女は目立たぬように男の側そばを離れて、欄てすりにもたれた。

男は立ち上がつて、あちこち歩き出した。「實際己には分かつている。それだからお前に一通り言つて聞かせて置くのは、己の義務だろうと思うのだ。もし出し抜けに死んでしまふと、お前がびっくりするだろうからなあ。己の死ぬるまでの日数がもう四分ぶ

一は立っているぞ。なに。こう言って話すのが義務だなんぞというのも、やっぱり自ら欺くので、己が臆病おくびようからこんな事をいうのかも知れないよ。」

女は心配気に云った。「あなた、わたくしが黙って出て行ったものですから、おおこりになったのではなくって。」

男は急に答えた。「馬鹿ばか言え。実はお前の晴々しているのを見るのは、己だつて悪くはない。己もこれから晴々した気分になつて、ある事件の熟して来る日を待つ積りだ。しかしお前の今のように浮れているのを見ると、正直を言えば、己は余り好いい心持ちはしないのだ。だからお前に相談をするのだが、いつその事近い内に別れてしまおうじやないか。」

「あなた。」女は歩いている男の両腕をつかまえた。

男はそれを振り放した。「これから厭いやな時が来るのだ。これまでに己は面白い病人だった。少し色が蒼あおくて、少し咳せきをして、少し気がふさいでいる。そういうのは女に嫌われはしない。しかしこれからはな、違ちがうぞ。段々己の病気の悪くなるのを見ていると、己という人間の記念が次第に傷つけられてしまふばかりだ。」

女はなんと返事をして好いか分らぬので、途方に暮れて男の顔を見ている。「己がこう云いつたつて、直すぐ置いて逃げるわけには行かないと、お前は思っているのだろう。なんだか冷淡なようで、今少し極端に言えば、卑劣なようにさえ見えるのだ。そこで己が言いつて聞きかせるが、そんな遠慮は決していらぬ。お前が別れて

行つてくれれば、己は為合せだ。己の自信が傷つけられずに済むのだ。なぜというに、別れた跡で、お前が己の事を思い出す時に惜しんで泣いてくれる事が出来るようにして置きたいのだ。もしあべこべにお前がこの上己の側そばにいて、昼も夜も介抱して、どうせ死ななくてはならないものなら、早く死んでくれれば好いと思ひ續けて、とうとう己の死んだ時、ようようの事で助かったと思つて別れてくれるのが、己は難有ありがたくはないからなあ。」

女はなんと云つて好よかろうと思ひ悩んでいる。ようようの事で、「わたくしいつまでもあなたの側にいてよ」と云つた。

男はそれを聞き流して云つた。「もうそんな話しはよそう。これから八日程かしたらウイーンへ帰らなくてはならない。色々整理

して置きたい事があるからなあ。そこでいよいよこの家を引き払う日になったら、己はお前にさっきの問をもう一遍繰り返して見る積りだ。さっきの願いと云った方が好いかも知れない。」

「あの、わたくし。」

男は烈しく女の詞を遮った。「どうぞもう黙っていて貰いたい。

さつき云った時が来るまでは、何を言うのも無駄だからなあ。」

こう云つて、階段から立つて部屋の方へ行き掛けた。女が跡に付いて行きそうにすると、「どうぞちよいとの間己を一人で置いてくれ」と云つた。その声は優しかった。

女は階段の処に残っていた。そして涙も何も出ない目で、きらきら光る湖水の面を見詰めた。男は寝間へ帰つて、床の上へ横に

なつて、長い間天井を睨にらんでいた。それから唇を噛かんで、両手を拳こぶしに握にぎつた。この時その唇から、嘲あざけるような調子で、「忍耐、忍耐」という声が洩もれた。

十九

この頃ころからなんだかある邪魔物が二人の中に這はい入いつたような工ぐ合あいになつた。それと同時に二人は絶えず、ほとんど神経質に、何事ことをか話し続けなくてはいられなくなつた。二人は日常の事を詞ことばかず数かず多く話し合つた。どうも物を言い止やめるのがこわいような気がするのである。あの山の上に柵ねずみいろ引ひいている鼠ねずみいろ色の雲はど

こから出て来たのでしよう、あしたの天気はどんなでしよう、湖水の色が朝昼晩と変るのはなぜでしようというような対話が、長く続くのである。散歩に出る時は、これまでのように、家の周囲まわりの寂しい所ばかりを歩いていずに、海岸の人家のある方へ行く事になった。そうすると、色々な人の顔を見て、話しの種が出るのである。そんな道で、向うから若い男が来ると、女はひどくつつし慎み深い風をする。もし男が舟を漕こぎに来た人や、山に登りに行く人を見て、その着物の批評なんぞをすると、女は実際その人を見たのに、つい見なかったと嘘うそを衝ついて、今度出逢であった時、わざわざ町ていねい寧に見直す事がある。そんな時に男にちよつと顔を見られると、女はせつないような気がした。ある時は十五分間も並

んで黙って歩いていている事がある。それから内にいると階段に出て
並んで坐すわって、やはり黙っている事がある。そんな時は女が「新
聞を読みましようね」と言い出す。それが如何いかにもわざとらしい
のを、隠す事も出来ないのである。それから読んで聞かせている
内に、男がもう聞いていない事がある。その時女は心の内で、そ
れを知っているながら、知らない顔をして読み続けている。自分の
声を聞いているのが、心持こころちが好いい、二人の間に声のしているだ
けでも、ひっそりとしているよりは好いいと思うのである。こんな
風に互に心配をごまかしていようとしているが、それでもやはり
男は男、女は女で、自分自分の思案しあんに耽ふけっているのである。

二十

男はこないだ女に対して馬鹿らしい狂言をして見せたという事を、自分で認めずにはいられなかつた。もし女にこれから先の苦労をさせまいという情願じょうがんが本当なら、自分がそつと身を引いてしまうのが一番好いはずである。どこか静かな土地を見付けて、そこで一人死ぬるのは、造作もない事ではないか、こんな事を平気で考えて見られるのが、我れながら不思議だと、男は思った。さてその身を引いて、一人で死のうという事を、どうして実行したら好かろうかと、考え出すと、そんな事のなかなか出来ないのが分つて来た。それはある夜眠らずに、その実行のしかた方を細かに

考えて見た時の事である。先^まずあすの朝明けない内に、暇^{いとま}乞^こいをせず、ここを出て行って、寂しい所へ死ぬる日の来るのを待ちに行くとする。そして女をこの晴れやかな、面白い、我が物で無くなった人生の中に残して置くのである。そう思うと、そんな事は出来ない、いつまで立っても出来ない、つくづく自分の腑^ふ甲^が斐^いなさを感^{かん}ぜずにはいられない。そんならどうしたら好^よかろう。その日は厭^{いや}でも来るに違^{ちが}いない。實際一日一日と迫^おつて来^きている。その日には女を残して置いて、自分はこの世を去^さつてしまわなくてはならない。今の自分の存在というものは、その日を待^{まち}つていに過ぎない。実は死そのものよりも厭^{いと}うべき、苦悶^{くもん}の期間に過ぎない。どうも今になつて見れば小さい時から、自分で自分を観

察する癖を付けたのが悪かった。今の病気の種々な徴候も、この癖がなかったら、見逃すかも知れない。見逃さなくても、さ程に思わないかも知れない。こう思つて、男は自分の昔知つていた、二三の人の事を思い出して見る。その人々は、自分が今煩つているのと同じ病氣になつて、次第に衰えて行つたのである。それでも死ぬる二三週間前まで、晴れやかに未来の事を考えていた。それが今では羨ましいうらや。あの医者うらやの所へ尋ねて行つて、嘘うその限りを尽して、とうとう本当の事を言わせてしまった。あの日は実に咀のろうべき日である。あんな事をしたので、自分は今咀のろわれた人間のようになつて、こうして寝ている。譬たとえば、いつ首切役が来て、刑場へ引き出すかも知れない、宣告を受けた罪人のようになつて

寝ている。一体自分の存在は恐れても恐れ足りない程のものである。然るにその恐怖の全体を、はつきり意識している時は少しもない。いつでも心のどこかの隅に、横着な、便佞な希望が綺麗に離れ去ってしまった事はない。しかし自分にはそれより強い理性がある。それが寝られない、長い夜や、暮れ易い、単調な昼の間に、十遍も百遍も千遍も繰り返し返して、こういう事を自分に言うて聞かせる。それは自分の逃道、自分の活路はただ一つしかないという事である。それは一時間も、一秒間も待たずに、自分でこの世の暇を取る事である。それなら、病気で死ぬるのを待つより、少しは男らしいだろう。いよいよそうしようと思えば、誰も待てといつて束縛するものがないのが、ほとんど慰めのように

にも思われる。しようときえ思えば、何時なんどきでもこの世の暇いとまを取
るに、差さしつかえ支かえはないのである。

二十一

ところで女だ。昼間、自分と並んで歩いていたり、側そばに坐すわつて
本を読んでいたりする時などに考えて見ると、この女と別れるの
が、そうむつかしくもなさそうである。詰まりこの女も我が存在
の一部分たるに過ぎない。この周囲しゅういの生活を棄すてなくてはならな
いものとするれば、女もその一部分に過ぎないから、無論棄すてなく
てはならないと思う。しかし外の時、殊に夜になって若い女の美

しい顔をして、目を堅く瞑^{つぶ}つて、ぐっすり寐^ねているのを見ると、女が際限もなく可^{かわ}哀^{わい}い。女の眠りが穏かなだけ、現在を遠く離れているらしく見えるだけ、眠らずにいる自分の苦惱に關係がなくなっているだけ、男は女の可^{かわ}哀^{わい}さが増すのである。とうとうある夜^よの事、それは丁度あすはこの湖水の側を離れてしまおうと思ひ定めた晩の事であつたが、男は好^よく寐^ねている女の顔を見て、自分の病苦に構わずに寝ているのを、如何^{いか}にも不人情なように感じて、一つ揺り起して、耳に口を寄せて、「お前が己^{おれ}を愛しているといふのが本当なら、己と一しよに死ね、今直^すぐ死ね」とどなって遣^やりたく思つた。しかしその場はそのままに寝かして置いた。そして事に依^よつたら、あす言つて聞かせようと思つた。

男は知らなかったが、女はたびたび自分の寐顔を、男が見ているのを知っていた。男は知らなかったが、女はたびたび目を細目に明けて、寝間の薄明りの中に、男が床の上で半分起き上がって自分を見ているのを見ながら、こわさにその目を皆明けずにいた。いつかの真面目な談判の記念は長く女の心を去らずにいて、女はいつかあの問いを繰り返しかえされることだろうと、顫えるようにこわがっていた。一体なぜそんなにこわいのだろう。男が何遍問うたところで、自分の答える詞は極まっているではないか。「あなたの生ていらっしやる最後の一秒まで、わたくしはお側を離れません。あなたの唇から洩れる溜息や、あなたの睫から飜れる涙を、わたくしの唇で受けて上げます。」こういうより外はない。

一体男は自分を疑っているのでしょうか。自分にこれより外の答えが出来ようか。その外の答えはどんな事だろう。例えばこんな答えが出来ようか。「あなたの仰おつしやるのは御ごもつとも尤なようですから、わたくしはお暇いとまをいたしましょう。面白い、優しいところのある御病人の側にいたという、わたくしの記念だけをいつまでも持っている事にいたしましたよう。その大事な記念を傷けないために、わたくしはあなたを一人置いて、お暇をいたします。」こんな事を言ったら、その跡はどうなるだろう。女はそれから先の事を細こまかに想像して見ずにはいられなかった。多分男は冷やかに微笑ほほえんで、自分と握手をして、「難有ありがとう」というだろう。そして男が脊中を向けるとき、自分は急いでその場を逃げるだろう。その日

は目の醒めるさような喜びに輝いている夏の朝であろう。自分は成るだけ早く男の側から遠ざかろうと思つて、黄金色こがねいろに輝いている朝の空気の中を、次第に遠く遠く馳はせ去るのである。その時あらゆる縛ばくが取れてしまつて、自分は再び独立して、人を気の毒がる、厭いやな心持が無くなるだろう。数箇月の長い間ひどく自分を苦めた、あの物を問うような、死に掛かつた目が自分を見詰めているという感じが、綺麗きれいになつてしまふだろう。自分の身は歡喜に返り、人生に返つて、再び若々しくなるだろう。自分の走つて行く跡から、夏の朝風が笑いながら自分の裾すそを吹いているだろう。

こういう物狂わしい夢の影が、忽然こつぜん消えてしまうと、女は今までより一層はかない身の上になったように思う。そしてそんな夢の影が、仮にも浮んで来たのを、切なく思うのである。

そして女は男が死ななくてはならないという事を自覚しているという事、絶望に陥っているという事を思うたびに、どんなにか同情の胸を痛めて、身ぶるいのするような心持ちになっただろう。男の死ななくてはならない日が、次第に近づいて来るのを覚えると共に、女の男を愛する情は、どんなにか深くなっただろう。そして女は自分の男に答えるはずの詞ことばが別にあるように思っ

病人の側そばにいつまでも付いて一しよに苦んで遣やるといふのは、
どうもまだ物足りない。男の死を待っているのを見ていて、何箇
月の間も男と一しよに死の恐怖を味わうというのもまだ物足りな
い。何かそれ以上の最善の事、最高の事をして遣る事は出来まい
か。「あなたがお亡くなりになったら、わたくしはお墓の前で死
にましよう」と云いつたらどうだろう。そうしたら、男は自分を半
信半疑して、墓の前で本当に死ぬか知らぬと思ひながら死ぬるだ
ろう。それよりは男と一しよに、いや、男に先立つて死ぬるが好よ
かろう。男がいつかの問いを繰り返した時自分は氣をしつかり持
つていてこう答えよう。「ねえ、あなた。お互にこんな苦みをい
つまでもしていずに、早く切上げてしまおうではありませんか。

御一しよに死しにましようね。つい今直すぐに。」この詞を心の内で言
つて見て女は物に酔つたような心持ちになる。しかしそれと同時に
にその心の内には、別な夢の影が浮ぶ。それは優しい朝風に身を
吹かれて、歡喜と人生とを向うに見て、野の上を走つて逃げる影
である。まあ、なんという卑劣な、みじめな事だろう。

二人が旅立とうと思つた日の夜よが明けた。春が再び返つて来た
かと思われるほどの、珍らしく暖かい朝であつた。マリイがもう
階段の所へ出て朝あさ食しょくの用意をしてしまつて待つていと、そ
こへフエリツクスが部屋から出て来た。

「ひどく好いい天気だなあ」と男が深い息をして云つた。

「本当ですわね。」

「ちよいとお前に言いたい事があるよ。」

「なんでしよう。」女はこう云つて置いて、先さきくぐ潜りをするように言い足した。「もつとここにしているのでしよう。」

「そうじゃない。しかしここから直ぐにウイインへは帰らない事にしようと思うのだ。己おれはきようはよほど工ぐあい合が好いから、ここを立つて、どこか途中でまた滞留しようかというのだ。」

「ようございますとも。」女は近ちかごろ頃ころにない好い心持ちで、こう答えた。もう一週間この方かた、こんな風に心にわだかまりのない話し振をした事はなかった。

「まあ、己の考えでは、ザルツブルヒあたりに足を留とめようかと思う。」

「ようございますとも。」

「そうしたつて、ウイインへは随分早く帰られるのだ。それに己は汽車旅を一息に長く続けるのは嫌いなのだ。」

「それはお草くたびれ臥なさいますわね。それにそんなに急がなくても宜よろしいのですから。」女は活かっぱつ澆つにこう云つた。

「もう荷物は皆みなしまつただらうね。」

「もうとつくに出来ていますわ。直ぐにでも立たれるようになつていきますの。」

「そんなら馬車を雇つて立つとしよう。ここから四時間か五時間で着くだろう。汽車に乗るよりか、その方がよつぽど好い。汽車の中にはきのうの暑さが残っているからなあ。」

「ではそうしましよなね。」

女は男に勧めていつもの牛乳を一杯飲ませた。それから湖水の波の波頭に、美しい、銀色の光の見えるのを、男に指さして示した。二人はひどく愉快らしく、色々の事を話した。女が何か言うと、男は無邪気に、優しく返事をした。

二十三

とうとう女がこれから馬車をあつらを誂えに、自分で行って来ようと言
い出した。それに乗って正午に立ってザルツブルヒへ行こうとい
うのである。男は笑いながら、そうして貰もらおうと云いった。女は大

きな麦藁むぎわらぼうし帽子を急いで被かぶつて、男に二三度キスをして置いて、
往来へ駈かけ出した。

兼て女に問おうと思つた事を、男はどうとう問わずにしまった。
多分もう問わずに置くだろう。それは男の晴やかな額を見ても直すぐ
分る。いつもは優しい詞ことばを掛けていても、その底に隙すきを覗うかがつてい
るような、意地の悪い心持ちがあつた。そして何か罪のない話し
をしている間あいだに、突然わざと憎らしい事を一言こというのであつた。
そういう時は、女はその一言を聞かない内に、先へ悟つていた。
きようはその意地の悪い詞が出ないので、女は感謝しなくてはな
らないように思つた。きようの男の優しさには、和睦わはくするような、
恩恵を施すような趣おもむきがあつた。

女が階段の所へ帰つて来て見ると、男は留守の間まに来た新聞を
読んでいた。

「おい。不思議な事があるよ。」男はこう云つて目食めくばせをして
女を側そばへ呼んだ。

「なにが書いてありますの。」

「まあ、読んで見ろ。あの男が死んだのだ。あの大学教授のベル
ナルドだなあ。」

「どういふ方でございますの。」

「それ、あの男さ。己おれに病氣の事をひどくむずかしく言つて聞せ
たあの男さ。」

「まあ、あのベルナルドという人が亡くなりましたの。」女は男

の持つて居る新聞を取つて覗のぞいて見た。「まあ、好いい気味だ事」と口まで出そうなのを、女は堪こらえていた。

この出来事は、二人がためには、大層意味があるように思われた。ベルナルド教授は自分が飽くまで健康でいて、さも豪えらそうに専門の知識を吹ふ聴いして、見て貰かいに行つた男の希望を打ち破つてしまつたのに、自分が却かえつて数日間に死ななくてはならなかつたのである。今あの人死んだという事を聞くと同時に、男はこれまで心の底でひどくあの教授を憎んでいた事を自覚した。そして自然にその復ふ讐くしが出来たのを、自分の運命のために大層好い前兆でもあるように感じた。言つて見れば自分の身の周まわりから、気味の悪い幽霊を逐お退けてしまつたような心持ちである。

女は新聞をそこへほうり出して云った。「一体人間というものは、どんなに豪くつたつて、未来は分からないはずでございませわね。」

「そうだ。あすどうなるという事が分かるものじゃあないなあ。まるで分からないのだ。」男は心しんから女に同意してこう云った。それから少し間まを置いて、突然外の問題に移った。「車は云い付けたのかい。」

「ええ、十一時に来るようにそう云つて置きましたの。」

「そんならまだちよつと舟でそこらを廻まわつて見る隙位ひまあるなあ。」

二人は手を引き合つて、舟の繋つないである小屋の方へ歩いて行つた。二人ともなんだか当然享うけるはずの幸福を享けるような心持

ちがしているのである。

ザルツブルヒに着いたのは午後遅くなつてからであつた。どの家を見ても旗が立ててあるので、二人は驚いた。町で出合う人が皆晴着を着て、中には印の付いた帽子を被^{かぶ}つてゐる人もあつた。宿屋へ着いて、ミヨンヒスベルヒという岡の方の見える部屋を借りた。そこで聞けば、きょうこの町では大きい唱歌会の大会があるのであつた。宿屋の主人は一枚の切符をくれた。これを持って今晚八時にクウルパルク公園に行くと、大層なイルミネーションがあつて、そこで合奏をするのだという事であつた。借りた部屋は二階で、窓の下をザルツアハの流れが通つてゐる。二人ともここまで来る馬車の中で大ぶ眠つたので、好い心持ちになつてゐる。

そこで内には余り長くいずに日が暮れ掛かると、町へ出掛けた。

二十四

町まちじゆう 中ちゆう なんとなく人の気が立っている。誰たれかれ彼かれとなく家の中

に落ち着いてはいられないので往来へ出ているらしく思われる。

その雑ざつとう沓くわの間を、印の付いた服を着た唱歌会員が通っている。

大ぶ外ほかから来ているらしい人も見える。近所の村から来た田舎び

た晴着を着た人も、町の人の間に交まじつて押し合っている。家々の

搏風はぶからは、市の定ていしよく色しきに染めた旗がひらめいている。大通り

には、花で飾った凱旋門がいせんもんが出来ている。どの町に行つて見ても

大勢の人が、落ち着かないような様子をして歩いている。その上においに勻のある夏の夕の空気が、心地好よく柔かに漂っている。

ザルツアハの岸の、心持ちの好いい、静しずかな所から、二人は市中の賑にぎやかな所へ出た。これまで例の湖水の側そばで、ひっそりした生活をして来たので、この慣れない賑でに出逢であつて、ほとんど茫然ぼうぜんとするようであつた。しかし暫しばらくすると、大都会に育つた人の、世慣れた心持ちが出て来て、平氣で周囲しゅういの刺戟しげきを身に受けて見るようになった。一体男は大勢の騒いでいる事は好かないので、きようも少し不快に思つた。女はその反対で、直すぐに興に乗つて来た。そして子供か何かのように、土地の異様な衣服を着た女を、立ち止まつて見たり、襷たすきを掛けた唱歌会員の、体格の好い男を、振り

返つて見たりしている。折々は項うなじを反せて、どの家かの美しい装飾を見ている。そして格別面白がらずに、並んで歩いている男に、「あれ、御覧なさいよ、綺麗きれいではありませんか」などと云う。しかし男は黙つて頷うなずくばかりである。

「丁度好い所へ来ましたわねえ。あなたそう思わなくつて。」
こう云われたので、男は妙な目付きをして女の顔を見た。その目付きはどういう意味だか、ちよつと女に読めなかつた。男は「大方お前は今夜おれ己を公園へ合奏を聴きに引つ張つて行きたいのだろう」と云つた。

女は微笑ほほえんで答えた。「ここへ来て最初からそんなに吝けちにしなかつたつて好うございましょう。」

「それではほんとにそんなところへ己を連れ出す積りかい。」男は女の微笑が癩ほほえみしやくに障さやつてこう云つた。

「まあ、お厭いやなら参ろうとは申しませんわ」と女は驚いて云つたが、その目は直ぐに横の方を通り掛つた男女の連れを見ている。様子の好い、美しい、若い二人連れで、結婚旅行に出たのである。あるらしく笑い交して通り過ぎたのである。

フェリックスとマリイとは並んで歩いてはいるが、女は男の肘ひじに手を掛けてはいなかつた。人込みになると、ちよつと押し隔てられて、また出逢うような事がある。兎角男は不愉快らしく、人家の壁に沿うて歩いていて、面白げに往来する人達ひとたちに触れないようにしているので、猶なおさら更押し隔てられ易いのである。

その内段々暗くなつた。街燈に火が点いた。町の所々、殊に凱旋門のあるあたりには酸漿提灯ほおずきぢようちんが点けてある。歩いている人の多数は公園の方へ向いて行く。合奏の時間が近づいて来るのである。暫くの間は二人とも大勢と同じ方向に、押されて歩いていたが、男は突然女の肘をつかまえて、狭い横町へ曲つた。暫くそこを歩いていると、明りなんぞも多く点いていない、寂しい所へ出た。また数分間黙つて歩いている内に、とうとうザルツア八河の岸に出た。单调な水の音が下から聞えて来る。

「こんなところへ来て、どうなさるの」と女が問うた。

「まあ、黙っていないか」と、叱しかるように男は云いった。それから女の黙ってしまったのを見て、男は神経質な、いらいらする声をして云った。「己おれなんぞにはあんな所は向かないのだ。明りが沢山点ついていたり、面白そうに歌を歌っていたり、若い人間が笑っていたりするところは、己達の行く場所ではない。己達はこういう所こゝにいらなくてはならない。ここへなら人の喜んでどなる声なんぞは聞えない。ここなら寂しくしていられるのだ。己達はこんな所こゝにいらなくてはならないのだ。」これまでの詞ことばを腹の立つのを我慢しているような調子で言つて、それから冷かすような調子になつて、「少くも己はそうだ」と言い足した。女はこの詞を聞いた

時、自分が今までほど同情しなくなっているのに気が付いた。しかし女はこう思った。これは多分余りたびたび聞かせられているからだろう。それにあんまり誇張して言われるので、感動しないのだろうと思った。そして仲直りをしようとするような、優しい声で答えた。

「わたくしそんな事を言われるはずはありませんわ。」

「御免よ。」やはり嘲るあざけような調子である。

女は男の手にから搦み付いて、ぴったり身を寄せて云った。「あなたもわたくしも、二人ともこんな所にいるのは好よくありませんわ。」

「いやこんな所が好いいのだ。」叫ぶように云うのである。

「いいえ。わたくしだつてあの人込みへ歸つて行こうとは思いませんわ。あなたが厭いやにお思いなさるように、わたくしも厭いやでございますの。ですから、何も人交わりの出来ないもののように、こんなにして逃げ廻まわらなくつたつて好うございますでしょう。」
女の声は優しい。

こう云つたとたんに、風のない、澄んだ空気の内うちに合奏のオルケストラの響こゑが伝わつて来た。一音毎ごとにはつきり聞き取られる位であつた。多分今宵こよひの祭りの序じよびら開きの曲であろう。花やかな、晴はらがましい、金きん笛てきの響こゑのようであつた。

暫しばらく立ち止まつて聞いていた男が突然云つた。「行こう行こう。音楽おんがくというものは遠くから聞いていると、悲しげになつていけな

い。」

「本当にメランコリイの音色ねいろがしますわ。」

二人は足を早めて賑にぎやかな方へ歩き出した。家の間へ這はい入って見ると、河の岸で聞くよりは音楽の声かすかが幽かすかになっている。段々明りの沢山点ちりいている、人通りの多い町へ出て来ると、女はまた昔のように男を可哀かわゆそうに思う同情を起して来た。男の心持ちが分つて、さつき云つた詞の毒々しさが忘れられたのである。

「内へ行きましょうか」と女が問うた。

「なぜだい。眠むたいのか。」

「なに。眠むたいものですか。」

「もつと外にいようじやないか。」

「あなたが宜^{よろ}しければ、わたくしまだ外にいたくつてよ。でもあんまり寒くなりはいしないでしようか。」

「なに。蒸々するようだ。暑いと云つても好い位だ。晩飯を外で遣^やらうじゃないか。」男は少し神経質な調子でこう云つた。

「ではそうしまししょうね。」

二十六

二人は公園近くに来た。楽人団が序^{じよびら}開きの音楽を奏してしまつた所である。昼のように明るく、火の点^{とも}してある公園から、面白げに話しをしている大勢の声が聞える。後れて合奏を聞きに急

いで行く人がちらほら通り過ぎる。その中に唱歌会員が二人、後れたものと見えて、あわただしくフェリックス、マリイの二人連と摺れ違すつて行つた。マリイはこれを見送つたが、悪い事でもしたと思ふらしく、直すぐにその目をフェリックスに移した。フェリックスは唇を嚙かんでいる。やつと我慢している怒りが額の皺しわに現われている。何か言うだろうと思つて、女が待つていたが、何も言わない。そして今公園の入口に這入はいつて行く唱歌会員の二人を、さも憎げに見送つている。その心の内には自分の不愉快な感じを分析して見て、自分で理解しているのである。

摺れ違つて行つた二人は、フェリックスの最も憎んでいるものである。自分がこの世から消えて無くなつた跡に、残っている物

の一部分である。自分がもう笑いも泣きも出来なくなつてしまつた跡でまだ若々しく生きていて、笑う人間である。それから今、うっかり悪い事をしたと思つて、後悔して、自分の肘ひじに力を入れてから搦み付いている女も、やはり跡に残る物の一部分である。女も笑つて生き残つている若々しさの仲間なので、その同類相求める心持ちが、知らず識しらず発動して、さっきのように唱歌会員の二人を見送つたのである。男はそれが分かつているので、物狂わしくなるほど腹が立つている。

二人は長い間黙つて歩いてた。それから男が大きい溜ため息を衝ついた。それを聞いて、女が男の顔を見ようとすると、男は顔を反そむけた。そして突然云つた。「ここが好いいじゃないか。」

女はなんの事だかちよつと分からなかつた。

「ええ。」

二人は庭に卓や椅子を並べた料理屋の前に立っていた。公園の直ぐ側で、高い木立が白い布を掛けた卓の上に枝を拵げている。ところどころに明りが点いているが、その数が少いので、あたりは薄暗い。客は余り無い。そこでどこへでも勝手な所へ席を取る事が出来るので、男は好いじゃないかと云つたのである。

二人はこの庭の片隅に席を取つた。庭中に二十人ばかりも客がいるだろう。直ぐ側の卓には、さつき一度出逢つた、気の利いた風をしている、若い男女の二人連れが掛けていた。マリイは直ぐにさつきの人だなど思った。

丁度公園で唱歌会員の合唱が始まった。少し微妙かではあるが、善く調子の合った歌が聞える。面白げに歌っている声が掠めて通るので、木立の葉がゆらぐような心持ちがする。

フェリックスは上等のライン産の葡萄酒を註文した。そして一口含んでは、目を半分瞑つて、音楽に耳を傾けている。しかしどこで奏している音楽だという事さえ考えずに、ただ聴いているのである。

マリイは男の側へびつたり寄つた。女の膝の障つているところだけ、肌の温まりが男に感ぜられる。男はさつきひどく腹を立てたので、その反動が来て、何事にも冷淡になつて、大体好い心持ちがしている。そして誰の力も借らずに、自分の心持ちを、こん

なに冷淡になるように落ち着かせたと思つて、それを喜んでゐる。実際男はここへ腰を掛ける時、どうしてもこの苦痛を押し付けてしまわなくてはならないと、堅く決心したのであつた。そしてそういう結果になつたのが、どれだけ自分の意志の作用であるかという事を、細かに研究して見る程の精力はもうなかつた。さて落ち着いて見るといろんな事が思われて来た。さつき女が余所よその男を見た目付を、ひどく憎らしく思つたのは、どうも少し無理であつたかも知れない。外の人を通つたつて、やはりあんな風にして見たのではあるまいか。現に今隣に坐すわっている二人を見る、マリイの目付も、さつきの唱歌会員を見た目附めつきと、余り違つてはいないようだと思ふのである。

二十七

葡萄酒は好かつた。音楽は人に媚びるように聞えて来る。夏の夜の人を酔わせるような微温みがある。男はちよいと女の目を見た。その目の中には無限の愛情と好意とが輝いていた。そこで男は精一ぱい心を今の一刹那に集中しようと思つた。過去をも未来をも、少しも思うまいと男は意志に最後の鞭撻を加えた。兎に角今だけでも幸福を感じていたい。少くも苦痛をぼかしていたい。

その時忽然と、少しも予期しないのに、解脱したような、一

種の新しい感じが出て来た。それは今自殺してしまえば、わけはないという感じであつた。直ぐに遣ればなんでもない。今遣らないところで、いつでもこの感じを起して自殺すれば、わけはないと思つたのである。音楽は聞える。ほろ酔い機嫌になつてゐる。可哀らしい娘が側にいる。こういう時に遣るのだなあ。女はマリイだつて。しかしマリイでなくつたつて外の女でも好いわけだと考えた。

女も旨げに酒を啜つてゐる。男は今一本と註文した。近頃ちかごろにない好い心持である。自分でもよくよく思つて見れば、こんな感じのするのは、常より少し余計に酒を飲んでゐるからかも知れない。しかしそうだつて構わないのだ。兎に角そんな心持ち

になられるのが難^{ありがた}有^いい。この感じのしている間^{あいだ}は、「死」なん
 というものはこわくもなんともない。どうでも好いのだ。「なあ、
 マリイ」と男はふと云^いった。

女は体をびったり寄せた。「なんですって。」

「何がどうなつても構わないじゃないか。」

「ええ。構いませんとも。ただわたくしがあなたの事をいつまで
 も大事に思っているという事だけは、変りっこなしでございます
 の。」

女が真^ま面^め目で、この誓^{せい}言^{ごん}言^んめいた事を言うのが、男には異様に
 感ぜられた。今の刹那の心持ちでは、男のためには、女は誰^{たれ}でも
 好いのである。このマリイという女も、自分を取り巻いている万

有と、解けて流れて、一しよになつてしまふのである。これは面
白い。なんでも世の中をこんな風に観察しなくてはいけない。待
てよ。これは酒のために浮かぶ幻影だけではないぞ。ただ酒があ
る物を己おれの心から奪い去つたのだ。そのある物が平生己おくびよを臆
病うに、おつくうもつたいにしているのだ。人間や事物をひどく勿体ら
しく見せているのだ。こういう時に白い粉薬を、少し許ばかりコツプ
の中へ叩たたき込んでしまえば好い。まあなんという造作もない事だ
ろう。こう思うと同時に、なぜだか目の中に涙が涌わいて来た。自
分で自分を気の毒に感じたのである。

今唱歌が済んだ。手を叩く音、褒める声が聞える。それからが
やがやと、話声がする。その内楽人団がまた奏樂を始めた。今度

は晴々とした心持ちのポロネエズの曲である。男は指先で卓を叩いて拍子を取った。この時一つの考えが頭をかすめて過ぎた。それは「もう少しばかりの命だ、面白く暮されるだけ暮して見よう」という考えであった。しかしこの考えには少しも気味の悪いような分子は含んでいない。むしろ人に傲るような、君主的なような分子を含んでいる。なんだ。息を引き取るという事は、人間と生れた以上は誰も免れない事ではないか。何もそれをびくびくして待っているには及ばないじゃないか。一体自分はまだ体が衰えていないで、どんな快樂をも受ける事が出来る。音楽を聴いて面白い事もある。酒を飲めば旨い。可哀らしい娘を見れば膝の上ひざに抱だいてキスをして遣りたくなる。これ程の力を体の内に持つてい

ながら、何も夜昼下らない事を考えて気持ちが悪くしている事はないじゃないか。なんだ。今から機嫌を悪くしているのは太早たいそう計けいだ。そんな面白味や情じょう慾よくが、いつかは無くなってしまうだろう。その時自由意志で、決然として実行すれば好いのだ。そうすれば君主的な行いだ。意張いばつて出来る行いだ。こんな事を思いながら、男は女の手を取つて、それを長い間握つていた。そしてその手の上に、ゆるやかに息を嘘ふき掛けていた。

「あら」と女は満足したらしい様子で囁ささやいた。

二十八

男は女の顔をじつと見た。そして大層美しいと思った。そして「行こう」と云いった。

「も一つ歌が済むまでいようじゃありませんか」と女は無邪気に促うした。

「好いいとも」と男は云った。「だが内へ帰って窓を明けて置けば、後あとの歌は風が持つて来て聞かせてくれるぜ。」

「あなたもうお草くたびれ臥ふなすつて」という女の声は、心配しているらしかった。

「そうさ。ひどく草臥ようだんている。」男は笑いながらこう云つて、笑じ談だんらしく女の髪を撫なでた。

「そんなら参りましょうね。」

二人は立ち上がって、料理屋の庭を出た。女は男の肘ひじに手を掛けて、手に力を入れて、片頬かたほを男の肩に押し付けた。歌い始めた次の歌が、次第に遠くなりながら、帰って行く二人に付いて来る。ワルツの拍子で、晴やかに、最後に繰り返して一しよに歌う文句が元気よよく聞えるので、二人は覚えかえず活かつ澆ぱつな歩調になった。宿屋までは、数分間しか掛からない。梯子はしご段を昇る時は、歌が聞えなかつた。しかし部屋に這入はいると、さっきのワルツの節がまた元気よく聞えて来る。

部屋の窓は皆明みなけ放つてあつた。月の光が青い色の、柔かい波を打たせて這入はいっている。丁度向いの所にミヨンヒスベルヒ山やまと、その巔いただきにある城とが、はつきりした輪廓りんかくをなして、空そらにえがか

れている。明りなぞを点けるには及ばない。部屋の床ゆかの上には、銀色の月の光が、幅の広い帯のようにさし込んでゐる。ただ部屋の隅々だけが暗いのである。一つの窓の側そばに腕うで附つきの椅子いすが置いてある。男はそれに身を投げ掛けて、女を力強く引き寄せた。そしてキスをする、女もキスをし返した。丁度公園では歌が停やんだところであつたが、聴衆がひどく喝かつ采さいして止やまない、同じ歌がまた始めから繰り返された。

突然女が立ち上がつて、窓の方へ走つて行つた。男は跡から追い掛けた。

「どうしたのだ。」

「よしましやうね。」

「なぜ。」男は足踏みをした。

「だってあなた。」女はあやまるように手を組み合せた。

「よすのだって。そんなら己おれにおとなしくして、死ぬる日を待てというのか。」齒を喰くいしばって、その間から押し出すような物の言い振である。

「だってあなた。」女は男の前に膝ひざを突いて、男の膝を両手で抱だいた。

男は女を引き上げた。「お前は分からないのだ」と云って置いて、耳に口を寄せて囁ささやいた。「己はお前かわゆが可哀いのだぞ。もう長くは生きていられないのだから、何も余計な遠慮をしなくつても好いじゃないか。己はもう心配をしなから一年も生きていようと

は思わない。それよりは二三週間でも、二三日でも、一夜よでも二夜よでも好い。己は生活が味いたい。したいと思う事がしたい。そしてその挙句で、お前が不承知でないなら、一しよにあそこへ」男は片手で女を抱えて、片手で窓から下を指さした。そこには河が流れている。唱歌会の歌はもう止んで、河の水音が二階まで静かに聞えている。

女は返事をしなかった。しかし両手で男の頸くびに搦からみ付いた。男は女の髪の毛かの香を吸い込んだ。どんなにか男は女を愛しているだろう。もう二三日でも好いから幸福を享うけたい。そしてその上でどうともなりたい。

四辺あたりが静かになった。女は側で寝ている。合奏はとづくに済ん

でいる。公園から後れて帰る人達ひとたちが、声高に話しながら窓の下を通っている。今卑しい高たか声こえをして歩いている人達が、さつき
好い声で歌って、人を感動させたのと、同じ人達かと思うと、不思議だと男は考えた。話声は次第に遠くなって、跡には訴えるよ
うな水音ばかりが聞えている。

二十九

もう二三日で、もう一晩か二晩で好いい。それでおしまいにするのだ。しかし女はまだ生きていたいのだ。思い切つてくれるだろうか。なに、何も思い切つてくれなくても好いい。何も知らずにい

ても好い。ただその時は、己おれに抱だかれて、今のように寐ね入いつて、それからもう醒さめないばかりだ。そしてそれをたしかめた上で、自分が遣やるのだ。あんなに生きていたがるものに、何も前まえ以もつて知らせるには及およばない。もし余計な事を知らせたら、己をこわがり出すだろう。そうなるに己一人で死しななくてはならない。それは如何いかにもつらいのだ。事に依よつたら今直すぐに実行しようか知ら。あんなに好よく寐ねているのだ。この手に力を入れて、あの頸くびをうんと抑えれば済むのだ。しかしそれは馬鹿ばかげている。まだ愉快に暮せる時間が幾らか残のこっているじゃないか。いつ最後の時が打うつという事が、己には分かるに違ちがいない。こう思おもつて男は女の顔を眺ながめていた。そしてその心持こころもちちは生殺せいせつの自由になる女の奴隷かを搔かき

抱いだいているようであつた。

フェリックスは決心が付いたので、安心した。当分の間あいだは、マリイと町を散歩して、余所よその男の目が、マリイに注がれているのに気が付くと、嘲あざけるような微笑ほほえみがフェリックスの唇の上に漂つた。馬車に乗つて一しよに散歩している時や、夜一しよに横になつている時、男はこれまでになく、この女を我が物にしているという、自慢したいような心持ちになつた。ただ一つ気に掛かるのは、一しよに死ぬるにしても、女は自由意志で死ぬるのでないという事であつた。しかしそれもいつかはこつちの思い通りになるらしい徴候が見えているように思つた。男の愛情が如何いかに猛烈

に発現しても、女は拒む事を敢てしない。この頃の夜のよう
に、女が控え目でなく自由になっていた事は、これまでない。この様
子では、「さあ、きよう一しよに死ぬるのだぞ」という事が、近
い内に出来そうである。しかしそれを言い出す事を、男は一日一
日と延ばしている。どうかすると夢のように、こんな光景が目
に浮ぶ。自分が短刀を手に持って、女の胸を刺していると、女は最
後の呼吸をしながら、自分の手にキスをしてくれるのである。折
々もう言い出しても好い頃だろうと思つては、また疑念を起すの
である。

ある朝女が目を覚して見ると、男が側にそばいないので、ひどく驚
いた。起き上がって見ると、男は窓の側の腕うでつき附の椅子いすに腰を掛

けている。顔は真まつ蒼さおで、頭をうなだれて胸のところのシャツを明あけている。女は堪こらえられない程心配になつて、飛び起きて、男の側へ行つた。「あなたどうなすつたの。」

「なんだ。」男は目を開あいた。そして手で胸を抑えて、うめいた。「なぜわたくしをお起しなさらなかつたの。」

女はこう云いつて手を組み合せた。

「なに、もう好くなつたのだ」と男は云つた。女は急いで寢ね台だいの所へ行つて、掛布団を卸して、それを男の膝ひざの上に掛けて遣やつた。「どうしてあなたここへいらつしやつたの。」

「なんだか己にも分らない。大方夢を見たのだろうよ。なんだか頸を締め付けられたようで、息が出来なくなつていたのだ。お前

の事なんぞはまるで考えなかつた。それからこの窓の所へ来ていたら、好くなつたのだ。」

三十

女は急いで着物を着て、窓を締めた。外には厭いやな風が吹き出して、見ているうちに空が灰色になって、細かい雨が降つて来て、厭いやにしめっぽい空気を吹き込んで来たからである。夏の夜の快さが、忽たちまち消え失うせて、灰色の、物悲しい景色になった。夜の明方になって、急に秋が来て、美しい幻の影を破ってしまったのである。

男は落ち着いている。「なぜお前そんな心配げな目附めつきをしているのだい。なんでもないじゃないか。丈夫な時だつて、夢に魘おそわれて飛び起きる事はあるからなあ。」

女は中々安心しない。「ねえ、あなた、御一しよにウイインへ帰ろうではありませんか。」

「だがなあ。」

「どうせもう夏はおしまいになったのですもの。あの外の様子を御覧なさい。如何いかにも寂れて、悲しげになっているではありませんか。それに寒くなると、お体のためにも悪いでしょう。」

男は黙つて聞いている。そして丁度草くたびれ臥た回復期の患者のように、一種の好いい心持ちのしているのを、自分ながら不思議に思

っている。呼吸は楽である。自分を包圍している、一種の疲れた空気が、眠りを催すような甘味を感じさせる。しかしこの土地を立つのが好よかろうという事だけは、自分にも分っている。居所の変わるのは、なんとなく愉快なようにも思われる。冷たい雨の降っている日に、汽車の中に寝転んで、頭を女の胸に寄せ掛けているのは、好い心持ちだろうと想像して見る。「好いや。立つ事にしよう。」

「きょうでも好いでしょうか。」

「好いとも。お前の都合が好いなら、正午の急行で立つても好い。」

「お疲れが出はしますまいか。」

「なんの詰まらない。草臥る程の旅ではないじゃないか。それにお前が万事うま旨く世話をしてくれるだろうから。」

思いの外容易たやすく、男が立とうというので、女は喜んだ。直すぐに

荷物を片付ける。宿屋の勘定をする。馬車を呼びに遣やる。電話で

停車場ていしやばへ言つて遣つて、借切りの室しつを取る。その内男も着物を

着替えたが、部屋より外そとへは出ないで、午ひるになるまで長椅子ながいすの上

に寝転んで、折々ほほえ微笑んだ。その間あいだあいだ々にはうとうとしていた。

そんな風に半分眠つたようになつて、折々女の方を見ては、心の

内に嬉うれしく思つた。この女はいつまでも己おれに付いているのだ。そ

れから死ぬる時も一しよに死ぬるのだと思つて見るのである。

「もう近い内だ。」声に出さずにこうつぶやいたが、心の底には

そんなになく早く死ぬるようには思わなかつた。

その日の午後には、午前には想像したように、男は汽車の中で、
楽に横になつて頭を女の胸にもたせて、足の上にはシヨオルを拡
げて掛けていた。鎖してある汽車の窓から外を見れば、空は鼠
色いろで、細かい雨が降っている。立ち籠めてこいる霧の中を見込む
と、時々岡や村が近い所に見える。電信柱が背後へ走つて行く。
電線が高くなつたり低くなつたり、跳おどるようにして跡へ消えて行
く。折々停車場で列車が留まるが、寝ているのでプラツトフオオ
ムに立っている人は見えない。人の足音や話声や、鐸すずの音や、相
図の笛が聞えるだけである。最初は女に新聞を読ませて聞いたが、

声が噎かれて来たので止やめさせた。二人とも都の住いへ帰るのが嬉しかつた。

三十一

晩になった。雨は相変らず降っている。男は考えを極きめようと思つて見たが、どうも輪りん廓かくがぼやけて来て、思想が纏まとまらない。兎とに角かくこんな事を考えた。ここに大病になった人間が寝ている。そいつは夏の間山地にいるのが好いいというので、そこへ行つていたのだ。その側そばに女がいる。女は長い間誠実に看病をしてくれた。しかし今はもう倦うんでいる。大層女の顔が蒼あおく見える。しかしこ

れは明りのせいかも知れない。そうだ。もう明りが点いている。外は真つ暗だ。もう秋だな。秋というものは静かに物悲しいものだ。今夜はいつもの住いの部屋へ帰るのだ。あの部屋に這入って見たら、元のようで、一旦^{たん}そこを出て山になんぞ行^{いっ}ていなかったのも同じであろう。女は眠っているな。こんな時は眠っていて、物を言ってくれない方が好い。あの唱歌会の連^{れんじゆう}中^{ちゆう}がこの汽車に乗っているだろうか。己^{おれ}は草臥^{くたび}れてはいるが、病気なようではない。この列車には己よりひどい病気になっているものが幾らもいるだろう。ああ。ひっそりして好いなあ。一体きよう一日はどうして暮しただろうか。あのザルツブルヒの宿屋の長椅子^{ながいす}に寝ていたのはきようだっけな。あれからはもう大分時が立っているよ

うだ。時間と空間が。一体分らないものだ。世界の謎か。そんなものも、死んで見たら解釈が付くかも知れない。なんだか耳に旋律が聞えて来た。あれは進行している列車の音だ。そのくせそれが旋律のようではない。どこかの民謡だな。ロシアのだろうか。単調で、しかも好い感じだな。

「もしあなた。」

「なんだい。」男は自分の前に来て、立っていて、頬ほおを撫なでてくれる女を見た。

「好よくお休みになつて。」

「なにを言いに来たのだい。」

「もう十五分で着きますよ。」

「嘘うそのようだなあ。」

「まあ大層好くお休みになつたようね。きつとお体のために好いのだわ。」

女は荷物を纏めてゐる。列車は相変らず闇やみを穿うがつて走つてゐる。二三分毎ごとに汽笛おとの音が聞える。窓硝子がらすを通して、ぱつと明るくなつて、直すぐまた消える火の光が見える。列車が都近くていしやじょうの停車場を通過するのである。

男は起き直つて、「あんまり長く横になつていたものだから、却かえつて草臥たびれた」と云いつて、腰掛の隅すわに坐つて、窓の外を見ている。もう遙か向うに明りの点いたウイインの町が見える。列車は速度をゆるめている。女は窓を開けて、体を前まえ屈かがみにして外を見て

いる。車がホオルに這入った。女は手招きをした。そして男の方へ向いて、「来ていらっしやいますわ」と云った。

「誰が^{たれ}。」

「アルフレットさんですわ。」

「そうか。」

女はまた手招きをした。男は立ち上がって、女の肩越しに、プラットフォオムを見た。なるほど友^{ともだち}達の医学士が窓に近づいて来た。マリイと握手した。それからフェリックスにこう云った。

「帰って来たね。」

「どうして来てくれたのだい。」

女は急に詞^{ことば}を挟んだ。「わたくしが電報でお知らせ申しました

の。」

学士が云つた。「君はひどいよ。手紙なんというものは書かない流義と見えるね。まあ、為方しかたがない。さあ、出て来給たまえよ。」

「僕はあんまり長く眠つたもんだから、まだ頭がぼんやりしている。」フエリツクスは、車室から降りながらよろめいたので、こう云つて微笑ほほえんだ。

学士は病人の肘ひじをつかまえた。そうすると女が、いつものように肘すでに縋すがると見せて、片々かたかたの肘をつかまえた。

学士が云つた。「二人とも随分草臥くたているだろうね。」

「わたくし本当にかっかりしていますの。」女はこう云つて、それからフエリツクスの方に向いて。「ねえ、あなた、汽車旅は随

分疲れるものでございますわね。」

一同ゆるゆる停車場の石段を降りた。その間女あいだは学士と目を見合せようとすののを、学士は除よけるようにしていた。

石段を降りて、学士は馬車を呼んだ。そしてフェリックスにこう云った。「まあ、君が無事で帰ったのを見て安心したよ。またあすの朝君の所へ行くからね。」

「僕はぼんやりしている」とフェリックスは繰り返した。それから馬車に乗ろうとするのを、学士が手を出して助けそうにしたので、「そんなに意気地がなくなつてはいないよ」と云つて、一人で車に乗った。続いて女が乗るのを、手を貸して乗せた。

女は車の窓から手を出して、学士と握手をして、「そんならあしたどうぞ」と云った。

その女の目附めつきが如何いかにも心配きんぱいげなので、学士はわざと微笑ほほえんだ。「あした早く行つて、君方きみがたと一しよに朝食あさしよくを食べよう。」馬車ていしやじょうは停車場ていしやじょうを離れた。学士は真面目まじめな顔をして、暫しばらく見送つていて、「気の毒めづだなあ」と独ひとりごと言ことを云った。

翌朝医学士が急いでフェリックスの住いへ来て見ると、マリイが戸口に待ち受けていた。「ちよつとお話しがございますの。」

「まあ、先きへわたしに診察をさせて下さい。その上でお話しをした方が、都合が好よさそうに思うのですから。」

「いいえ。ただ一つ申して置きたい事があるのです。あの方の体がどんなになっても、どうぞそれを言つて聞かせないで下さいまし。」

「なに。そんなに心配しなくつても好いいのですよ。それ程悪くなつてはいまいから。まだ寐ねていますか。」

「いいえ。もう目を覚めているのです。」

「昨晚どうでした。」

「さようでございますね。午前四時頃ころまで、ぐつすり寐ねて、それから好く寐ねられなかつたのです。」

「まあ、わたしが診察をする間は、あなたははずして置いて下さい。あなたが機嫌を好くして、あの男の気分を引き立たせて遣らなくてはいけません。ですからちよいとの間避けていて、わたくしに任せて置いて下さい。」こう云つて微笑みながら握手して、一人寝間へ這入つて行つた。

フェリックスは着布団を腮のところまで掛けて寝ていて、友達達の這入つて来たのを見て、合点合点をした。

学士は寝台の縁に腰を掛けて云つた。「内へ歸つて安心しただらうね。大ぶ様子が好いようだから、持病のメランコリイなんぞは山に置いて来たのだらうね。」

「まあ、そんなものさ。」フェリックスは真面目で云つた。

「君、ちよいと坐すわつて見ないか。こんなに僕が早く来たのは、医者として職務を尽たましに来たのだからね。」

「さあ、見てくれ給たまえ。」フェリックスは平気な様子で診察を受けた。

診察が済んでから、学士は二つ三つ何か問うて、返事を聞いて、こう云った。「まあ、この位なら満足しなくてはならないね。」

「おい。もう狂言はよししてくれ給え。」こういうフェリックスの顔は不機嫌であった。

「君こそそんな馬鹿ばかげた様子をするのをよし給え。兎とに角かく真面目に病氣と闘わなくてはならないのだ。君の方では健康になろうという意志を堅固こにしていなくてはいけない。成行き次第だなんぞ

という料りょうけん簡けんになられては困るよ。そんな態度は、第一君の柄がらにない。」

「そんならどうすれば好いというのだい。」

「先まず二三日はそうして、起きないのだね。」

「そんな事か。君が言わなくても僕は起きたくないのだ。」

「それは丁度好いというものだね。」

フェリックスは少し調子付いて来て、こう云った。「ただ一つ僕には分らない事があるよ。それはきのうの始末だ。君、分かるなら説明してくれ給え。どうも僕には何もかも夢のようだがね。汽車で帰って来たのも、停車場に着いたのも、この寢床に這入ったのも。」

「それになんの不思議があるものか。君だって人間以上の力は持つていない。誰でも草たれ臥切くたびれつた時はそんな事があるものだ。」

「いや。そうでないよ。きのうのような疲れようはこれまで無かつた。きょうだつて僕は疲れているが、頭ははつきりしている。実はきのうの方が却かえつて愉快であつたのだ。しかしそれを今から思つて見ると、気味が悪くなるね。またあんな風になるだろうかと思うと。」

三十三

こう云いつているところへ女が這はい入つて来たので、フェリックス

が女に言った。「おい。アルフレット君に礼を言つてくれ。お前は看護婦を仰おおせつ付けられたのだ。なんでも己おれはきようからはこう遣やつて寝ていなくてはならないのだそうさ。まあ、これが己の死ぬる寢床なのだから、その積りでいて貰もらおうか。」

女がひどくつらそうな顔をして聞いているので学士が云つた。

「馬鹿ばかを言うのを真面目まじめで聞いてはいけませんよ。ただ二三日こうして寝ているが好いいと、わたしが云つたのです。乱暴に起きないように、あなたは氣を付けて下されば好いいのです。」

「ふん。君は知るまいが、僕に付いていてくれるこの女は、大した天使だぜ。」フェリックスは皮肉な調子で女を褒めた。

学士は色々養生しやかたの為方を話して、女に監督を頼んだ。それから

フエリツクスに言った。「そこで君にきよう約束をして置くよ。

僕は隔日に医者として見舞いに来る。それで沢山なのだ。その外の日に来た時、病気の事を言いつこなしだよ。僕はいつもの通り、友達ともだちとして話しに来るのだからね。」

「いやはや。君は豪えらい心理学者だよ。しかしそんなければ外の病人に遣つて見せ給たまえ。そんなあさはかな手には、僕は乗らないからね。」

「困るね。僕は男子が男子に話しをする積りで言っているのだ。好よく聞き給えよ。なるほど、君は病気だ。しかし旨うまく撰せつせい生せいをすれば直す事の出来るのも事実だ。僕は何も加減をして物を言うのではない。」こう云つて置いて、学士は立ち上がった。

フェリックスは疑い深い目附めつきをして、学士を見送った。「まるで本当の事を言っているように見えるから可笑おかしい。」

「信ぜないのは君の勝手だよ。」学士は手短にこう云った。

「今のは拙ますかったね。大病人に荒い詞ことばを使って気を引き立てるな」というのは、古い手だ。」

「そんならあした来るよ。」学士は戸の方へ歩いて行った。そして女が付いて出そうにしたので、「いなくてはいけません」と、命令するように囁ささやいた。

女は学士の出て行った跡の戸を締めた。それから顔に微笑びしょうを見せて、縫物を取り出して、卓つくえの側そばへ寄った。

フェリックスは女の様子を見ていて、こう云った。「おい。こ

こへ来ないか。そうだ。お前は大した親切な女だね。」この優しい言葉を、苦々しい、鋭い調子で云ったのである。

帰ってから暫くの間はマリイはフェリックスの床の側を離れず
にいて、親切に看病した。その間女の様子は、落ち着いて、わざ
とらしくなく晴やかに見えていた。勿論病人の気を落ち着ける
ようにと心掛けていたのである。また実際時々は病人もそれを見
て心持ちを好くしていた。しかしその反対に、女の落ち着いた様
子に反感を起す事もある。何か今新聞で見た事を話したり、病人
の様子が好く見えると云ったり、病気が直ったらどんな生活をし
て見ようと云ったりする時、フェリックスは不機嫌になって、

「どうぞもう己に構わないでいてくれ」という事もある。

医学士は毎日来た。一日に二度来る事もあった。しかし友達の体の事などは少しも話さない。両方で知っている人の噂うわさをしたり、病院で見て来た話しをしたりする。稀まれには美術文学の話しもある。そしてなるたけ病人に多く物を言わせないように力つとめている。そんな風に恋人と友達とで、病人を気楽にならせようとしているので、病人も体の好くなる時が来るだろうかと思わずにはいられないようになる事がある。重い病人に対して、側にいるものがこんな狂言をするものだという事は、無論病人の心に分っている。狂言だ狂言だと思いがら一しよになつて話している。しかしその内にいつとなく引き入れられて、自分がまだ何年も生きています。

ずと思うらしい詞が、自分の口から出る事がある。

三十四

そういう時は病人は反省して、死に掛かった病人というものは、却^{かえ}つて気分が好^よくなつて、健康になる夢を見るものだという話しを思い出す。それからその道理から推して、自分の気が鬱^{うっ}したり、心配が起つて来たりするのを、却つて気分的好^いいよりは有望な徴候だと思ふようになる。さてそんな論理は余り間違つていると思ふので、とうとう病氣の未来なぞというものは知れないものだ、たしかめられないものだという結論に到着する。

フェリックスはまた本を読み出した。もう小説は面白くなく、読む内に厭あきて来て、就なかならず中作中の人物が栄華をしたり、色々に活動するのを見ると、癩しやくに障さつて来るのである。そこで哲学書を読む事にして、マリイに言い付けて、本箱からシヨペンハウエルとニイチエとを出させた。暫しばらく読んでいる内は、その説せついていゝる道理から平和を見出みだす事も出来た。しかしそれが長くは続かなかつた。

ある晩医学士が来た時、病人は丁度シヨペンハウエルの一巻を布団の上に伏せて、厭いやな顔をして空くうを見ていた。側そばには女が手て為し事ごとをしていた。

「君、僕はまた小説の方を読もうと思う。」病人は学士の顔を見

て、激したような調子でこう云った。

「どうしたのだ。」

「小説なら、兎に角嘘だとかくそという事を白状して書いているのだ。立派な詩人が上手に書いたのでも、下手な素人しろうとが拙く書いたのでまずも、それだけは同じ事だ。それと違つて、この先生なんぞは気取つているのだ。」こう云つて伏せてある本の方を見た。

「いやはや。」

病人は床の上で起き上がった。「哲学者なんという奴はやつ、自分が神のように丈夫でいて、人生を厭ういとだの、平気で死を待つていいるだのというのだ。そういうながらイタリヤで散歩をしていて、賑にぎやかな生活に身の周囲まわりを取り巻かれているのだ。僕はそういうの

を気取っているというのだ。そんな先生を部屋の中へ閉じ込めて熱を出させて、息苦しくして遣やつて、お前は来年の一月一日じつから二月一日じつまでの間に土の下に埋うめられるのだといって聞かせて、其そのうえ

上でどんな哲学を説き出すか、聞いて遣やりたい。」

「よし給たまえ。そんなパラドックスな洒落しゃれは。」

「君には分らないよ。分るはずがない。僕は読んでいると胸が悪くなる。みんな気取りやだ。」

「そんならソクラテスなんぞはどうだ。」

「あいつも狂言をしていた奴だ。あたりまえの人間なら、未知の事物に対しては、恐怖を感じなくてはならない。旨うまく行つたところで、その恐怖を隠しているに過ぎない。僕は正直な話をするが

ね、一体これまで歴史に書いてある臨終の心理というものは皆偽みなぎ物だ。^{ぶつ}それは人に名を知られている、歴史上の人物は、後世の人のために、狂言をしなくてはならない義務があるように思っていたからだ。僕なんぞでさえそうだ。僕が何をしていると思う。こうして、もう僕に対してなんの利害得失をも有せない事柄を、君なんぞと話しているのも、可笑おかしいじゃないか。これはなんというものだろう。」

「もうよせよせ。殊にそんな無意味な事をいうものじゃないよ。」

三十五

「僕だつてやはり狂言をする義務を有しているように思つて、こんな事を饒舌しゃべるので、實際を言つて見れば普通の人間の夢にも知らない、非常な恐怖に僕は襲われているのだ。それと同じ事で、英雄だつて、哲学者だつて、恐怖していたには相違ない。ただあいつらは狂言が上手だつたのだ。」

「もうおよしなさいよ」と女が頼むように云いつた。

「大方お前なんぞも、アルフレット君と同じように、平気で死を向うに見る事が出来ると思つているのだらう。それは死というものを知らないからだ。犯罪者になつて死刑の宣告を受けて見るが好いい。それか、己おれのような体になつて見るが好いい。その上でなくては話しは出来ないのだ。盗坊どろぼうは平気な顔で絞首台へ連れて行

かれる。大哲学者は毒薬を呑^のんでから、旨^{うま}い文句を考える。革命を起して、失敗した英雄は、銃の先を胸に突き付けられて笑う。そういうのはみんなごまかした。己には好^よく分かっている。平気を装ったり、笑ったりするのは気取るのだ。なぜというに死に対しては非常な恐怖を抱^{いだ}いているに相違ないからだ。死の恐怖は死そのものと同じように、自然の現象だ。」

学士は静かに寢台^{ねだい}の縁^{ふち}に腰を掛けて聞いていた。そして病人が饒舌^やり止んだ時こう云った。「第一君そんなに長く饒舌^やつてはいけない。殊にそんな大きい声を出してはいけない。それから君のいう事は飽くまで馬鹿^{ばか}げている。それはひどいヒポコンドリイというものだ。」

「それにあなたきようなんぞはそんなに御様子が好いじやありませんか」と女が口を出した。

「君、ほんとにあんな事を思っているのだろうか」と、病人は学士に向いて云った。「どうだろう。こいつに君が本当の事を言つて聞かせてくれたら。」

「ところがほんとの事を言つて聞かせなくてはならないのは、マリイさんじゃなくつて、君なのだ。しかし君は何を言つたつて、きようは聞きそうでないから、僕は止めにして置く。まあ、二三日立つて、その間あいだ今のようながえんぜつな長演説を慎んでいる事が出来たら、君も起きられるようになるだろう。その上で君にしつかり言つて聞かせる事があるよ。」

「ふん。どうも君の腹の中がこんなに見え透かないといいのだがなあ。」

学士は「もう好いよ」と云つて置いて、女の方に向いた。「あなたもそんな困つたような顔をしていないが好いのです。この先生だつて今に物の分かる時も来るでしょう。それはそうと、なぜ窓が一つも明けてないのですね。外はひどく好い秋日和ではありませんか。」

女は立つて窓を明けた。丁度日の暮れ掛かる時である。外から吹き入れて来る風が如何いかにも好い心持ちなので、女は暫しばらくその風に吹かれていたように思った。そこで窓の側そばに立ち留まつて、頭を外へ出して見た。その時女の心持ちは、病室を出てしまつて

外に一人でいるようであつた。もう何日もこんな好い心持ちのした事はない。それから頭を引つ込めると、病室の、鈍い空気が顔を撲うつて胸が詰まるような気がした。見れば病人と学士とで何か言つてゐるが、詞ことばは聞えない。しかしそれを聞きたくも思わなかつた。そこでまた頭を窓から外へ出した。往来は人けが絶えてひつそりしている。近い大通りから馬車の通る音が微かすかに聞えるばかりである。その内窓の下の人道を散歩する人がちらほら通る。向いの家の門かどぐち口には、女中が二三人出て、何か話して笑つてゐる。向いの家の窓が明いて、若い上さんが、自分と同じように顔を出して外を見る。マリイはそれを見て、なぜあのお上さんは散歩に出ないのだろうと思つた。そしてどの人もどの人も自分よりは幸

福なように思つて羨ましがつた。

三十六

爽さわやかな九月の天氣が来た。日は早く暮れるが、風もなく、寒くもない。

マリイは隙ひまがあると、病人の側そばを離れて、開けた窓の前に椅子いすを据えているのが癖になる。殊に病人の眠っている間は、何時間もそうしている。なんだかがっかりしたようで自分の境遇がどんなものだという事を、はつきり考えるのが厭いやである。そればかりではない。何事をも考えるのが厭である。過去の事も思わず、未

来の事も思わずに、何時間もぼんやりしている事がある。目を大きく明くわいて空を見詰めて坐すわっている。ただ外から気持ちの好い風が這はい入って、自分の額を吹いてくれれば、それで満足に思っている。その内病人がうめくので驚いて見に行くのである。しかし自分の病人に対する同情が次第に薄らいで来る。憐れん憫みんが變じて神經過敏になつて、苦痛が變じて恐怖と冷淡との混合物になつて来る。しかし自分が悪い人になつたとは思われない。いつか学士が、あなたは天使のようだと云いつたが、そういう褒ほめ詞ことばを受けて恥じなくてはならないような氣はしない。今のように冷淡に傾いて来たのは、それは疲れたのである。極端に疲れたのである。もう外へ出なくなつてから十日以上になる。なぜ出ずにいるのだろうか

と考えて見る。そうすると病人をおこらせまいと思つて出ないのだという事が、新しい発明のように心に浮ぶ。無論側にいるのがつらいとは思わない。あの人を愛している事も決して昔に劣らない。ただ自分は疲れたのだ。それも無理ではない。こう思つている内に、外へ出たいという要求が次第に切になつて来る。これを無理に我慢しているのは、子供らしい事ではないか。病人だつて少し考えて見たら分かりそうなものである。一体もし病人がおこりはすまいかと思つて、こんなに久しく出ずにいたのは、随分病人のために尽していたというものはあるまいか。自分が病人を深く愛している証拠ではあるまいか。

女はこんな事を考えている内に、手に持っていた縫物を床の上^{ゆか}

に取り落してちよいと寝台ねだいの方を見た。もう寝台ねだいのあたりは薄暗くなっている。きようは病人も落ち着いている。今眠ったところである。こんな時にそつと出て行ったら、病人は知らずにいるだろう。ちよいとあの梯子はしごを下りて、あの町の角を回れば、賑にぎやかな公園に出られる。それからあの都の中心を輪なりに繞めぐっている大通りに出て、電燈の沢山点つついている、オペラ座の前を通る。あの辺へんはいつも賑かである。その賑かさが如何いかにも恋しい。しかしそんな事が出来るのはいつだろう。無論病人が直つてしまえば出来るだろう。あの人が病気でいては、往来や、公園や、大勢の人を見たつて詰まらない。

女はどうとう出ずにいた。そうして寝台ねだいの側へ椅子を持って行

つて病人の手をつかまえて涙をこぼした。その涙は、もう側にいる男の事を考えなくなつても止まらなかつた。

その日の午後であつた。学士が来て見ると、病人がこの頃ごろになく好い血けつ色しよくをしていた。それを見て学士が云つた。「この塩あ梅んばいだと、もう二三日立つてから起きられそうだね。」

「そうかね」と病人は云つたが、何事に依よらず友達の言う事を猜疑さいぎの耳を持って聞く癖が付いているので、嬉うれしくも思わなかつた。

学士は、卓たくの側たぐにいるマリイに向いて云つた。「あなたも少し血けつ色しよくが好よくつても好いね。」

その詞を聞いて、病人も女の顔を見たが、なるほど目立って色が悪い。一体この頃病人は、女の親切を感謝したいような心持ちになると、わざとその心持ちを排斥する癖が付いている。女の犠牲的精神が幾分か偽物らしく思われて、その忍耐の表情が白々しく思われたのである。そこで女がいつその事じれつたがって来れば好いと思う。いつか詞か科で、女が薄情な根性を曝露したら、その時面と向ってそう云って遣りたい。もう疾うからお前が面を被っているという事は知っていた。己は胸が悪かった。どうぞ己の側を退いて己に落ち着いて死なせてくれと云って遣りたい。

女は学士の詞を聞いて、少し顔を赤くして微笑んだ。「わたくしちつとも弱りなんかしていませんわ。」

三十七

「いや。そうではありませんよ。フェリックス君だって、自分が直つて、あなたが病気になつては困るでしょう。」こう云いながら、
学士は女の側へ歩いて行つた。

「だってわたくし本当になんともないのでございますもの。」

「一体あなたはちつとも外へ出ないのでですか。」

「出たくなんざありませんもの。」

「おい。フェリックス君。マリイさんはまるで君の側を離れつこなしだと云うぜ。」

「そうだろう。御承知の通り天使だからね。」病人は平気でこう云った。

「しかしね、マリイさん、それはあまり馬鹿ばかげていますよ。そんなにして無駄な骨を折るのは、子供らしくて、なんの用にも立ちません。是非折々は外へお出でなさい。わたしがその必要を言明しますね。」

女はかすかに微笑ほほえんだ。「なぜそんなに仰おつしやいますの。出たくなけりやあ好いじやありませんか。」

「それは出たくても出たくななくても同じ事です。一体その出たくないというのが、もう悪徴候です。是非きようは出なくてはいけません。そして一時間許り公園のベンチに腰を掛けておいでなさい

い。それとも厭いやなら、馬車を雇いつてプラアテルあたりへでも行つておいでなさい。あの辺へんはこの頃ごろ面白い時節ですから。」

「でも。」

「でもなんぞと云つたつて駄目です。そんな風が続いて遣やつていて、余り天使になり澄すと、体が台なしになりますよ。まあ、ちよつとそこの鏡で顔を御覧なさい。実際大変な事になるのです。」

学士がこう云つた時、病人はちよいと胸を衝つかれたような心持ちがした。抑えた怒が腹の中を掻かき交あぜている。なんだかこの会話をしている時、マリイの顔に、人の憐あわれみを乞こうような、自覚したる忍耐の表情が見えたように、病人は感じた。そして動かすべからざる真理でもあるように、この女は己おれと一しよに苦勞すべ

きはらず、己と一しよに死ぬべきはずの女だという思想が、頭の中をひらめき過ぎた。女が体を台なしにする。無論それで好いじゃないか。己が死に向つて進んで行くのに、あいつが薄赤い顔をして目を赫か^{かがや}していなくてはならないというのだろうか。一体アルフレットだつて女がそうすべきだと思ふのだろうか。それとも女までが自分にそんな考えを。

学士がさつき云つた事を繰り返して、女に勧めている間、病人は女の顔の表情を一しよう懸命^{うかが}覗つていた。とうとう学士は女に承諾させた。それはきよ^うの内に外へ出るといふのであつた。学士に言わせると外へ出るのも、看病すると同じように、女の病人に対して尽すべき義務の一つなのである。

「あんな事を言っているのは、己というものを度外視しているのだ。どうせ直らない病人だといふので、構わずに死なせる気なのだ。」病人はこう思った。そして学士が帰って行く時、ひどく冷淡に握手をした。心のうちに学士を憎んでいるのである。

女は学士を部屋の入口まで送ったきりで、直に病人の所へ帰つて来た。病人は唇を堅く閉じて、額に深い怒りの皺しわを寄せていた。その心持ちがマリイには分つた、底から好よく分つた。そして男の上へ身を屈かがめて微笑んだ。男は溜ため息いきを衝ついた。それから何か言おうとした。何か非常な侮辱を覷てきめ面に与えて遣りたいのである。そうするのが当然だと考えられるのである。女は優しく男の髪を撫なでて遣つて、顔には忍耐に慣れた、疲れた微笑ほほえみを続けて、口を

側に寄せて、親切に囁いた。^{ささや}「わたくし行かなくつてよ。」

男は黙っていた。その晩は夜の更けるまで、病人の側に坐つていて、女はどうとう椅子に掛けたまま眠つてしまった。

翌日学士が来た時、女は話しをしないように避けていた。しかし学士はきようは女の顔なんぞに構わない様子で病人とばかり話しをしていた。

学士はもう程なく起きて好いという事を、きように限つて言わずにいる。病人もそれを問う事を憚つている。^{はばか}一体病人は、きようは物が言いたくない。いつもになく口不性である。^{くちぶしょう}そして学士が暇乞いをして帰るのを、嬉しく思つた。^{うれ}

三十八

病人は女にも不機嫌な、短い返事ばかりしている。午後になつて何時間も黙っていた跡で女が問うた。「きようは御気分はどんなのですの。」

「どうだって好いじゃないか。」病人は両手を頭の上で組合せて、目を瞑ねむつて寐ねい入いつてしまった。

女は暫しばらく側そばで病人の様子を見ていた。その内頭がぼんやりして、夢見心地になつて来た。

暫くして女がふと心付くと、好よく寐た跡のように爽快な感じが

からだじゆうみなぎ
体中に漲っていた。女は立ち上がって、卸してあつた窓掛を
巻き上げた。なんだか近い公園から、遅れ咲きの花の香が、この
狭い町へ迷い込んで来たようで、部屋に這入って来る空気に、い
つにない美しい匂がある。女は病人の方を振り返った。病人はさ
つきと同じように寐っていて、呼吸も静かである。これまではこん
な時に、女はきつと一種の感動を起して、この部屋を離れる気にな
らずに、鈍い沈んだ心持に体を任せていたのである。それがき
ようはなんにも感ぜない。そして病人の眠っているのを喜んで、
心の内に何の争鬭をも起さずに、いつも平気でする事でもある
ように、一時間外へ出て来ようという決心をした。

女は足を爪立てて台所へ出て、女中に病室へ行っているように

差図した。それから帽子と蝙蝠傘こうもりがさとを持って、飛ぶように梯はしご子段だんを降りた。

女は往来へ出た。足早に狭い町を二つ三つ通り過ぎると、公園である。両側に大きい木や小さい木が植わっていて、頭の上には薄青い空がひろがっている。何もかも久しく恋しく思っていた景物ばかりである。

女はベンチに腰を掛けた。同じベンチにも、近所にある外のベンチにも乳母や子守が掛けている。並木の下では子供が遊んでいる。その内次第に暗くなつて来るので、もう遊びも末になつたと見えて、女おんなたち達はそれぞれ子供を呼んで、手を引いて公園を出て行った。とうとうマリイは一人になった。ちらほら人が通り過

ぎる。男の中には、ちよつと振り返つてマリイを見て行くものもある。

とうとう外へ来たのである。一体どうしたというのだろう。丁度こういう時、人に邪魔をせられずに、自分の現在の地位を見渡して、好く考えて見なくてはならないと、女は思った。自分の思想を、はつきりした詞ことばに直して、口の内であつて見たいのである。わたしがあの人の側にいるのは、あの人を愛しているからである。側にいなくては気が済まないから側にいるのだ。そうして見れば犠牲になつていふものではない。さてこれからどうなるのだろう。いつまでこれが続くだろうか。どうせあの人は助からない。しかし末はどうなるのだろう。いつかあの人と一しよに

死のうと思つた事もある。それになぜ今はこんなに余所余所よそよそしくなつてゐるのだらう。

どうもあの人は自分の事ばかり思つてゐるようだ。今でもわたしと一しよに死にたいのだらうか。こう思うや否や、きつと一しよに死ぬる積りでゐるのだという断案が、はつきりと下された。しかしその時の男の姿は、永遠に愛人を側に寝かしていたいという優しい青年の姿ではなかつた。意地悪く、嫉みねた深く、一旦たん我物にした女だからというので、無理に引き摺ずつて連れて行く人の姿が見えたのである。

その時若い男が一人来て、マリイの側に腰を掛けて何か言つた。女はうっかりして、「なんです」と問い返した。しかし直すぐに氣

が付いて、立ち上がった、足早にそこを逃げた。

公園を歩いている間、出逢^{であ}う人の自分を見るのが不快であった。例の輪形^{わなり}になった大通りへ出て、馬車を呼んで、そこらを散歩するように歩くと云い付けた。

日が暮れた。女は馬車の隅に、楽に身を寄せて、車の心地好く滑って行くのを喜び、夜の薄明りと、ひらめく瓦斯^{ガス}燈^{とう}の明りとの間を出没する、種々の事物の移り変わるのを眺めて楽しんだ。九月の、天気の良い晩なので、大勢の人が散歩に出ているのである。

三十九

市民公園の前を通る時、中から爽かな軍樂の音が聞えた。マリイはザルツブルヒで合奏を聞いた晩の事を思い出した。そしてこの周囲の事物が皆無常な無価値なもので、それを擲つて死ぬるのは、なんでもないと思つて見ようとしたが、どうもそれは出来なかつた。自分の心に沁み込んで来る心地好さを忘れようとしても、忘れられなかつた。なんだか愉快で溜まらない。あそこには電気燈の白く照つている劇場がある。あそこには議事堂前の広場の並木の間から、人が暢気らしく往來を歩いて来る。あそこには珈琲店の前に大勢の人が腰を掛けている。この色々な人は心配なんぞはなさそうに見える。事に依つたら全く心配はないのかも知れない。柔かい、暖かい空気が顔に当る。こんな心持の好い晩

を、生きていて何遍でも味う事が出来る。その外天氣の好い夜昼を何千度たびでも楽しんで過ごす事が出来る。健康の喜びの感じからだが体からだ中じゆうの脈々を流れて通る。この色々のものが総すべて愉快に感ぜられる。

一体永い間死ぬるほどの疲れに体を委ゆだねていたものが、たった何分間かこんな楽らくをしているのが、不都合だというべきだろうか。自己の存在という事を自覚するのが、当然の権利ではないだろうか。自分は健康である。年も若い。千百の泉から一時じに人生よろこびの喜よろこびが流れ出て、自分の上に注ぎ掛かって来るのである。これは自分かぶさは呼吸をしているという事や天が自分の上に覆かぶさっているという事と同じように自然である。それを恥じなくてはならないだろうか。

マリイはふと病人の事を考えた。もし奇蹟きせきがあつて、あの人が直つたら、自分は無論あの人と一しよに暮すだろう。あの人の事を思えば、優しい、寛恕かんじよして遣りやたい悲哀きげが萌もして来る。そしてもうそろそろあの人の側そばへ歸つて遣らなくてはならない時だろうかと思う。

しかしあの人はわたしの側そばにいて遣るのに満足しているだろうか。わたしの優しくして遣るのを、難ありがた有がく思っているだろうか。なんとという毒々どくどくしい詞ことば使つかいをこの頃ごろはするだろう。なんという憎々にくしい目附めきでこの頃は見るだろう。それから接吻せつぶんなんぞはどうしたのだろう。もう接吻せつぶんという事をしなくなつてから大ぶ久あしくなつてゐる。こう思うと同時に病人の唇あの蒼おぎめて、いつ

も乾いているのが思い出される。それから額にキスをして遣ろうかと考える。ああ額は冷たくて、いつも汗ばんでいた。まあ、病気というものは厭いやなものだこと。

マリイは車に背を寄せ掛けた。そして故意に病人の事を思うまいとした。病人の事を思わないようにするには、往来の方を熱心に見なくてはならない。こう思つていつまでも記憶して置かなくてはならないものを見るように、往来の事物の一つ一つに目を付けていた。

フェリックスは目を開あいた。寝台ねだいの側には蠟燭ろうそくが一本弱い光を放っている。その椅子いすの上に、婆あさんが手を膝ひざに置いて、

冷淡な様子をして坐^{すわ}っている。

「あいつはどこへ行ったのだ。」病人がこういうと、婆あさんはぎくりとした。そして「さつきお出掛けになりましたが、直^すぐお帰りになるはずです」と答えた。

「もうあっちへおいで」と病人が云^いった。それでも婆あさんはもじもじしているので、「行っても好^よいというじゃないか、用はないのだ」とすげなく云った。

病人は一人になった。これまでにいぞ覚ええない不安が襲^襲つて来た。

女はどこへ行ったのだろう。そう思うと寝^ね台に寝てはいられないような気がして来た。しかし起きて見ようとするだけの決心も

出来なかつた。

忽こつぜん然ぜんこんな事が頭に浮んだ。「事に依つたらあいつは逃げたのではあるまいか。長く己おれを見棄みすてて行つてしまつたのではあるまいか。もう己の側で暮しているのが我慢しにくくなつたのだ。己がこわくなつたのだ。あいつは己の腹を見破つたのだ。それとも己は寢言でも云つたのではあるまいか。もう大ぶ久しい間、はつきりとは考えなかつたが、始終己の心の底には、思つていた事なのだから、いつかそれを声に出して言つたかも知れない。それを聞いて、女は一しよに死にたくないと思つたのではあるまいか。

四十

思想は織るが如くに頭の内を往来する。毎晩発する熱が出て来た。「一体己はあいつに優しい詞を掛けないようになってから、もう大ぶ久しくなる。ただそれだけの事で逃げたのかも知れない。己は癩癩を起したり、猜疑の目付きで見たり、苦々しい事を云ったりした。礼を言わなくてはならないのに、そんな事をしたのだ。よしや感謝して遣らないまでも、少くも公平にだけは考えて遣るべきであったのだ。ああ。ここにいてくれれば好いなあ。どうもあいつがいなくては困る。あいつがいなくなるだろうと思うと、胸が燃えるように苦しい。己む事を得ないなら、どんなにもあやまって遣りたい。これからはどんなに自分が苦しくても、

一人でこらえて、言わずにいても好い。胸が押し付けられるように切ないのに、微笑ほほえんでいても好い。息が詰たままって溜たまらないのに、手にキスをして遣つても好い。己はむちやな夢を見るのだ、よしや夢に何か言つた事があつても、それは熱に浮されたのだと、よく言つて聞かせよう。それから己はお前を崇拜しているのだ。お前になるだけ長なが生いきをさせたい、末長く樂に暮させたいと思つているのだと誓つて遣ろう。どうぞ己の側そばにだけいてくれ、己の寢床の側を離れてくれるな、一人で死なせてくれるなど頼もう。お前が側にいるとさえ思えば、平和な気分で、明るい理性で死を待つ事が出来るのだと云おう。どうせ程なく死ぬるのだ、きょうあすかも知れないのだ、それだから側にいてくれなくてはならない、

いてくれんでは心細いと云おう。あいつは一体どこにいるのだろう。どこにいるのだろう。頭の中で血が渦巻いている。目が昏んで来る。息が忙しくなつて来る。それに誰も側にはいない。なぜ己は婆あさんを追い出してしまっただろう。あれだつて人間だ。

これでは己は手も足も利かないのに一人でいるのだ。」

病人は起き上がった。そして思ったより力強く感じた。しかし呼吸が如何にも苦しい。なんとも言われないうちに切ない心持ちがする。とうとう我慢し切れなくなつて床から出た。そして着物を半分着て窓の所へ出て見た。新鮮な空気が顔に触れる。病人は深い息を二三度した。それは好い心持ちであつた。寝台の縁に掛けてあるシヨオルを取つて体に巻いて、椅子に腰を掛けた。それ

から数秒間は思想が乱れて、ぼんやりしていたが、またしては電光のように「どこにいるのだろう、どこにいるのだろう」という考えが閃き過ぎる。^{ひらめ}「今まで己が眠っている間に、^{あいだ}出て行った事があるのだろうか。そうかも知れない。どこへ行くのだろう。つい一二時間病室の陰気な空気を除^よけている積りだろうか。それとも己の病気を嫌って除けるのだろうか。己の側にいるのが厭^{いや}になったのだろうか。この部屋に漂っている死の影がこわいのだろうか。生が恋しいのだろうか。生を求めるのだろうか。何を求めるのだろうか。何を思っているのだろうか。どこにいるのだろう、どこにいるのだろう。」

飛び翔^{かけ}るような思想が囁^{ささや}きになり、うめき出すような詞になる。

そして「どこへ行つたのだろう」と叫ぶのである。女がこの部屋を逃げ出して、自由を得た喜びの微笑を唇の上に湛えて、梯子段を駈け降りて、どこか病氣や、胸の悪い事や、ゆるゆると死んで行く有様の見えていないところへ、どこか、ある不明なもの、ある花咲き匀におうもののある所へ、逃げ込んで行こうとするのが、目の前に見えて来る。女の姿は、赫かがやく霧の中へ隠れてしまって、その霧の中から、女の笑わらいごえ声こゑが聞える。幸福の笑声、歡喜の笑声である。そしてその霧が散つてしまうと、女の踊っているのが見える。女はくるくる廻まわつて踊りながら見えなくなってしまう。その時ごろごろいう音が次第に近づいて来て突然止やんだ。男は「どこへ行つたのだろう」とまた思つて、ふと気が付いて窓の所

へ走つて行つた。ごろごろいつたのは馬車で、それが門口に留ま
つている。馬車ははつきり見える。そしてその中から人が出て来
る。それはマリイであつた。

四十一

相違なくマリイである。出迎えようと思つて、次の間へ飛び出
した。そこは真つ暗である。どこに戸の撮みがあるか見えない。
まごまごしている内に、外から鍵を挿て錠を開けた。戸が開いた。
マリイが這入つて来た。廊下から微な瓦斯燈の光が差し込んで、
女の身の周囲を照している。男がくら闇にいたので、女が知らず

に打^ぶつ付^つかつて、きやつと云^いった。男はいきなりその肩^{かた}を掴^{つか}んで、部屋の中へ引き摺^ずり入れた。そして口^{くち}を開^あいて何か言^いおうとしたが、声^{こゑ}が出^いなかつた。

「あなたどうなすつたの。気が変^かになつていらつしやるじゃありませんか。」

女は恐怖^{こゝろ}の余^ありにこう云^いつて、男の手^てを振りほどこうとした。

男は棒^{ぼう}立ちに立^たっている。その様子^{ようす}が見^みる見^みる丈^{だけ}が伸^のびて大きくなるように見^みえる。男はようよう物^{もの}が言^いわれるようになった。

「どこから帰^{かえ}つて来^きたのだ。どこから。」

「まあ、あなたしつかりして下さいよ。どうしてそんな。まあ、そこへお掛^かけなさいよ。」

「どこから帰って来たのだ。どこから。どこから。」男の声は前よりは小さくなつて、茫然ぼうぜんとして言っているように聞える。どこからを繰り返した声は、ほとんど囁くささやようである。

女は男の手を握つた。その手は焼けるように熱かつた。

女に手を引かれて、男は長椅子ながいすの所へ連れて行かれた。そして女は椅子の隅へ男を押し付けると、男は素直にそこへ坐すわつて、なんだか正気になろうと努力するような様子で、周囲しゅういを見廻した。そして今度は、はっきりした声で、前と同じように、「どこから帰つたのだ」を繰り返した。

女はようよう落ち着いて、帽を脱いで、背後うしろの椅子の上に投げて、男の側そばへ腰を掛けた。そして媚こびるように云つた。「わたく

し、たった一時間外に出て、風に当って来ましたの。なんだか、自分でも病気になりはしないかと思つたものですから。病気にでもなろうもんなら、あなたのお役にも立たないでしょう。帰りは、早くお目に掛かろうと思つて、馬車に乗つて帰りましたの。」

男は長椅子の隅に坐つて、がっかりしたような様子でいる。そして女の顔を横から覗き込んで、なんにも言わない。

女は熱い男の頬ほおをさすりながら、語り続けた。「ねえ、おおこりなすつたのではないでしょう。それにあの女中に、わたくしの帰つて来るまで、お側にいるように云つて置きましたわ。いませんでしたか。どこへ参りましたの。」

「己おれがあつちへ行けと云つたのだ。」

「なぜそんな事をなすつたの。あれはわたくしの帰るまで、お側にいるように、そう云つて置いたのではありませんか。わたくし早くお側へ歸つて来たくてなりませんでしたの。幾ら空気が好くよつたつて、あなたがいらつしやらなくなつては、詰まりませんわ。」

男は病氣な子供のように、頭を女の胸に寄せ掛けた。女は昔したように、男の髪に軽く接吻せつぶんした。男は訴えるような目付で、女を見上げた。「おい。己の側にいつまでもいてくれなくつてはいけないぜ。」

「ええ。」女はまた男の濡しめつた乱みだれがみ髪髪に接吻した。女はなんとも云えないほど悲しかった。泣きたいようであつた。しかしその感動には一種の枯れた、乾燥ひからびたような心持ちが交つていた。ど

ここからも慰藉いしやは来ない。自分の悲痛の内にも、それを見出す事みだが出来ない。そして男の涙の頬を伝わって流れるのを見て、その涙うらやを羨ましく思った。

それからは夜も昼も女が男の病床を離れずにいる。食事を運んで来る。薬を飲ませる。男が気分が好くて、何か聞きたいと云うと、新聞やら、小説の一節やらを読んで聞かせる。

女の散歩に出た翌朝よくあさから雨が降り出して、いつもより早く秋が来た。窓の外を見てみると、毎日朝から晩まで、ほとんど小止おやみなしに降る、細い、鼠ねずみいろ色の雨の糸が見えている。

四十二

この頃ごろになって、病人は夜折々、何やら連続のない事を言う事がある。そんな時には、女が機械的に、男の額や髪をさすつて遣やつて、「お寐ねなさいよ、お寐なさいよ」と囁ささやく。子供が夜中に不安になった時、母が宥なだめるような工合ぐあいである。見る見る男は弱つて行く。しかし苦痛はひどくない。病気の元を思い出させるような、短い間の呼吸困難が折々あるが、それが過ぎ去ると、一種の弛しかん緩状態になる。そしてもう自分で、なぜそんな状態になるかを考えて見るほどの力もない。ただ折々ふと気が付いて、「なぜ己おれはこの頃、何事にもこんな冷淡になったのだろう」と云いう事が

ある。外で雨の降っているのを見ると、「ああ、秋だな」というが、それ以上の事は考えない。自分の病気がどうなるだろうという事も考えない。死をも思わない。健康をも思わない。側にいるマリイも、この頃は病人の様子がどう変わるだろうなどとは思わないうようになった。たびたび見舞いに来る医学士もただ習慣的に見舞いに来るといふ風になった。勿論^{もちろん}学士は外にいて、生々した世間の状態を見て暮すのだから、この病室へ這入^{はい}つて来る度ごとに、病人の様子が日々に変るのが見える。学士はもう全然希望を擲^{なげう}つてしまった。そして病人の身の上にも、側に付いている女の身の上にも、ある新時期の来たのを認めた。それは人間が深い感動を閲^{けみ}した跡で到達する時期である。その時期には希望もなければ

ば恐怖もない。その現在の感じも、過去を省みるという事もなく、未来を見渡すという事もないので、鈍く、ぼんやりしている。学士はいつも這入って来る時、一種の不愉快を感じて這入って来て、病人と女とが変った事もなくているのを見て、始めて安心して息を衝くのである。いずれもう遠からず、この二人は最後の決心を促される時期に逢うのである。

ある日学士は、やはりこんな事を考えて、梯子を升つて来た。戸口から這入って見ると、女が次の間に、青い顔をして、手を組み合せて立っている。「どうぞいらつしやつて下さいまし」と云つて、女は学士を病室に案内する。学士は急いで這入って見た。

病人は床の上に坐っている。そうして憎々しい目附で二人を見

て云った。「一体己をどうしてくれるのだい。」

学士は足早に側へ寄った。「君こそどうしたのだ。」

「いや。君が僕をどうしてくれるのか聞きたいのだ。」

「まあ、それはなんと**いう馬鹿**げた物の言いようだね。」

「君もあいつも、僕を行き着かしてしまふのだ。」病人の声は叫ぶようである。

学士は病人の手を握ろうとしたが、病人は荒々しく自分の手を引いた。「**廢**してくれ**給**え。マリイもそんな手付きなんぞをして**いる**には及ばない。僕はただ君やあいつが、僕をどうしてくれる**のだ**か、それが聞きたい。これからどうなる**のだ**かそれが聞きた**い**。」

学士は落ち着いた声で云った。「君さえそんなにむちやくちやに興奮しないでいれば、もつと早く好よくなるのだ。」

「己はもう随分長い間こうして寝てばつかしいのだ。それを二人共平気で見物している。」こう云い掛けて病人は突然学士の方に向いた。「一体君は僕をどうしてくれるのだ。」

「まあ、そんなわけの分らない事を云うのは廃し給え。」

「だって君は僕をどうもしてくれないじゃないか。もう時期は切迫している。それに誰たれも手を出して防いではくれない。」

「まあ、気を落ち着けなくてはね」と云つて、学士は寝台ねだいの縁ふちへ腰を掛けて、また病人の手を取ろうとした。

「君はもう僕を見放しているのだね。それだからこうして寝かし

て置いて、モルヒネばかり飲ませているのだ。」

「どうも今二三日の処ところは忍耐して貰もらわなくてはならないよ。」

四十二

「しかしね、こうしているのがなんの役にも立たないのだ。僕がこれからどうなるという事は、はっきり分かつている。なぜ君は僕をこんなにしりじり衰えて行かせるのだ。君にだって、マリイにだって、僕がこのままいってしまったのだという事は、分かっているに違いない。僕の身になって見給たまえ。どうも我慢が仕切れない。どうにかして見ようがあるうじやないか。君は医者じやな

いか。考えて見てくれ給え。どうにかしてくれるのが、君の義務だ。」

「それは手段はあるとも。」

「手段なんか、ないね。奇蹟きせきでも現われるなら、知らぬ事だ。ところが奇蹟なんぞは現われまい。そこで僕は兎とに角かくどこへか行こうと思う。」

「それは君がもう少し力付いて来れば、起きる事が出来るのだ。」

「いや。君に言うがね、そんなことを言っていると、機会は過ぎ去ってしまうのだ。なぜ僕がこの厭いやな部屋にいつまでもいなくてはならないのか。僕はどこかへ行きたい。この町が離れたい。僕の体に必要なだという事が、僕には分かっている。僕は春に逢あ

いたい。僕は南の国へ行きたい。僕の頭の上に暖かい日が照って
くれば、僕は丈夫になるのだ。」

「それは分かっているよ。南の方へ行くのは無論好い。しかしも
少し辛抱しなくてはいけないね。きょうなんぞ立とうと思つたつ
て立たれない。あすも駄目だ。その時期が来れば、僕がそういう
よ。」

「ところが僕はきょうでも立たれる積だ。この厭な部屋の外へ出
てさえしまえば、僕はたしかに生れ変つたような人間になる。こ
のままにしてここに置かれては、僕は一日一日危険を冒している
というものだ。」

「しかし兎に角僕は医者だよ。」

「それは君は医者に相違ない。しかし君は特別の場合を考えないで、どの病人をも同じように扱おうとするのだ。病人には自分がどうすれば好いという事が却かえつて好く分よかる。僕をこう遣やつて寝かして置いて、衰えさせてしまうのは、どうも好い加減な為しかた方で、不親切極まるのだ。南の方へ転地して、体が不思議に好くなつたものは幾らもある。たとえ一縷いちるの望みでもある以上は、何も手を束つかねているには及ばない。僕にだつてまだ望みはある。君のするように僕を運命もてあその弄ぶがままにして置くのは、実に冷酷極まるのだ。僕は是非南の方へ行つて見たい。春のある方へ行つて見たい。」

「好いよ。それは僕だつて承認しているのだ。」

女は急に口を挟んだ。「ねえ、あなた、フェリックスさんとわたくしとで、明日立ちましても好うございましょう。」

「そうですね。フェリックス君が僕に約束して、三日間動かずにいてくれたら、立たせる事にしましょう。兎に角きようなんぞ立たせては、僕が犯罪をするようなものです。どうしてもそんな事は出来ません。それにあの天気を御覧なさい。雨風です。どんな丈夫なものだつて、きょうなんぞは旅に立たない方が好いのです。」

「そんならあしただ」と病人が叫んだ。

「まあ、天気が少し好くなつたら、二三日の内に立つという事にするのだね。」

病人は学士の顔を、ねらうように見た。

「きつとかね。」

「きつとだ。」

女が「それ御覧なさい」と云った。

病人が学士に言った。「一体君はもう僕の命は救われないものだと思つているのだろう。そこで死なせようと思つたのだろう。それは間違つた人道だよ。人間が死ぬる段になると、故郷も何もあつたものではない。生きていられる所が故郷だ。兎に角僕は手を束ねては死にたくないのだ。」

「まあ、好く聞き給え。冬は南の方で送らせようと、僕が思つていたという事は、君も知つていなくてはならないはずだ。しかし

こんな天気には旅行するものはないからね。」

四十四

病人は女に言った。「兎とに角直かくすぐに支度をしてくれ。」

女は心配げに学士の顔を見た。

「それは支度はするが好いいよ。いずれいつか用に立つのだ。」
「学士がこう云いった。」

「すっかり支度をしてくれ。己おれはもう一時間すると起きて、日の差して来るのを待っている。日が差して来たら、直ぐ立つ。」

午後になつてフェリックスは起きた。転地をするという考えが、精神上によほど好影響を与えたらしく見える。気分がはつきりして、長椅子ながいすに寝転んでゐる。近頃ちかごろの物事に冷淡な様子もなく、絶望の発作もない。マリイの支度をするのを見て、色々な註ちゆうも文ぶんを言う。蔵書の中で、何々を持って行きたいと指図する。一度なんぞは、自分で立つて行つて書類を一山卓つくえの抽斗ひきだしから出して、それを行李こうりへ入れさせた。

「元から書き掛けているものに、目を通して見る積りだ」と、女に言った。それから女がその書類を行李の中へ入れようとしてゐる時、こう云つた。「己は長らくなんにもせずかえにいたが、却つてそれがためになつたようだ。どうも思想が成熟したかとさえ思わ

れる。今まで考えて置いた事が、今になって不思議に明瞭めいりように想像せられるようだ。」

雨風の日の翌日天氣が直つて、その翌日は意外に暖かになつて窓が開けていられる位になつたのである。そこで午後になつて病人が起きた時には、愉快な、暖かい日影ひかげが床ゆかの上に落ちて、片付け物をするためにひざまず跪いた女の髪かみの波を打っている上には、きらきらする反射が見えているのである。

丁度女が書類を丁寧に行李にしまつているところへ、医学士が来た。病人は長椅子の上に横になつていて、例の書き物の事を話した。

学士は微笑ほほえんだ。「それも悪いとは云わないよ。君だつて体は

大切にしているのだから、むやみに早く著述に掛かるような事もあるまい。」

「なに著述といっても、労力ではない。これまで闇の内に隠れていた、僕の思想の上に、新しい光線の反射が一ぱいに見えて来たような気がするのだよ。」

「それは好いね。」学士はこの詞をことばゆつくり言つて、病人の様子を見ている。

病人は虚空を凝視している。「君、僕を誤解してはいけないよ。思想といつても、はつきりした輪廓りんかくのあるものを持つていてのではない。ただ何かが出来そうな感じがあるばかりだからね。」

「そうか。」

「これまでも僕は、オルケストラが調子を合わせるのを聞くと、強い感じを受けた事がある。今に一斉に清い諧律かいりつが聞えて来るのだ。今にあらゆる楽器が正しく奏し始められるのだという感じだね。」
「こういう掛けて突然、汽車の室しつは詭あつらえてくれたのだね」と問うた。

「取つて置かせたよ。」

「そんならあすの朝は立たれますね」と、女が機嫌よ好く云つた。
女は忙しそうに箆筒たんすから行李へ、行李から書棚へ、書棚からまた行李へと走つて、物を整頓せいとんしては詰め込んでいる。

学士は妙な心持ちがした。なんだか面白い遊山ゆざんの旅に立つて行く、若い男女を見ているように思われるのである。きょうはこの

部屋中に、如何にも希望に富んでいる、濁りのない情調が漲っているのである。

学士が暇乞いをして出る時、女が次の間まで付いて出た。「ほんとに立たれる事になって好うございますわ。わたくし嬉しくて溜りませんの。いよいよ立つという事になってからは、フェリックスさんが、まるで別な人のようになつたのですもの。」

学士はなんとも答える事が出来なくって、ただ女と握手して帰りそうにしたが、振り返って云つた。「あなたに言つて置かなくつてはならないのですが。」

「なんでございますの。」

「わたしは医者ではあるが、同時にあなた方の友達ですからね、

何か僕に用が出来て来たら、僕はいつでも出掛けて行きますよ。どうぞ忘れないで電報を打って下さい。」

四十五

「そんな事になりますでしょうか。」女は驚いたような顔をして
いる。

「万ばん一ばんという事がありますからね。」学士はこう云いつて置いて帰
つた。

女は暫しばらく立ち留とどまつて考えていたが、余り長くここにいたら病
人がなんとか思いはすまいかと心配して、急いで病室へ帰った。

しかし病人はなんの気も付かずに、女の這入^{はい}つて来るのを待ち受けて、前の話しの続きを饒舌^{しゃべ}つた。「お前は知るまいが、これまでも太陽が己^{おれ}の体に好影響を与えた事はたびたびある。時候が段々寒くなったら、次第に南へ行こう。リヴィエラへ行くのだな。それからもつと先きになったら、アフリカへ行つても好^いい。どうだ。赤道直下にいたら、己はきつと傑作^まを纏^{まと}める事が出来る。」

いつまでも饒舌^{しゃべ}り息^やめないのです、とうとう女が側^{そば}へ行つて、男の頬^ほをさすりながら、微笑^{ほほえ}んで云つた。「もうお廃^よしなさいよ。あんまり軽はずみですわ。あしたは早く起きなくてはならないのですから、もうお寝なさいよ。」女は男の頬の赤くなつて、目の赫^{かがや}いているのに気が付いた。そして男の手を取つて長椅子^{ながいす}から起

き上がらせようとした時、男の手の燃えるように熱いのに驚いた。

夜よが明け掛かると直すぐにフェリックスは目を覚めた。丁度休日

に内へ帰る子供のような喜びを感じている。ていしやじょう停車場へ馬車に乗つ

て出掛けるはずの時刻より二時間も早く支度をしてしまつて、長

椅子に掛けて待っている。マリイも用が疾とづくに済んでいる。鼠ね

色ずみいろの外がい套とうを着て、帽子を被かぶつて、その上に青色の面ヴェ紗エルを

掛けて、女は窓に立っている。註ちゆうもん文もんした馬車の来るのを早く

見付けるためである。大抵五分置き位に、男はもう馬車が来はし

ないかと問う。もう男はじれつたがつて外の馬車を雇やいに遣やらう

かという時、「あそこに来ました」と女が叫んだ。それから「ア

ルフレットさんも来てよ」と女が言い足した。

丁度馬車と一しよに町の角を曲つて来た医学士は、愛想好く二階の窓に向いて挨拶あいさつをした。それから程なく部屋に這入はいつて来た。「おや。もう二人共そっくり支度が出来ているね。朝食あさしよくも済んだ様子だのに、そんなに早く停車場へ行つて、どうする積りだね。」

「だってフェリックスさんが、じれつたがるのですもの」と女が云つた。

学士は病人の側へ歩み寄つた。

病人は機嫌好く微笑んで、「旅には持つて来いの天気だ」と云つた。

「そうさ。きつと非常に愉快な旅行になるよ。」学士はこういながら、卓つくえの上の堅パンを一切れ取った。「頂ちようだい戴だいしても好いのだろうね。」

女は驚いた様子で云った。「あなたまだなんにも上がらずに出ていらつしやつたのでしょうか。」

「なんにも遣らないとはいわれませんよ。実はコニヤツクを一杯飲んで出ました。」

「そんならまだこの中に珈コ琲オがありまフしたようイですから、どうぞ。」女は無理に勧めて、珈琲の残つたのを茶碗ちやわんに注ついで、学士に出した。そして何か女中に言い付けに次の間まへ出た。学士はゆつくり一杯の珈琲を飲んで、茶碗を口から離さずにいた。そ

れは病人と二人ぎりになつたので、話しをするのが厭いやだからである。

間もなくマリイは這入つて来て、もう何もかも揃そろっているから、いつでも出掛けられるのだと云つた。

病人は立ち上がつて真つ先きに戸口を出た。鼠色の外套を羽織り、柔かい黒の帽子を被つて、手にはステツキを持つている。梯子は子段しごだんも真つ先きに降りようとして、欄干に手を掛けたが、直ぐよろけ出した。背後うしろにいた学士と女とが手を貸した。病人は「少し目舞めまいがするのだよ」と云つた。

「それはあたり前さ。何週間も寝台ねだいの上に寝ていたものが、久しぶりに起きたのだから。」こう云つて学士が片手を掴つかまえると、女

が反対の側の手を掴えた。そして両方から支えて、梯子段を連れて降りた。

病人の降りて来るのを見て、御者が帽を脱いで礼をした。向いの家の窓から女が二三人顔を出して、気の毒そうに見ている。学士と女とで、死人のように青い顔の病人を車へ連れ込むのを見て、やばん家番のおやし親爺も手を貸そうとして進み出た。

車が出て行つた跡で、家番と向いの家のおんなたち女達と意味ありげな、同情のある目付きをして顔を見合せた。

四十六

最後の鐸すずが鳴るまで、医学士が汽車の踏板ふみに足を掛けて、マリイと雑談をしていた。

フェリックスは車室の隅に腰を掛けて、何事にも興味を有せなような様子をしている。その内汽笛が鳴り出したので、病人もようよう気が付いたらしく、学士の方へ向いて合点合点をした。

汽車が動き出した。学士は暫しばらくの間、プラットフォオムに立ち止まって、見送っていたが、ゆるやかに踵くびすめぐを旋めぐらして帰った。

汽車が停車場ていしやじょうの屋根の下を離れるや否や、女は男の側そばへ腰を掛けて男の希望を尋ねた。コニヤツクの瓶びんの栓を抜こうか、本を取って渡そうか、新聞を読んで聞かせようかというのである。男はその親切に感じたらしく、女の手を握った。そして「メランに着

くのはいつだい」と問うた。女は確しかとした時刻を覚えていなかった。そこで男は女に旅行案内を調べさせた。昼ひる食しょくはどこで食べられるか、夜泊るのはどこであるか、などという事を調べたのである。その外いつも気にしない、色々な細かい事を調べさせた。それからこの列車に乗っている人の数は何人位だろうと云いつて、勘定をして見たり、その中に若夫婦がいるだろうかと云いつたりした。それから暫くしてコニヤックが飲みたいと云いつた。しかし一口飲むとひどく咳せきが出たので、これからは自分が飲みたいと云いつても、飲ませてくれないと困ると、女に言い付けた。

その跡で男は新聞の中で気象の事を書いてあるところを女に読ませて、天気よが好よさそうだという予報を聞いて、満足うなずらしく頷うなずい

た。その時汽車は丁度ゼンメリングを通っていた。男は注意して窓の外の景色の変るのを見ていて、折々「好いい景色だな」などという。しかしその声の調子は、喜んで言うらしくは見えなかつた。昼時分になると、女が用意して来た冷ひや肉にくを出して食べさせた。その時男はコニヤックを飲もうと云つた。女がそれは悪かろうとというと、男はひどくおこつた。女は為しかた方なしに少し飲ませた。今度は飲んででも障かえつらずに、却てひどく機嫌が好くなって、何事に付けても興味を有するようになった。窓の外に見える景色や、通過する停車場で見た事を批評するのである。その末にこう云つた。

「己おれがいつか読んだ物の中にソムナンビユウルの事が書いてあつた。そいつは自分の病気に利く薬を夢に見て知つたのだ。どの医

者も氣の付かなかつた薬だそうだ。その薬を飲むと病氣が直つたと云つてあつたよ。なんでも病人は自分のしたいと思う事をするに限ると、己は思う。」

「きつとそうなのよ」と、女が答えた。

「なんでも南の国に限る。南の国の空氣が好いのだ。世間の人は南の国の空氣の違うのは、あたたか暖で年中花を咲かせるのと、オゾンが少し多いのと、あらし嵐が吹いたり、雪が降つたりしないのと、ただそれだけだと思つている。実はその外にどんなものがあつちの空氣の中に漂つているか、たれ誰も知らないのだ。何か我々の夢にも知らない、秘密な物質を含んでいるかも知れないじゃないか。」

「と兎に角あつちへいらつしやると、あなたきつと御丈夫にお成り

なさいますわ。「女は病人の手を取って接吻した。

男は色々な事を話し続けた。イタリアでは大勢の画工に出逢う
だろうという事、古来王侯や芸術家が望んでロオマへ行つたとい
う事、自分がマリイと知り合いになるよりよほど前に、一度ヴェ
ネチアへ行つた事があるという事などを話したのである。とうと
う話し草臥くたびれて、腰掛の上に横になつた。それから夕方になる
までうとうととしていた。

四十七

女は向側に坐すわつて、男の様子を見ている。心持ちは割合に落ち

着いている。ただ気の毒だという、軽い同情がある。男の顔は如何にも青い。それに此頃このころめつきり更けて見えるようになった。初め美しかったこの男の顔が、春頃かたからこの方、どんなにか変わっただろう。女の思うには、自分の頬ほおだって、折々青く見える事はあるが、この男の顔の色は、それとはまるで変っている。自分の顔は、青い時は却かえつて若く、娘らしく見える。男のは反対である。同じ青さでも、自分は青くなるのが、男と違って得なのである。こういう考えは、この時初めてはつきり心に浮んだ。こんな事を考え付いて、なぜそれが切なく思われないだろう。これはきつと男に対する同情が無くなったのではあるまい。多分近頃自分が極端に疲労して、よしや折々気分が好よくなつたように思つても

疲労が真に直る事がないからであろう。こんなに疲労しているのは、却て自分の為合せしあわせである。もしこの疲労が無くなったら、男の身の上をどんなにか切なく感ずるだろう。そしていつかその感じをしなくてはならないかと思うと、それが今から如何にも恐ろしい。

こんな事を考えながら女は寐入ねいってしまったが、ある一刹那せつなにその眠りが突然醒さめた。あたりを見廻みまわせば、ほとんど真つ暗になつてゐる。車室の天井に下がつてゐる明りには布きれが掛けてあるの
で、室内は鈍い緑色に照されている。窓の外は闇夜やみよである。丁度長い、長いトンネルを通つて行くような気がする。

なぜ驚いて目を醒ましたのだらう。進行する汽車の車輪の音が、

単調に聞えている外には、あたりに物音はしないのである。

しばらくして目が薄明りに慣れたので、男の顔が見えて来た。よく

眠っているらしい。少しも体を動かさずにいる。暫く見ているうちに、^{たちま}忽ち男は深い溜息^{ためいき}を衝いた。気味の悪い、訴えるような声が出た。それを聞いて、女は動悸^{どうき}がし出した。さつき驚いて目を醒ましたのは、多分今のような溜息を聞いたからであろう。

こう思った直ぐ^す跡で、女はまたびっくりした。それはよくよく男を見ると、眠ってはいないのである。男は目を大きく、大きく見開いている。それがはっきり見える。この空^{くう}に向い、遠方に向い、暗黒に向って開いている目が、女のためには気味が悪くつてならない。その内男はまたうめいた。その声は前よりも気味悪く

訴えるようである。それから男は身を動かして、また溜息を衝いた。しかし今度のは苦しげではなくて、むしろ荒々しいのである。

突然男は両手を腰掛の布団の上に突いて身を起して、両足で、掛けてあつた鼠ねずみいろ色の外套がいとうを下へ蹴落けおとして、立ち上がろうとした。しかし汽車の動揺に妨げられて、また腰掛の隅へ倒れ掛かつた。

女は驚いて飛び起きた。そして明りに掛けてある緑色の紗しゃを退けようとした。そのとたん女は男に抱き付かれた。

わがれ
がたがた顫ふるえている女を、男は自分の膝ひざの所へ引き据えて、咳し嗆わがれた声で、「マリイ、マリイ」と呼んだ。

女は振りほどこうとしたが、それが出来なかつた。健康であつ

た時と同じ程な力を恢かい復ふくしたらしい様子で、男はしつかり女を抱き締めた。そして唇を女の領えりの側へ寄せて囁ささやくのである。

「マリイ。覚悟をしているか。」

女にはその意味がちよつと分からなかつた。ただ際限もなく恐しいと感ずるだけである。しかし抵抗する力はない。叫おぼうと思つても声が出ない。

「覚悟をしているか」と、男は繰り返した。しかし男の手が少し緩んだので、男の唇、その息、その声が前より遠くに離れて感ぜられた。そして女は前より楽に息が出来るようになった。その時女はようようの事で、恐る恐る云いつた。「どうしようと仰おっしやるの

。」

「己おれのいう事が分らないのか。」

「放して下さい、放して下さい。」女は叫ぶように云ったが、その声は進行している汽車の響に消されてしまった。

男は少しも女の言う事に構わない。しかし手だけは放した。女は男の膝元から起き上がって、向いの腰掛の隅すわに坐った。

四十八

「己おれの言う事が分らないのか」と、男は繰り返した。

「どうしようと仰おっしやるの。」と、女が向いの腰掛の隅ささやで囁いた。

「己は返事が聞きたい。」

女は黙って顫ふるえている。そして早く夜が明ければ好いいと思うのである。

男は前まえ屈かがみになって小声で云いった。「もう時間が切迫して来るから、お前の覚悟は好いいかと問うのだ。」前屈みになって云うので、今度ははつきり聞えた。

「時間と仰やるのは。」

「お前と己との時間だ。」

男の心持ちが分かったので、女は咽のどを締め付けられるような気がして、何も言う事が出来ずにいる。

「お前、覚えているだろうな。この事をお前に相談する権利を、お前は己にくれた事がある。覚えているだろうな。」男の声は少

し優しくなつて、ほとんど嘆願するように聞える。男は女の両手を取つた。

男の詞は気味ことばの悪い詞であるが、その目が前のように空を睨くうんでいないのと、その声が前ほど人を嚇おどすようでないのとのために、女は少し落ち着いた。今見れば男は自分に頼んでいるようである。男はまた「お前、覚えているだろうね」と繰返したが、今度はその声が泣き出しそうに聞えた。

女はこの時ようよう物の言われるまでに、力を恢かい復ふくした。そしてまだ唇を顫ふるわせながら云つた。「あなた、それは子供らしい事ですわ。」

男は女の詞が耳に這はい入らないらしい様子をして、半分忘れた事

を、再びはつきり思い浮べるように穏かな調子で云った。「もうお暇いとま乞こいが近くなつた。お前と一しよに行つてしまわなくつてはならない。己達たち二人の時間がおしまいになるのだよ。」

女のためには、この詞が自分を縛つて、自分の運命を極きめてしまつて、逃れようのないようにするらしく聞えた。低い声で囁いたのであるが、如何いかにも力強く聞えた。もし同じ詞でも、荒々しく嚇すように言われたなら、抗抵しようもあつたのだらう。しかし今のように静かに言われると、なんとも答える事が出来ない。暫しばらくして男が少し前へ寄つて来たので、女の恐怖は極端に達した。今少しで男に飛び付かれて、咽を締められるのではあるまいかと思つたのである。そこで車室の反対の隅に飛び退のいて硝子窓ガラスまどを

打ち破つてでも、人に救いを求めようかと思つた。

しかしその瞬間に、男は女の手を放して、体を背後へ寄せ掛けて、もうこの上何も言う事はないというような様子をした。

「あなたはほんとに分からない事を仰やるわ。これから南の方へいらつしやつて、すっかり丈夫にお成りなさるのではありませんか。」女はこう云つて見た。

男は向側むこうがわで体を背後うしろに寄せ掛けて、物を案じている。

女は立ち上がつて、明りに被せてある緑色の紗しやを除けた。まあ、明るくなつただけでも、どんなにか力強く感ぜられるだろう。明るくなつてからは、胸の動悸どうきが鎮まつて恐怖が薄らいだ。女は元の所へ坐すわつた。

男は床を睨んでいたが、この時顔を上げて女と目を見合せた。そしてゆっくり云った。「マリイ。己は夜が明けたって、もう馬鹿な望みは起さない。南の方へ行つたつて駄目だ。きようそれが己にはつきり分かつたのだ。」

なぜあんなに落ち着いて来たのだろうか、女は思った。安心させて騙すのではあるまいか。逃げ出されては困ると心配して、あんな真似をするのではあるまいか。こう思つて、女は用心する氣になつた。そして男が何を言つても、その詞には耳を貸さないで、熱心に男の様子を観察している。その目付き、その体の運動に、一々注意している。

男が云つた。「お前には意志の自由がある。仮令これまで己

に誓った事があつても、己はお前に約束を履行しろというのではない。お前に脅迫しようとは思わない。まあ、その手を握らせてくれ。」

四十九

女は握手した。しかし自分の手を上にするだけの注意をした。

「早くその時になれば好い」と、男は囁いた。

「わたしあなたに忠告しますわ。少しお眠りなさるが好いのよ。

もう今に夜が明けます。そしてメランに一二時間で着くのです。」

「己はもう寐られない」と、男は云つて顔を上げた。そして女と

目を見合せて女の表情に、自分を疑って自分を窺^{うかが}っているところがあるのに気が付いた。そして女の腹がすっかり分つたと思つた。どうも女は己を寐かし付けて、次の停車場^{ていしやじょう}でそつと降りて逃げようとしているらしい。こう思うと、なんともかとも云われない心持ちになつたので、男は叫んだ。「お前なにかたくらんでいるね。」

女はぎっくりとした。「いいえ。」

男は立ち上がろうとした。

その様子を見るや否や、女は車室の反対の隅へ駈^かけて行つたので、男との距離が大ぶ大きくなつた。

しかし男はただ「息が、息が」と苦しそうに云つて、慌ただし

く窓を明けて、首を外へ出した。急に立ち上がろうとしたのは、呼吸が苦しくなったからであつた。

女は安心して、また男の側そばへ戻つて、窓から首を出している男を徐しずかに腰掛の上へ引き据えた。

「あなたそれはお為ために悪いわ。」

男は苦しげに息をしながら、腰掛の隅すわに坐っている。

女は片手を窓の縁ふちに掛けて、暫しばらく男の側に立っていたが、また自分の元の席に歸つた。暫くして男は楽な息をするようになって、その唇には軽い微笑ほほえみが見えた。女は氣の毒げに、心配らしく男の顔を見た。「窓を締めましようね。」

男は頷うなずいた。そして「朝だ、朝だ」と叫んだ。この時地平線に

赤み掛かった灰色の横雲が見えて来た。

二人は暫く黙って向き合っていた。それから男が、さっきの微笑みを口の周囲まわりに見せて云った。「お前は覚悟が悪いね。」

女は何か不断の調子で言つて遣りたかつた。男の言う事が子供らしいとか、なんとか云いたかつたのである。しかし男の微笑みに打ち破られて、その詞は出されなかつた。

汽車が速度をゆるめた。数分間にして、朝食あさしよくをするはずの停車場に着いた。

プラットフォオムには給仕がパンや珈琲コオファイイを持って駈け廻まわっている。旅客の中には、ここで下車するものもある。人の呼び交す声かまびすが喧しい。

女は恐ろしい夢の醒めたような心持ちがした。この世の常の停車場生活が、如何にも快いのである。自分の体になんの危険もないと思うので、すっかり安心して、座を立って、プラットホームを眺めていたが、とうとう一人の給仕に手招きをして呼び寄せ、一杯の珈琲を買った。

男は女の珈琲を飲むのを眺めていたが、女が勧めても、首を振って聴かなかつた。

五十

間もなく汽車がまた動き出した。停車場の屋根の下を出離れる

と、本当の昼の明りになった。なんといい天気だろう。それに向うには朝日に赤く染められた山々が聳そびえている。女はもう夜になつても、こわがらずにいられそうだと思つた。男は折々窓の外を眺めて、なるたけ女と目を見合せないようにしている。ゆうべの事を少しは恥かしく思つているのだなど、女は思つた。

汽車は少しづつ行つて一二度停とまつた。それからメラン停車場に這入はいつたのは、夏のように暖かく日の差している午前であつた。「さあ、着きました。やつとの事で。」女が嬉うれしそうにこいう云いつた。

二人は馬車を雇つて、似合にあわしい家を捜して歩いた。「別に儉

約をしなくても好い、まだ己の財産が無くなりはしないから」とフエリックスが云った。貸家があるたびに、馭者に車を留めさせて、マリイが間取りの様子や庭などを見て来る間、男は車の中に待っていた。

程なく気に入った家を見付けた。小さい家で、中二階のように出来ている。それに小さい庭が付いている。マリイは家主を連れて出て来て、車の中に坐っている男に、この貸別荘の好い所を話させた。男は別に異議がなかつたので、数分時間の後に、二人はその家を借り受けた。

女は忙しそうに片付け物をしているのに、男は構わずに寢部屋へ這入った。寢部屋の中だけは男もざっと様子を見廻した。随分

広くて気持ちが良い。明るい緑色の形紙で壁が張つてある。大きい窓が開けてあるので、庭から這入つた草木の匂が部屋一ぱいに満ちている。窓に向き合つて、寝台が二つ据えてある。男は草臥切つていたので、直にその一つに寝転んだ。

その際にマリイは家主の女にそこらを見せて貰つて、庭に出て見てひどく喜んだ。庭は高い格子のような柵で囲んである。裏門が付いていて、家の中を抜けずに這入つて来られるようにしてある。その裏門の外は広い道で、そこから停車場へは真っ直で、街道を過ぎるよりは早く往来する事が出来るのである。

部屋へ帰つて見ると、男は元のままに寝台の上に寝ていた。声を掛けて見たが返事をしない。ずっと近く寄つて見ると、顔の色

がいつもより一層青く見えた。もう一遍呼んで見たが、やはり返事をしない。また身動きもしない。

女はひどく驚いて家主の女を呼んで、医者しやうだいを請待する事を頼んだ。家主の女が出て行つた、直ぐ跡で、男は目を開いた。しかし何か言おうとして起き上がったが、直ぐ苦しげな顔をして倒れて、うめき声を出している。口の角すみから血が少し流れている。女は途方に暮れて側そばに寄つて見詰めていた。それからもう医者が来そうなものだど、戸口へ走つて行つたり、また病人の側へ戻つて来て、名を呼んで見たりした。そして心の内で、アルフレツトさんがいてくれたらと思つた。

ようようの事で医者が来た。頬髯ほおひげの白い老人である。女は出

迎えて、「どうぞどうにかして上げて下さいまし」と云った。それから逆上している気分を出来るだけ落ち着けて、これまでの様子話を話した。

医者は病人の様子を見て、脈を取って今血を吐いたばかりのところだから、精^{くわ}しい診察は出来ないと云って、色々養生の事を話した。

医者が帰り掛けるので、女は門口まで送って行って、「どうぞごさいましょう」と問うた。

「まだなんとも云われませんね。先^まず暫^{しばら}く忍耐して御様子を見ておいでなさい。決して失望するには及びません。」医者はこう答えた。そして今晚また見に来るといふ約束をして、馬車に乗って、

優しく平気な様子で会釈をして、帰って行つた。その様子がまるで形式的な訪問をした人のようであつた。

女はちよつと途方に暮れて立っていたが、忽ち思い附いた事があるらしく、一人頷うなずいて郵便局へ駈かけて行つた。医学士に宛あてた電報を打つたのである。

電報を打つてしまうと、気分がよほど落ち着いた。そこで内へ帰つて、留守中病人の世話をしてくれた家主の女に礼を云つて、着いた早々色々世話になつて済まないが、いずれお礼をすると誓つた。

男は旅行服のまま、生しょうき氣を失つて床とこの上に寝ている。しかし息はよほど楽になつた。

マリイが病人の枕まくらもと元に腰を掛けていると、家主の女が慰めて、これまで大病人がこのメランに来て直った話をした。それから自分も若い時病身であったが、今はこの通り丈夫になっていると云った。それから身上話しをし出した。この女は随分不幸な目に逢あつたというのである。亭主は結婚してから二年立つと死んでしまった。息子は遠方に行っている。望みを言えば限りはないが、今この家を預つて人に貸しているのは、自分の身の上を取つては不足ではない。本当の家主はポオゼンに住んで居て、月に二度位見廻りに来るだけである。こんな風に色々細かい事まで話し出して、大層親切そうにする。それから荷物をほどく手伝いをしようというので、マリイは喜んで手伝つて貰つた。

五十一

程なく^{ひるしよく}昼食^{ひるしよく}を運んで来た。病人のと云^いつて、牛乳が添えてある。

その内病人が少し体を動かした。なんだか気が付きそうな様子である。暫^{しばら}くして實際気が付いたと見えて、頭をあちこち動かして、とうとう自分の上にかぶさるようにして看病しているマリイの顔に目を付けた。そしてにつこりして、静かに手を握った。

「一体^{おれ}己はどうしたのだろう。」

午後になって医者^いが来た。大分^い様子が好いからというので、着

物を着換て、寝台ねだいに寝るように差図した。病人はおとなしく医者
の言うがままにしていた。

マリイは病人の側そばを離れずにいる。まあ、なんとという長い半日
だろう。医者と言付けで開けて置いた窓から、庭の草木の匂においがほ
のかかよに通つて来る。あたりはひっそりしている。マリイは日の光
が床ゆかの上に落ちてきらきらしているのを、無心で眺めている。そ
の手を病人は握つて放さずにいる。男の手は冷たくて湿つている。
それが女には心持が悪い。女は折々何か言おうと思つて、力つとめ
て口を開くあ。「もう大分好いでしよう。それ御覧なさいな。あな
た何も言うのではありませんよ。物を仰おっしやつては悪いのですから。
あさつてあたりはきつと庭に出て御覧なさる事が出来ますわ。」

男は頷うなずいて微笑ほほえむのである。

女は心の内に、いつアルフレットさんが着くだろうかと、時間の勘定をしている。あすの夕方には来られるはずである。そうして見ればまだ一晚と一日だけは待たなくてはならない。ほんにあなたの方が早く来て下されば好い。

半日が如何いかにも長い。日は入いった。部屋が次第に薄暗くなつて来る。しかし庭の方を見れば、白い砂の敷いてある道の上や、格子になつてゐる柵さくに、黄いろい日の光がまだあたつてゐる。

突然男が「マリイ」と呼ぶのが聞えた。庭の方を見ていた女が、急に病人の方へ振り向いた。

「もう大ぶ好いよ」と、男が意外に大きい声で云つた。

「そんなに大きな声をしてはいけませんよ」と、女が優しく留めた。

「大ぶ好い。今度のは旨く経過したようだ。これが病気の転機になるのかも知れない。」今度は囁くように云った。

「きつとそうですわ。」裏書をするように女が云った。

「己は空気が好いから好くなりそうに思うのだ。しかし今のような奴がまた来てはかなわぬ。今度は駄目だ。」

「だって、もう御気分が好いじゃありませんか。」

「いや。兎に角お前は親切だよ。好く気を付けていてくれ。」

「そんなことは仰やるまでもありませんわ。」女は少し不平らしく云った。

「己がいよいよ行く時には。お前も一しよに連れて行くのだよ。」
男はこう囁いた。

その詞を聞くと同時に、女は非常に恐怖に襲われた。なぜこんなにこわいのだろう。何もこの男がこつちに危険を加えようとは思われない。暴行を加えようと云つても、もうこんなに弱くなつていてはそれは出来ない。体力から言つて見れば、今ではこつちの方が病人の十倍も強い。一体男はどうしようと思つているのだろう。今も空を見たり壁の方を見たりしているが、なんと思つてあんなに見廻みまわしているのだろう。もう一人で起き上がる事も出来そうにはない。それに刃物なんぞは持つていない。それとも毒でも持つているのだろうか。事に依よつたら、どうにかして毒を手に

入れて、現に持っていて、それをこつちの飲むものに入れようとするかも知れない。それにしてもその毒はどこにしまつてあるだろう。さつきも着物はこつちが着せ替えて遣つた。粉こぐすり薬か何かを紙入に入れて持っていはしないか。紙入はあの上着にあるはずである。いやいや。さつきのような事を言つたのは、あれは熱が言わせたのだ。それにあんな事を言つて、こつちを苦しめようと思ふだけの事かも知れない。

五十二

しかし熱があんな事を言わせるとして見れば、同じ熱がどんな

事を実行させないにも限らない。事に依よつたらこつちが眠つて
る内に、咽のどを締めようとするかも知れない。それは格別力がなく
ても出来る事である。その時氣を失つたら、跡はどうせられるか
分からない。なんでも今夜は寐ねずにいなくてはならない。あした
はアルフレットさんが来るのだから。

日が段々暮れて来た。もう夜になつた。病人はその後のち一言ことも
のを言わない。もう口の周囲まわりに見えていた微笑ほほえみの影も消えた。
今は真面目まじめな、陰気な顔をして空くうを見詰めている。

暗くなり切つた時、家主いえぬしの女むすめが蠟燭ろうそくを点して来て、病人の
寝ねている側そばの、今一つの寝台ねだいを拵こしらへに掛かつた。それを見てマリ
イはそれには及ばぬと、手真似てまねで知らせた。

それが病人に分つたと見えて、「なぜ拵えさせないのだ」と云った。それから間を置かずに、「そんなにしなくても好い、お前も寝なくてはいけない、己はもうこんなに好いのだから」と言い足した。

この病人の詞が、マリイの耳には嘲りのように聞えた。

女はとうとう寢台へ行かずにいた。病人の寢台の側で目を瞑らずに、長い沈黙の夜を過している。病人は大抵静かにしている。女は折々病人が寐た振りをして、こつちに安心をさせようと思うのではないかと疑った。病人の顔を好く見ようと思つても、蠟燭がちら付いて、病人の目の周囲や、口の脇に、痙攣するような運動があるように見えたり、またそれが明りのせいのように思わ

れたりして、どうもしかと見定められない。

女は立つて窓まで出て庭の方を眺めた。外は鈍い青色を帯びた闇やみである。少し乗り出して仰いで見ると、庭の木立の真上の所に月が出ている。風はちつとも吹かない。あたりが如何いかにも静かで、何一つ動くものがないので、暫しばらくじつと見ていると、向うにはつきり見えている外そとがこいの柵さくがじりじりと手前の方へ寄つて来て、暫くしてまた留まるように見える。

夜中過ぎに病人が目を醒さました。女は枕まくらの歪ゆがんだのを直して遣やった。その時ふと思ひ付いて指で枕の下を捜して見た。何か隠してありはしないかと思つたのである。しかしなんにも無かつた。

女の耳には「お前を連れて行く、お前を連れて行く」という詞

が絶えず響いている。しかし好く思つて見れば、男が真面目にそう思つていたら、そんな事を言うはずがないようでもある。男が実際何かたくらむ程の氣力を持つているだろうか。もし持つているとしたら、飽くまで目的を隠して、けどられないようにすべきではあるまいか。事に依つたらこつちは病人の譫語うわごとを氣にして、子供らしく恐れているのかも知れない。

女は段々眠たくなつて来た。そこで万一の用心に、自分の椅子いすをずっと遠くへいざらせた。しかしどうしても寐入らない積りでいる。

その内思想うちが段々不明瞭ふめいりようになつて来た。昼間の明るい意識から次第に灰色の夢の薄明りに這入はいつて行く。昔の記念が浮ぶ。楽

しかつた時代の昼の事、夜の事が思い出される。男が自分の体を抱いていてくれて、部屋の内にも、新春の息が通つていた時の事を思い出す。

女は庭の物の香かが自分の坐すわつていゝる所まで這入つて来なくなつたように思つた。窓の所まで行つて、その香かを吸い込みたいたいのである。なんだか病人の髪いの毛から、厭いやな甘いつたるい勻においが立ち昇つて部屋中に満ちていゝるように思ふのである。

いよいよおしまいになつたらどうだろう。この「おしまいになつたら」といふ事を思つて見ても、もう別段驚きもしない。心の底の恐ろしい願いいを、「当人も楽になるのだから」といふ偽善の同情で覆い隠す、この如何いわしい詞が口の内に浮んで来ても、もう

驚かなくなっている。そうなたらどうだろう。女は自分の体が外の庭に出て腰を掛けていて、その顔が青ざめ、目が泣き腫れているのを見るように思う。しかしこの悲哀の徴はただ上辺ばかりである。心の内には、これまで久しく味わずにいた、嬉しい平和が来ている。見ている内にその姿が立ち上がって柵の外へ出て、道をゆつくり歩いて行く。もうどこへでも自由に行かれるのである。

五十二

こんなにぼんやりした想像をしていながら、女は男の寐息ねいきを聞

く事を怠らない。寐息は折々うめき声になる。

夜は次第に明けて来た。やつと明るくなつたと思うと、家主の女が来て交代してくれようと云つた。マリイは嬉しうに同意して、病人を一目見て、次の間へ出た。そこには家主の女が長椅子を寢床に拵えて置いてくれたのである。まあ、なんという好い心持ちだろう。女は着物を着たまま横になつて、直ぐに目を閉じた。

よほど時間が立つてからマリイは目を醒ました。部屋は気持ちの好い薄明りになつてゐる。鎧戸を締めた窓から日の光が狭い筋になつて差し込んでゐる。女は急いで起き上がつて、直ぐに自

分の現在の位置をはつきり考える事が出来た。きようは医学士のアルフレットさんが着くはずである。これから出逢わなくてはならない、暫くしばらの間の陰気な境きようがい界がいに対して、この人の来るといふ事がよほど力になるのである。

女は躊躇ちゆうちよせずちよに病人の部屋に這入はいった。戸を開けた当座一秒時間程は病人の寢床に掛けてある白い布きれに目を射られて、物が見えなかつた。暫くしてから見ると家主いえぬしの女がいる。それが指先を口に当てて、物を言うなという合図をして椅子いすから立ち上がつて、爪先で歩きながら、マリイを出迎えた。そして「好よくお休みです」と囁ささやいて、それから今までの様子を話した。一時間程前までは、熱がひどい様子で目を醒さましていて、二三度奥さんの事

を聞かれた。朝早くお医者様が来て見たが、容体は前と変った事もないという事であつた。その時奥さんを起そうかと思つたが、医者様がそれには及ばないと云つた。医者は午後以内に、また一度来て見るはずだというのである。

マリイはこの話しを注意して聞いて、自分に代つて看病してくれた礼を言つて、病床の側の椅子に腰を掛けた。

きようは暖かい日である。ほとんど蒸し蒸しすると云つても好い位である。もう正午に間まもあるまい。庭の方を見れば、静かな重くろしい日の光が差している。

寝台ねだいの上を見て、最初に目に付いたのは、病人の両手である。

両手は着布団の上に出ていて、折々ぴくぴくと動いている。それ

から顔を見れば下顎したあごが締りなくなるとるんで、唇かろが軽く明いている。色は死人のように青い。数秒時間呼吸の息やんでいる時がある。それから上うわつら面めんでするような、啜すするような息をする。

「事に依よつたらアルフレットさんの来ない内に、死んでしまうのではあるまいか」と、女はちよつと思つた。今寐ねている病人の様子を見れば、顔付きに悩んでいる青年の表情が見える。ひどい苦痛の跡の弛緩ちかん、勝算あきちの無い闘いの跡の諦めあきらが見える。こういう容態が昨今暫らくの間見えずにいたという事に、女は急に気が付いた。それは病人が女を見るたびに、その顔に不平が現われていたからである。多分今は夢の中でも女を憎んではいまい。あんなに美しい顔付きになつてゐるから。

女は今目を醒ましてくれれば好いと思った。そしてじつと病人を見てみると、なんとも言われぬ悲しみと悔^{くや}みとが起つて来る。今ここで死に掛かっているのは恋人に違いない。女は急に避^さくべからざる、恐ろしい運命に自分が襲われるのだという事を感じて、一時^じに何もかも分かつたように思った。やはりこの男が我が幸福、我が生命であつたのだ。自分はこの男と一しよに死んでも好いとまで、思つた事もあつた。それにその男の帰らぬ旅に赴^{むか}ひ一刹那^{せつな}まで、今迫つて来ているのである。こう思つて見れば、これまで一時^じ自分の胸の上にかぶさつていた冷やかさ、何日も続いていた無情が解^かせられないもののようになつて来る。それでも今はまだ男が生きている。息もしている。夢でも見ているかも知れない。し

かしかもう程なく死んでしまうだろう。そして葬られてしまうだろう。どこかの静かな墓地の土の下に埋^{うめ}られて、次第に朽ちて行くのに、その土の上では何事も無い日が立って行く事だろう。そして自分は生き残って、人^{ひとまじわ}交りもするだろう。自分の愛していた男は沈黙した墓の中にいるという事を知っていながら、人交りもするだろう。

女の顔を伝わって、涙が止^{とめど}所もなく流れる。とうとう女は声を立てた。その時病人が動いた。女は急いでハンカチーフで頬^{ほお}を拭いた。その時病人は目を開^あいて、何か問いたそうな目^め付きで、暫く女をじつと見ていた。しかし何も言わなかった。それから二三分立ってから、男が「おいで」と囁^{ささや}いた。

女は椅子から立ち上がって、男の上に身を屈めた。

五十四

男は腕を伸ばして女の頸を抱きそうにしたが、それを止めて、また腕を卸した。

「お前泣いたのか。」

「いいえ」と女は急に答えて、額に飜れ掛かっている髪を掻き上げた。

男はまたじつと真面目に女の顔を見て、それから顔を反けた。何か物を案じている様子である。

女は考えた。それは医学士に電報を打った事を、病人に打ち明けて話したものだろうか、どうだろうかと云う問題である。友^{ともだ}達が来るのだから、知らせた方が好く^よはあるまいか。いやいや。そんな必要はあるまい。なに、学士が来た時に、自分も不意であったという風をすれば済むのである。

その日の暮れるまで、女は鈍い緊張を感じて、来るはずの人を待っていた。目前の事は総て霧の中^{すべ}で見えるもののように、ぼやけて過ぎ去ってしまう。医者^{いしや}の見舞いなんぞは、なんでもなく済んでしまった。病人は始終何事にも感ぜずにいる。呻^{しんぎん}吟して半眠りになつている状態から、折々醒^さめて、なんでもない事を問うたり、何か欲しがったりする。時間を問う事もある。水を飲みたが

る事もある。家主いえぬしの女が出たり這入はいつたりする。マリイは始終外へ出ずに、病人の側そばの椅子いすに掛けている。時々ねだいは寢台うしろの横木に手を掛けて立っている事もある。また窓の所へ行つて庭を見ている事もある。庭では木の影が段々長くなって、とうとう草原や道の上を闇やみが這い寄つて来た。

少し蒸し蒸しするような晩である。病人の枕まくらもと元の卓たくの上うへに点つけてある蠟燭ろうそくの火がほとんど少しも動かない。すつかり暮くてしまつて、向うの奥に見える青み掛かつた鼠ねずみいろ色の山の上に月つきが出た頃ころ、風が少し吹いて来た。それが額かぶたに当るのを、女は好いい心持ちだと思つた。

病人も同じ感じかんじでいるらしく、頭を動かして、大きく開けた目

を窓の方へ向けた。それから深い深い息をして、「ああ」と云つた。

女は布団の脇わきへ垂れている病人の手を取って、「何か上げましょうか」と云つた。

病人はそつと手を引いて、「マリイ、こちらへおいで」と云つた。

女は側へ寄つて、頭を病人の枕近く寄せた。

病人は女の髪の上に、祝福をするように、手をひろび上げて載せて、小声で、「お前のこれまでの親切は難ありがた有がたかつたよ」と云つた。

女は頭を病人の枕に寄せ掛けていたが、目に涙が湧わいて来た。部屋の中はひっそりしている。遠くから汽車の汽笛の声が消え

消えに聞えて来た。その跡はまたしんとして、夏の夕べの重くろしい、甘いような、不思議な感じが満ちている。

病人が突然寢床から起上がった。その動作が如何にも急で劇しかったので、女はびっくりした。そして頭を上げて、病人の顔をじつと見た。

病人は両手で女の顔を挟んだ。昔可哀がった時にしたような仕方である。「マリイ。約束の事はどうしてくれるのだ。」

「約束とはなんでしよう。」こう云つて、女は病人の手を放そうと思つた。

病人は平生の力を悉く恢復し得たように、しつかり女の頭を抑えて放さない。「己と一しよに死んでくれる約束じゃないか」

と、忙せわしい語調で云つて、女の顔の側へびつたり顔を寄せた。病人の息が女の口に障る。

女は顔を引こうとしても引かれない。

病人は自分の詞ことばを一句一句女の口に注つぎ込むように言うのである。「己は一人で行くのは厭いやだから、お前を連れて行くよ。己はこんなにお前を愛しているのだから、お前を手放して置く事は出来ない。」

女は恐ろしさに麻痺まひしたようになってゐる。その咽のどからは自分にもほとんど聞えない位な、咳せわが嗽せわがれた叫び声が出た。顛こめかみ顛こめかみと頬ほおとをしつかり抑えられていて、頭を動かす事が出来ない。

病人は頻しきりに口説き立てる。湿っぽい、熱い息が女の顔に触れ

る。「一しよだ。一しよだ。お前の意志でそう極めたのじゃないか。一人ではこわくて死なれない。一しよに死んでくれるかい。」女は足で自分の椅子を押し退けた。そして鉄の籠たがを脱はずすように、自分の頭を病人の手から引き放した。

五十五

病人は女の顔を挟んでいた手を、そのままにしている。丁度まだ女の頭が間に挟まっているように、空くうを掴つかんでいるのである。そして女の頭が抜け出したのが、まだ分からないかと思われるような顔をして目を据えている。

「厭いやです。厭いやです。わたくしはそんな事は出来ません。」女はこ
う叫んで戸口の方へ駈かけ出した。

病人は寢台ねだいから飛び降りたい様子で、起き上がった。しかしも
う力を使い尽したと見えて、死物のようにばたりと寢台の上に倒
れた。

女はそれを見返らずに、戸を引き開けて、次の間まに走り抜けて、
廊下へ出た。ほとんど夢中である。男が自分を締め殺そうとした。
顛こめかみ顛ほおや頬ほおから、頸くびへ滑り落ちようとした、男の指をまだ肌が感
じている。女は門口へ出た。そこには誰もたれいない。家主いえぬしの女は
夕食の品物を買いに出たはずだという事を思い出した。

どうしよう。女は引き返して廊下を抜けて、庭へ出た。人に追

い掛けられるように、草原くさはらや道を横切つて、庭の向うの端はしまで行つた。そこから振り返つて見れば、病人の部屋の窓が見える。窓には蠟燭ろうそくの火がちらちらしているが、その外にはなんにも見えない。

「どうしたのだろう」と独語ひとりごとを云いつた。そして自分もどうして好いいか、分らなかつた。ただ意味もなく柵さくの内をあちこち走り廻まわつてゐる。

その時ふと思ひ出した事がある。アルフレットさんが来るはずだつた。丁度今頃いまごろ来るはずだつた。こう思つて柵の格子の間から、月の差している道を眺めた。停車場ていしやじょうの側そばまで見えているのである。

女は庭の戸のある所へ駈け寄つて、戸を開けた。目の前には人のない、白い道が見えている。もし外の道からおいでなさりはすまいか。いや。あそこに人影が見える。次第に近くなつて来る。急いで来る男の姿である。あの方だろうか。

女は二三歩走り出した。「アルフレットさんですか。」

「マリイさんですね。」

待っていた医学士が来たのである。女は嬉しさに泣きたくなつた。学士が側へ歩み寄つた時、女はその手に接吻をしようとした。

「どうなすつたのです。」

女は黙つて学士の手を取つて、引き摩するようにして跡へ引き返

した。

部屋の中では、フェリックスが暫く茫然しばらくぼうぜんとしていたが、また起き上がって、あたりを見廻した。女はもう逃げて、自分一人になつていたのである。咽のどを締め付けられるような恐怖が襲つて来た。どうしてもあの女を側に引き付けて置かなくてはならないと思ふより外、なんにも考えて見る事が出来ない。

一ひとはね跳はねに寝台から飛び出した。しかし立っている程の力がないので、また仰向けに寝台の上に倒れた。頭の中ががんがんに鳴っている。また起き上がって椅子いすの背を掴つかんで、椅子を前へずらせながら歩き出した。「マリイヤ。マリイヤ。己おれは一人では死なれない。

い。」

女はどこへ行つたのだらう。行く所はないはずだが。こう思いながら椅子を杖つえにして、いざりながら窓の側まで来た。庭が見える。蒸暑い晩の、青み掛かった月の光が差している。それが目の前にちらちらして、草や木が踊っているようである。ああ。これが己の体を直してくれるはずの、南の国の春であつた。この空気だ。この空気だ。こんな空気がいつも己を吹いていけば、健康にならなくてはならないはずだと思つたのである。

ああ。あれはなんだ。病人は地の底にあるように見える柵さくの格子のあたりから、青い月の光に照らされて、真つ白に光る小石の道を歩いて来る女の姿を見付けた。女は飛ぶように駈かけて来る。次第に近くなる。マリイだ。マリイだ。しかしその背後うしろから男が

来る。マリイと一しよに男が来る。恐ろしい大男のように見える。これまで見ている内に、柵の格子が踊つて来る。何もかも踊つて来る。遠方から歌のような物音が聞える。好い音だ。好い音だ。病人の目は昏くらんでしまった。

マリイと学士とが駈け付けた。窓の所へ来て、女は立ち留まつて、恐る恐る部屋の中を覗のぞいた。そして「ああ、いらつしやいませんわ、寝台はからつぽです」と叫んだ。

その跡で突然女はきやつと云つて倒れそうになつたので、学士が抱き留めた。学士はそつと女の体を脇わきへ寄せて、自分が窓の中を覗いて見た。

部屋の中には、窓の直すぐ下に、白い襦じゆ袷ばん一つを着て、フェリ

ツクスがぼったり倒れて、両足を大きくひろ拡げている。片手はひっくり返った椅子の背を握っている。口の角から一筋の血があご腮の方へ流れている。唇とまぶた瞼とが、まだびくびく動いているらしい。しかしよよく見れば、それは月の光が青ざめた顔を照して人の目を惑わしていたのであった。

(明治四十五年一月—三月)

青空文庫情報

底本：「於母影 冬の王 森鷗外全集12」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年3月21日第1刷発行

底本の親本：「鷗外全集 第九卷」岩波書店

1972（昭和47）年7月22日発行

初出：「東京日日新聞」

1912（明治45）年1月1日～3月10日

※「匂」と「※」#「釣のつくり」、第3水準1-14-75]」、「嘘」
と「※」#「言+墟のつくり」、第4水準2-88-74]」の混在は、
底本通りです。

※「合点」に対するルビの「がてん」と「がってん」の混在は、底本通りです。

※誤植を疑った箇所を、親本の表記にそつて、あらためました。

入力：門田裕志

校正：館野浩美

2019年1月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

みれん

シュニツツレル Arthur Schnitzler

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 森鷗外訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>